実学としてのアメリカ文学研究

― 歴史・人物・作品・映画から学んだこと ―

橋本賢二　編著

はじめに

橋本賢二

この論集は 2007(平成 19)年度に、大阪教育大学教養学科・欧米言語文化講座(英語圏)で開講されたアメリカ文学関連の科目（「米文学史」「米文学研究」等）を受講した学生たちが、教官の指導のもとに、「自分自身」を「文学研究」の中に描き込むことにより、誰にも真似することのできない「世界にひとつだけの論文」を書こうと試みた努力の記録です。

とかく今の時代は、インターネットなどの普及により、欲しいデータはいつでも、どこでも世界中から苦もなく、居ながらにして手に入れられる状況となっています。そんな時代には、小さなレポートにおいても、自覚のないまま「コピー＆ペースト」により提出論文を作成してしまい、そのことの非に気づかない危険性さえ潜んでいます。卒論を「数万円」、博士論文でさえ「数十万円」で代筆するという業者が現れるに至り、もう一度基本に立ち返り、整理しなおしておかなければならない事柄があるようです。

そこで私たちは今回、「誰にも真似されたり、盗まれたりすることのない、自分だけにしか書けないタイプの論文」というものを目指してみました。

学生たちの中心は「米文学史」の受講者たちであったために、「アメリカ文学の歴史」のなかから各人が最も興味を持った作家や作品、並びに時代や歴史、アメリカで生み出された「文芸」にまつわるあらゆるものもその対象とすることにしました。アメリカで生まれた「ミュージカル」や「ジャズ」、20 世紀の主役となった感のある「映画」や「歴史上の名演説」も立派な「文学」と言えるでしょう。それらを対象として、ただ従来のように内容を調べ上げ報告するのではなく、「そのことを調べる過程で自分が何を知り、学び、そしてどう成長していくのか」をその論文の中心に据え、「文章の中に調べている自分の姿が見えるように書いて下さい」というのが私の指示でした。

論文の対象は多岐にわたりました。まず巻頭には、すべての論のスタートラインとして、アメリカの国民性がどのようなものであるか、その地域的特徴は、またそれらの源流はどこにあるのかといった文化論が取り上げられています。さらに、仏語圏の学生たちはイギリスより先にアメリカを支配していたフランス文化の歴史を、また独語圏の学生たちは、「アーミッ

シュ」など、アメリカに今も残る古き時代の独特なドイツ文化を取り上げています。アメリカがイギリスから独立する以前の植民地時代の代表者として「ベンジャミン・フランクリン」を取り上げた学生たちは、古くさいように思われがちな300年近くも前の人の格言の中に、今日の若者にも有益な言葉を見いだし、その諺や教えに触れた瞬間の「成長」を示してくれています。

教職を目指す学生は熱心に「教師が主人公」の作品を捜し、その職業の扱いがヨーロッパに比べアメリカにおいては低いことを知り、その制度のしくみを調べました。「短篇小説の祖」ポーはその作品と生涯の両方が学生たちをひきつけました。ひとつの文芸でもある「ゲティスバーク演説」の政治家リンカーンも登場します。これは「私には夢がある…」の有名なスピーチで「ワシントン大行進」を導いたキング牧師の名演説と同じく、人の心を揺り動かした「ことばの力」の例でしょう。マーク・トウェイン、オー・ヘンリー、ヘンリー・ジェイムズ、フィッツジェラルド、ヘミングウェイといった、いつの時代も世界中で愛され、読まれ続けている作家たちは、また今も若者の心をしっかりととらえたようです。やはりそこには永遠に近い磁力が存在しているのでしょう。『風と共に去りぬ』は映画と小説が見事に融合した作品で、主人公スカーレットと作者ミッチェルの生き方が学生たちにひとつの指針を与えました。

1993年にアフリカ系アメリカ人女性として初めてノーベル文学賞を受賞したトニ・モリスンは、奴隷として無理やりアフリカから連れて来られたアフリカ系アメリカ人たちの、アメリカにおける地位の変遷における象徴的人物の一人です。1865年南北戦争終結により奴隷制度がなくなったあとも、平等な扱いを受けることなく100年もそのままに捨ておかれたアフリカ系の人々が、自ら文学を書き始めるようになることが20世紀も深まってからであることに学生たちは驚きを隠せません。

論集の後半は映画論になっています。「米文学史」以外の科目を受講した学生たちには、映画を対象とすることも許可しました。20世紀後半は映画が小説以上の産業となり、新たな文芸ジャンルとなった時代です。映画研究はうっかりすると浅薄なものになってしまう危険性があります。長篇小説に比べ、持ち込める言葉の量が極端に少なく、時間も２～３時間しか与えられていません。これは短篇小説の分量であり、使われる言葉もほとんどが会話となります。またこれらの映像作品と、原作や事実との区別もはっきりさせないまま「研究」を始めると、途中で瓦壊してしまいます。それゆえ扱う時には一層の注意が必要となります。リアリティからＳＦ、ドキュメンタリーから自叙伝風の作品までいろいろありますが、単なるエン

ターテインメント作品を選んだ学生はおらず、何らかの重要なメッセージを感じ取れる作品のラインナップとなっています。「製作者のメッセージと自分の学んだことを混同しないように」という注意をよく聞いて、自分を書き込みながらオリジナルな「世界にひとつの映画批評」ができました。

どんな人が、どんなことを学んだのだろうという疑問に答えるべく、各論文の頭には、執筆者のプロフィールを示すデータが貼り付けてあります。これにより、研究をする人が論文の中に生き生きと示されることを期待しています。読者はこの両者の化学反応を見ながら、またそこからひとつの景色にたどりつけることでしょう。

「文学研究」「文芸批評」「芸術評論」は、元来実生活とは関係の薄い学問のように思われがちです。「知っておけばいつの日にか人生の中でどこかで役立つはず」と言ってみても、すぐにその成果を数値化までして示すことを求められるせわしい時代潮流のなかにあっては、その有益性を証明することは苦難の業となりつつあります。そんな折に、今回の試みは一石を投じるものにはなったはずです。まだ日本中のどこでもやっていない「文学研究」と「実用性」を結びつけたこの論集の作成という小さな試みは、執筆した学生たちが「はっきりと認識した何かを学んだ」だけではなく、それをまたのちに読んでいただくことになる読者に、やがてそこから「実生活に役立つ何か」をひとつでも見つけてもらえるか、またはそのきっかけとなるならば、まずは成功だったとしておきたいと思います。

This book is the fifth annual publication of collected theses from the Faculty of American Literature in Osaka Kyoiku University. It is the result of classes taught on “A History of American Literature” and “American Literary Studies” and contains works written by both students and teaching staff. Each student chose his/her own theme from the American literary world and wrote a new type of short report. They were asked to write what they felt and learned while researching American literature.

Although it is easy nowadays to find a lot of information about any topic through the internet, in this course we asked students to write their reports based on their own individual feelings. Students were able to choose any topic in the field of American literature such as writers, people, novels, dramas, movies, or historic events. They were eager to make some contribution to the field.

Kenji Hashimoto

目　次

◆はじめに ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
橋本賢二

文芸批評と実用科学のはざまで ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 7
橋本賢二

―――――― 植民地時代から南北戦争へ ――――――

クレヴクールのアメリカ観に習う ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 15
矢野菜穂子

フランス人から見たアメリカの先住民、そして大地 ・・・・・・・・ 20
田中大一

ベンジャミン・フランクリンの魅力 ・・・・・・・・・・・・・・・・・ 24
福田真弓

ベンジャミン・フランクリンの生涯・格言から学んだこと ・・・・ 28
喜久田尚也

米文学から見る教師像 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 32
上鶴智子

エドガー・アラン・ポー　～推理小説と文学的特徴～ ・・・・・・ 36
槇野健太

エドガー・アラン・ポー　～大作家の生涯～ ・・・・・・・・・・・ 40
加納将貴

エイブラハム・リンカーン
～努力し、成功し、愛されたアメリカンドリーム～ ・・・・・・ 44
井上繭加

『森の生活』とアーミッシュの暮らしから学ぶもの ・・・・・・・・ 48
橋本加奈子

—— リアリズムの夜明けからロストジェネレーション、そして戦後へ ——

『トム・ソーヤーの冒険』の魅力 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 55
和田綾輔

O・ヘンリーの「最後の一葉」から学んだこと ・・・・・・・・・・・・ 59
爲家弥生

オー・ヘンリーの人生と作品からメッセージを探る ・・・・・・・・ 65
乾恵利

先駆者としてのヘンリー・ジェイムズ —新しいことへの挑戦— ・・ 70
田中めぐみ

『グレート・ギャツビー』から学ぶ人生の幸福と苦労 ・・・・・・ 74
畑美寿穂

F・スコット・フィッツジェラルド『偉大なるギャッツビー』の魅力 ・・・ 78
田中真裕

ベストセラー小説『風と共に去りぬ』の魅力とは ・・・・・・・・・ 82
木下めぐみ

マーガレット・ミッチェルとスカーレット・オハラ
～『風と共に去りぬ』にみる、二人の女性～ ・・・・・・・・ 86
源麻由

ヘミングウェイ『老人と海』に隠されたメッセージ
～私にとってのメカジキとは～ ・・・・・ 91
古谷容子

アーネスト・ヘミングウェイ　信念と勇気のメッセージ ・・・・・ 95
菱川美保

JAZZでみるアメリカの人種背景 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 99
木下加奈子

キング牧師が教えてくれる生きるヒント ・・・・・・・・・・・・・・ 103
山場友紀子

現代・ミュージカル・映画

『タイタンズを忘れない』という作品から得たもの ・・・・・・・・ 113
中尾晋吾

トニ・モリスンから学ぶ生き方 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 118
山根志保

ミュージカル ～人を魅了し続けるもの～ ・・・・・・・・・・・・・ 122
鶴崎和寿

*Stand By Me*から見る思春期像 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 126
山地宏幸

ティム・バートンの魅力 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 130
馬越由佳

映画『8 MILE』から学んだこと
～超える、超えないは自分しだいだ～ ・・・・・ 134
古賀亮

ペイ・フォワード ～トレヴァーから学んだこと～ ・・・・・・・・ 140
田中絵美

『A.I.』を通して学んだこと ―技術発展への憧れと危惧― ・・・ 146
守田静佳

『不都合な真実』―脅かされる私たちの地球― ・・・・・・・・・・ 151
池田真利子

『アイ，ロボット』～我々と機械はどのように関わるべきか？～ ・・ 158
足立亜衣莉

◆あとがき ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
橋本賢二

文芸批評と実用科学のはざまで

橋本賢二

賞味期限の改ざん、食品の偽装、耐震設計の不正工作、遊戯施設の点検整備不良。いちいち挙げていてはきりがないほどの不祥事がマスコミを賑わし、数多くの謝罪公告が途切れることなく、新聞の最下段に掲載され続けている。人々の目はこれまで漫然と存在し、たいていは看過されてきていたものごとに対し、厳しい視線を注ぐようになってきた。政治家の資金運用における不正、官僚の天下り、年金の不安。構造改革と機を一にして、あらゆる効率化を求められた企業は、仕事に対し「極限の低価格と安全な高品質」を同時に追求せざるを得ない厳しい時代へと突入した。低賃金国への労働力のアウトソーシングにより、日本の労働者の賃金は据え置かれ、好景気の実感は薄いものとなっている。

この「効率化」の波は研究・教育の現場である大学にも及び、実践的に役立たない学問に対する風当たりは強くなり、理工系では、基礎科学の分野が、企業の製品開発には直接結びつかないという理由で、予算が縮小され、人員が削減される方向にある。

文系の分野においては、小さな大学の多くが「文学部」の看板を早々と降ろし、実用向きの「コミュニケーション」や「文化」「国際」という名称で方向転換を図(はか)ってきていたが、ここにきて、それでも追いつかず「産業」とか「社会」、「情報」や「ビジネス」などの名称を組み合わせた「実用的な企業向けの学部」へと転身を始めている。

アメリカにおいてさえも、文学関係の研究書に対し、助成金がつきにくい状況が生まれてきている。「金になる学問かそうでない学問か」という明らさまな線引きが、「売れる本、売れない本」という指標によっても示される時代となってきている。

大学の教育においても、今日では「授業に対する評価」が学生によりなされ、それに対するフィードバックが教師側に求められることとなっている。

かつては芸術の一分野である文学を研究するということに対し、それほどの目標はなくても良かったのかもしれない。しかし今日ではすでに、その論文がどれくらいの「社会的・経済的・文化的影響」を与えたかさえ自己申告しなければならない時代となっている。

「文学は人の心を育むものであり、金もうけとは関係ない。経済学ばかりに操られているのは資本主義という20世紀の宗教に心が毒されているからだ。利益追求に明け暮れた人々の人生の終焉がいかに寂しいものか。ゆっくりと本を読むことが大切だ」と主張してみても、なかなか人々は振り向いてくれない。方向性が見えない小説

の分析だけではなかなか多忙な社会を満足させることができないのが現実だろう。

そこで今、文学研究と教育の現場において求められているのが、「研究・教育手法の工夫」であろう。「今日の犯罪社会を生み出したのは行きすぎた個人主義社会からもたらされた金銭至上主義でもあり、それらを是正していくものは心の教育しかない」という声をあげてみても、それらを具体的に叶えていく手法を示さなければ、時間を与えてくれない性急な社会の中では、机上の空論となってしまう。従来から行われてきた文学の研究と教育から一歩外へ踏み出して、今主張した成果が具体的に示されるような研究・教育の手法を採り入れていく時期に来ているのであろう。

そこで今回は試みとして、「アメリカ文学研究」の中に「実用科学」の側面を持った研究手法を導入してみることを考えてみた。

混迷を極める社会において、最後に頼りとなるのは「人の心」であろう。各人が自分の求めるものをしっかりと心の中に持ち、その希(ねが)いを成就するための手本に出会うことは決して無益なことではないだろう。また、個人主義が浸透し、過ぎたる自己主張が広がりつつある現代社会にあって、他者の存在や他人の心のありように目を向け、弱者の立場に配慮をすることはだんだんと難しくなりつつある。デジタルツールの普及により、直接人間的ふれあいを持つことがなくなる傾向にある今日、今一度、個性豊かな人々の中に飛び込み、他人の心の中を覗き込み、共感し、違う立場から、人々や社会や時代を眺めることは逆に重要性を増してくることだろう。小説などの作品を読んだり、歴史上の大きな出来事やそこに立ち会った人々の生き方を検証してみることのなかにも、現代の暮らしに役立つことは、きっとあるはずである。やがてそれらの積み重ねが、悲惨な犯罪が増えつつある現代社会に対するひとつの処方箋になってくれればと思う。

今回このような基本理念からスタートしたこの論集を成功に導くために、前もって教師側からは、次のような文書を配布した。

内容に関する注意

この論集のテーマは、「実学」ということにある。その前に、扱うものは、「文学」を材料とする。長篇小説、短篇、演劇、詩などの文字文学。映画、舞台、テレビ番組、ネット番組などのオーディオ・ヴィジュアルソフトなどの作品そのものから、演説、話された言葉などにも及ぶ、言説。また、それらの作品の作者。また作品が生まれた時代や背景（もちろん作品からの波及的論述をすること）。つまり、扱う素材は、なにかしらの、文学に関するものがなければいけない。

はじまりとして、文学に関する言及がなければいけない。演説なら、「それが文学に匹敵する人を動かす言葉であり、時代を象徴する名スピーチとなった」などと書き始める。そこから、人物や時代など英米事情的関心事へ移行していく。

いちばん肝心なこと

この論文は、実学ということをめざしている。文学研究の従来のやり方としては、一般には、作品の筋を追ったり、主人公の行動をなぞったり、登場人物たちの関係や心理の分析などだけをして、それで満足しているように思われている。しかし今日では、「それがなんの役に立つのか」「実生活に必要なのか」「それをやってどんな得があるのか」「金になるのか」「経済的効果を指摘せよ」「社会的、文化的影響力はあるのか」などという不満が社会や産業界から高まり、文学研究にも、厳しい時代となっている。経済学など実利的なものが持てはやされる時代だが、文学研究にも、若い人々が、「有意義だ」、「得るものがある」、　「実生活でも知っていて役立つ」、「いまの時代・社会にこそ欠けているものだ」、「なくてはならない、忘れてはいけないものが見出せる」、「人生のプラスになる」、「経済的効果だってきっとあるさ」、と思えるような部分が、きっとあるはずである。それをひとつでも実際の、繊細な、学生である若者のこころが見つけ出し、その衝撃と興奮とキャッチした瞬間のよろこびを、社会に、広く、アピールして欲しい！そして、文学研究というものが、過去の時代の産物ではなく、むしろ「心の時代である今日においてこそ必要なものなである」といったことを読む人々にも感じてもらいたい、というのがこの論集を作成するにあたっての思いである。

そこで、論文を書くときには、たとえば作者の履歴を書くだけの章であっても、そのなかで、自分が気になった、惹かれた、ひっかかった部分があるならば、素直にそこについて感想をコメントして欲しい。好きで書く人物などのなかに、魅力はきっとあるはずである。それらが各章でいくつかつながっていき、最後には、自分がほんとうにひかれたものの全体像が現れてくるはずである。

いけないのは、事実の羅列。本を読めば書いてあることの反復は、論文にはならない。分量が薄い上に、なぞっただけの論では中身はない。量が少なくても、ダイヤの原石のように、どこにも書かれていないオリジナルなコメントがあれば、それはすばらしいものになる。各章のなかでかならず一回はこのことを思い出し、自分の心と対話し、素直な感動、興味がわいた点をコメントするように。全体として最終章でまとめながら、この作品から得た、いまの時代にも、いまの時代だからこそ直接役立つと思われるエッセンスを、整理しなおすように書いていく。「学んだこと、得たもの」にはそれらの要点のみ書き、重複は避けながら、新しい一点を加えればさらによし。

言葉だけではダメで、今の時代には文字でしっかりと指示することの重要性は、対象の学生数が多くなればなるほど明確となる。さらに書き方に関する具体的な指示として次のようなものも示した。

体　裁

タイトルは、扱う作品名等を含める。文中最大フォント。氏名はやや大きく、文字間隔あけるなどする。

執筆者データを囲みで入れる。①から⑦までの数字を入れる。英語タイトル、英語名、所属（コースでなく講座を使用）、などと各項目の見出しを、できれば、いれて、そのあとにコロン：をつける。なるべくすべての項目に答える。⑦は今回の自分の論文に関して、キーワード的に、３つほど、言葉をあげる。または、文章で書く。①の英語タイトルは、イタリックにせずに、普通名詞など大文字にする。文頭大文字。

興味を持った理由　は　書いていなくてもよい。

各章のタイトルをなるべくつける。Ⅰ．Ⅱ．Ⅲ．　・・・　をあたまにつけて、言葉をつける。原則、センタリングする。導入、序論、本論、結論、などの言葉は、使用しない。はじめに　序　（無題まま）　最後に　むすび　などはタイトルとして使用してよい。

サイズや太さ文字などで工夫して、章のなかの節　は　ｉ．ⅱ．　などとして、小さくしていく。章間スペースは統一する。段落は、一文字さげる。引用は、「　」に入れる。また長いものは、上下と左に、一行あける（なるべく）。

本、映画、新聞、雑誌、のタイトルは、『老人と海 』（*The Old Man and the Sea,*1952）などとする。短篇作品は「鳥」（“Bird”）などに。

終わりの、囲み内に、⑧学んだこと、得たもの　かならずつけること。⑨に英語ｻﾏﾘｰ　あるいは　SUMMARY or summary　とつけて　⑧の要点を英訳する。文尾そろえる。

参考文献　と　大きく　センタリングする。スペースあけて、著者名、あるいは、書名からはじめる。訳者名、出版社名、できれば、（出版年）もつける。通例は、著者の苗字で、ＡＢＣ順配置。

これにより、少々の体裁の統一感は生まれた。

さらに、論文を書いたことのない学生たちに対する援助として、教師の論文を配布し、各人の論文の冒頭に示す「執筆者データ」に書き込むデザインやイメージを描きやすくするために、次のようなサンプルを示した。

ソール・ベローの人生が教えてくれる生き方

井　上　朝　日

① 英語タイトル：Saul Bellow: My Lifelong Advisor ② 英語名：Akira Inoue ③ 所属：欧米言語文化講座 英語圏 ④ 出身地：沖縄 ⑤ 特技：フランス語会話２級・バスケットボール・茶道 ⑥ 趣味：鉄道模型・切手収集・hip hop 音楽鑑賞・食べ歩き
⑦ 論文を書くにあたっての関心事： 歴史・南北戦争・時代を変えた人・リンカーン・混迷する時代のなかで、大局を見つめながら人々の利益とともに国の発展を考えることの難しさ・決断力と今日の自分・若草物語に現れている家族愛・結婚と人生と本当の幸せとは・日米の児童文学に見る文化的背景の違いと類似点・文化理解のために使えるもの・国際交流関係に役立つもの・自信が持てない自分に勇気を与えてくれる作品や人物・何に向かっていけばいいのかという迷い・夢をかなえた人に学ぶ達成するチカラ

⑧ 学んだこと、得たもの： 極貧の移民の子としてアメリカ人になったベローが、ユダヤ人として結局は英語がわからないだろうと言われた屈辱から学問に打ち込み、とうとう有名大学の英文科教授となり、ノーベル賞を受賞した。条件で不満を言う前にやってみることの大きさを知ったような気になっている。
⑨ 英語サマリー： Bellow was born in America the son of poor Russian Jewish immigrants. Despites many hardships, he never made any complaint while working hard to achieve his aim of becoming a world-famous writer. I want to live my life fully and fulfill my dream.

少々大変ではあったが、これらの細かな指示により、30 名以上の論文にもそれなりの完成度と全体的統一が生まれたと思われる。

講義を行う授業の合い間に作業を進めるという困難さのために、厳しい状況ではあったが、それなりのものが仕上がったのはよしとしたい。

これらの作業を通じて学生たちが本当に得たものがあるのかないのかは、正直不安な部分がなくもないが、やがていつかこの日の経験が脳裏によぎるものが一人でもいてくれれば幸いであるし、また、学習とは、無意識の中で生きていくものであることを考えれば、努力しただけで成果はあったのかもしれない。

Possibility of Literary Criticism as Practical Science

Kenji Hashimoto

At the end of the 20th century, the Japanese social system underwent a period of great change. At this time, the Japanese people were forced to live up to higher standards of efficiency in almost every area of their lives. Still today in the field of education, as well as in existing industries, the quality of products is expected to be secured at a high level.

As new government policy gradually put the economy ahead of all else, all of the workers here in Japan began to lose their free time. In addition, in recent years, the number of people who read books has decreased as the internet has come into wide use. Accordingly, literary criticism has begun to be seen as a useless study.

It is difficult to utilize literary studies for a practical use, but there is a way, and students should have a chance to learn how.

Previously, students were asked to consider given issues about a novel or characters under the direction of professors without knowing how to utilize the knowledge in their real lives. However, in this book, all of the students find their own themes for self-fulfillment, and try to write what they really feel they have learned, reading and studying about different areas of the American literary world. At the end of their papers, students write the lessons which they think they learned from the books.

The aim of this project is to encourage the students to relate what they learn in their literary studies to their everyday lives, and also to apply it to the future.

植民地時代から南北戦争へ

ベンジャミン・フランクリン

エドガー・アラン・ポー

エイブラハム・リンカーン

クレヴクールのアメリカ観に習う

矢野　菜穂子

① Crevecoeur’s Feelings about the Americans　②Naoko Yano　③欧米言語文化講座　仏語圏　④　　⑤　　⑥

⑦論文を書くにあたっての関心事：今や世界一の経済大国を誇るアメリカ＝しばしば憧れと反感を抱かせる不思議な国。＜反感＞環境問題、核拡散問題、内戦・紛争、貧富の差拡大などの地球規模の問題→論理性や合理性、実利のみを唯一の判断基準としてアメリカが都合良く主導権を行使。＜憧れ＞自由と民主主義、飛躍的な科学の進歩を遂げた文明社会、アメリカを目指す各界のビッグスター。・・いったいアメリカとはどんな国？アメリカ人とはどのような国民？特にアメリカは比較的新しい移民の国→アメリカ人になるということが何を意味し、アメリカ人であるということは何によって証明されるのか？彼らのアイデンティティについて単純に興味を持ち、彼らの原点に戻ってアメリカ建国の歴史を振り返ったときにクレヴクールと出会い、建国当時のアメリカ人とは何かを問うてみようと試みた。

Ⅰ．アメリカ人の定義

まず初めに、何をもってアメリカ人とするかを言及しておかねばならない。アメリカ国境内に住んでいるという地理的要素で考えると、ピルグリムファーザーズがアメリカの地に移民してくる以前から、アメリカ国土には既に原住民が住んでおり、彼らの歴史があった。教科書上では１７７６年の独立記念日をアメリカ合衆国の誕生としているが、アメリカ人はその瞬間に初めて存在し始めたのであろうか。

国家は、制度的にも意識化された「国民」という意味においても、建国とともに出来上がるというそう単純なものではない。国境内に住む人間が、その国に帰属しているという自己存在を意識化し、他者や共同体からも認められることが必要である。

法律などで「国民」としての権利や義務を与えられていれば、制度上はアメリカ人であるということが明白となる。しかし、１７８７年の合衆国憲法には、インディアンはアメリカの人口から除外され、奴隷制度の存続が暗黙のうちに承認された。１７９０年の帰化法でも、「合衆国の管轄下にあり、その領域内に２年以上居住した、外国生まれの自由な白人」に限られ、この「自由な白人」という表現にも何らかの意図が含まれている。合衆国国政調査による「人種」の分類の変遷からもわかるように、アメリカ合衆国は建国当初から、「白人」という不変で常なる存在に加えて、絶えず多様化する「非白人」から成る社会である。「アメリカ人」という国民が形成されるプロセスには、「国民」と「よそ者」とを区別する長い歴史があり、多様な人種と民族が混在しながら、独立直後から「アメリカ人」になれる者となれない者が法律によって定められていたことを忘れてはならない。

つまり、アメリカにおける国民国家形成のプロセスには長い期間を要するのである。時代を経ても、移民がアメリカ人として認められた後に、あるいは移民の子孫として自己の存在を認識する際に、自分自身のアイデンティティをいかに受け入れていくかということを考えると、たえず国民意識は変容し融合し創造され続けているといえるであろう。アメリカ人には、自らのアイデンティティについての疑問と不安が常につきまとっているのである。

ここでは１８世紀後半、ヨーロッパから来た移民が、開拓民としてアメリカでどんな生活をし、いかに自らを意識化して受け入れていくかということに注目した、クレヴクールの『アメリカの農夫からの手紙』(*Letters from an American Farmer,1782 : London*) を紹介する。アメリカ研究史の先駆者であるクレヴクールは、どのようにアメリカ人をとらえていたのだろうか。

Ⅱ．クレヴクールの半生

ミシェル・ギヨーム・ジャン・ド・クレヴクール(Michel-Guillaume Jean de Crevecoeur アメリカ名：J. Hector St. John) は１７３５年、フランス・ノルマンディー地方の都市カーンで小貴族の家に生まれた。厳格な家父長制の下、家庭でも学校でも古いしきたりの抑圧的な教育を受け、空想の世界を好むロマンティックな少年はアメリカに大きな夢を描き、陰鬱な生活に抵抗し始める。

１７５５年１９歳で早くも新大陸カナダへ渡り、その後カーンで学んだ測量と地図作成の技術を生かしてアメリカ各地をまわり、アメリカの荒野やインディアンの生活にも触れる。そして、植民地義勇軍からフランス正規軍少尉の位を得て、有能なフランス軍人として異国の地で華々しい生活を送っていた。しかし、１７５９年イギリスのウルフ将校に攻囲されたケベック攻防戦で負傷した彼は、不可解な事情で同僚から村八分のような扱いを受け、結局連隊から追放される。イギリス駐屯兵がインディアンに虐殺される現場を目撃したことに加え、この出来事が生涯彼の人間観に暗い影を落としている。

その後１７５９年の暮れにニューヨーク市を訪れ、ニューヨーク植民地の北部一帯、ヴァージニア植民地の大西洋岸一帯、後のオハイオ州地域、五大湖周辺などを旅し、後のヴァーモント州地域を探検して、インディアンとの交易にも従事した。１７６５年にニューヨーク植民地の有力者の娘と知り合ってからはアメリカ定住を決意し、フランス籍を捨ててニューヨーク植民地の市民権を獲得する。４年後に彼女と結婚し、フランス人ミシェル・ギヨーム・ジャン・ド・クレヴクールという彼のアイデンティティは消え、ジェイムズ・ヘクター・セント・ジョンというイギリス名を持ったアメリカ人に生まれ変わるのである。そこでのアメリカ農夫としての暮らしや環境の変化、移住者が新しい人間に生まれ変わるプロセスなどの詳細を記したものが、『アメリカの農夫からの手紙』である。(以下『手紙』とする。)

Ⅲ．夢の楽園「アメリカ」(―手紙３より―)

『手紙』の中でクレヴクールは、彼自身を一アメリカ農夫ジェイムズとして、当時のアメリカを鋭い観察力で客観的に捉え、緻密に表現している。つまり、ジェイムズが目にしたままの報告文という形で、そこに移り住んだ人々の生活や気質や思想、また国家との関わりなどの貴重な情報を、当時新大陸に大きな関心を寄せていたヨーロッパの人々に提供していたのである。そこには、アメリカ社会の本質を捉えた幸福や苦悩が書かれており、その後のアメリカ研究において絶大な影響力を持った。

彼が繰り返し主張するのは、アメリカで手に入れた経済的な安定であり、政治的な自由と独立、精神的な幸福である。それは、肥沃なアメリカの大地と豊かな自然が可能にしてくれる。移民は、これまでの自国の領主による搾取や貧困を脱し、市民としての権利を享受して、勤勉と法律によって彼らは驚くべき変容を遂げるのである。

『ではアメリカ人、この新しい人間は、何者でしょうか。ヨーロッパ人でもなければ、ヨーロッパ人の子孫でもありません。したがって、他のどの国にも見られない不思議な混血です。』と『手紙』には書かれてある。ここで興味深いのは、広いアメリカの国土において海岸から奥地へと目を向け、それぞれ

の地域に住む移民たちの気質の違いを客観的に描写し、かつ個人的な視点も加えて書き留めている点である。そこから環境による人の気質を読み取ることができ、いかにアメリカが開拓され発展してきたかを知るてがかりとなる。以下に地理的に異なった３つの地域に住む人々の特徴を簡単に紹介する。

①大西洋岸に住む人々の特徴 ■荒れ狂う海を相手に、大胆で冒険を好む傾向。 ■交易を好み、人との交渉は広くなる。 ■漁民、商人、都市に住む住民が多く、陸上の窮屈な生活を軽視する傾向。
②中間に位置する農耕地帯に住む人々の特徴 ■圧倒的に人数が多い。 ■素朴な土地耕作作業により純粋。 ■勤勉と利己心から立派な暮らし。 ■早くから物を覚え、商取引を行う。 ■自尊心と強情さから訴訟が多い。 ■独自の地方政治により政治経済に敏感。 ■法律は彼らを監視し、彼らは法律を遵守する。 ■宗教の穏やかな戒律と精神的自由、自由民の誇り。
③西部の辺境地に住む人々の特徴 ■追いやられた不運な人、再出発の必要、怠惰、経済上の理由で奥地へ。 ■孤立した狩猟生活のため、互いに競争し、隣人との交際を嫌い、その日暮らしの怠惰な生活を送る。 ■友情や団結はなく、政府はほとんど放任。 ■酔っ払いや怠惰が拡がると、争い、無気力、不幸が起こる。 ■人と人との争いは、腕力か時には法に訴える。 ■人と動物の争いは、人は高等な肉食獣であるから自然の摂理として野生動物を食べて暮らし、それができないときには穀物を食べて暮らす。 ■道徳観念を備えた指導者や羞恥心の抑制力から無縁のため、社会の最も忌まわしい部分を示している。

どの開拓地域も、奥地の開拓民が経験する貧弱な揺籃期と野蛮な基礎状況を経てさらに勤勉な人々に場所を譲り（追われた事情もあるが）、豊かで平和で規律ある地域へと移り変わっていく様子が理解できる。ジェイムズは、文明と自然の恩恵から孤立することのない②の自由土地保有者にこそ、アメリカの理想を見出した。彼らの労働は、自然の根本原理である利己心に基づいている。勤勉で健康で神への感謝の気持ちさえあれば誰でも、豊かな生活を手にすることができる環境がそこにはあった。新大陸アメリカの地で彼らは自由を手にし、あらゆる国の人々が融合し、一つの新しい人種となっていく。彼らの住む異質な風土の力によって、芸術、学問、宗教は独自なものとなる。自国での不本意な怠惰、奴隷的屈従、貧困、無益な労働から、豊かな生計を報酬として与えてくれる全く異なった性質の労働へと移ったのだから、アメリカ人が自分の祖国よりもいっそうこの国を愛するのは当然のことである。こうして彼らはアメリカ人としてアメリカを愛し、自己のアイデンティティを認識し始める。この瞬間、古い自己が消滅し新しい自己が出現する。絶望的な昔の生活を捨て、新大陸での希望ある新しい生活が自己の

アイデンティティの再出発点となっていった。

彼は、こうした由縁でアメリカ人を定義している。手紙３でジェイムズは、アメリカをほとんど無条件で前向きに肯定的に紹介した。しかしこれはジェイムズの一面にすぎず、彼の耕作した広大なパイン・ヒルはその後の独立革命で手放さざるを得ない状況に追いやられ、彼のアメリカ観が変化していく。

Ⅳ．開拓者の悲愴な運命（―手紙１２より―）

独立革命期、ジェイムズは生活の場を追われて財産を放棄し、家族と共に奥地へと避難していった。彼は共同体の崩壊による挫折感、戦争の恐怖と不安、それに祖国と独立革命派の両者の挟間にいるジレンマによる苦しみを生々しく手紙に託している。それらは、程度の差こそあれ、移住者が一度は味わうであろう正直で切なる感情に違いない。

夢の楽園を求めて祖国を離れ、勤勉に働いて幸せな生活を手に入れ、愛着を持ち始めたアメリカが歴史上重大な過渡期にあるとき、彼は、自分自身がここまで苦しみ悩み生きている意味について疑問を抱く。『私たちは何者でしょうか。このあわれな無防備である辺境住民の私たちは？見守っている世間にとって、私たちが息をしているかいないか、死ぬか死なないかということは、何か意味はあるでしょうか。人目に触れない孤独な場所で、私たちがどれほどの徳行を、どれほどの功績や誠実さを示してみても、何の役にも立たないのではないでしょうか。』

さらに革命の「恐るべき光景」を目にしたとき、『では人生は何なのでしょうか。・・・それはあまりにも苦痛に満ちたものです。・・・人生は単なる偶然、しかも最悪の種類の偶然のように思われます。私たちは、病気と受難と、不幸と死の犠牲になるために生まれてきているのです。』とまで悲観している。

ジェイムズは悩んだ挙句、家族でインディアンの住む奥地へと移住する決意をする。彼は、宗教や法律などに規制されない原始社会で、太古から独自の生活を守り、欲望も不満も抱くことなく生きかつ死んでいくインディアンの生活を、文明化した白人よりも多くの点で優れていると考え、「高貴な野蛮人」と称賛していた。一方、これまでの重農主義的見解から、インディアンの生活に農耕を広め、移住していく子孫には文明社会を築いてほしいというのが彼の願いであった。

結局クレヴクール自身は、双方から疑いの目をかけられ身動きができなくなり、事実上家族を見捨てる形でニューヨーク市を脱するが、スパイ容疑で牢獄に入り、やっとの思いでヨーロッパに戻ると身寄りを頼りに各地を転々として生涯を終える。

Ⅴ．『アメリカの農夫からの手紙』からわかるアメリカ観

クレヴクールの言う開拓時代の楽園アメリカには、文明社会の恩恵を受けながらも、人が自然を搾取するのではなく、むしろ豊かな自然と共生し健康な農地に感謝して生きる平和な暮らしがあった。彼は、『アメリカ人は新しい原則に基づいて行動する新しい人間です』と言っている。「楽園」と絶賛した新大陸での生活は必ずしも楽しいことばかりではなく、厳しい開拓時代を生き抜きアメリカの歴史を築き上げてきた人々に思いを馳せると、利己心を自然の根本原理であると言うクレヴクールの指摘は的確であるし、夢を抱いて誠実に労働に従事する彼らの生きる姿はとても清々しく、人としての慎ましくも幸せな暮らしぶりを思い描くことができる。

幸福と繁栄の象徴であった理想郷アメリカは、『手紙』の最後で、「共同体の崩壊」「恐ろしい光景」「悪夢」が繰り返し多用され、彼自身直面した戦争での戦慄すべき事実やアメリカ人としての苦悩を伝えて

いる。移住するまではアメリカ人でなかったことは事実であり、かつての共同体に存在した自分自身と、今存在する自分自身にはいかなる違いがあるのか。彼らはたえず自らに問い、自分なりに納得しなければならなかった。クレヴクールが独立革命時代に祖国と独立派の挟間にある自分のアイデンティティに苦悩し、原住民の生活する奥地へ移住することを決意したように、彼のアメリカ観は、物事には多面的な要素があることを私たちに教えてくれる。彼はそれぞれの立場を真に理解し十分に検討して、自らの生きる道を模索した。しかし、最後まで彼が理想としていた自由土地保有者の主張を諦めず、インディアンの住む西部開拓地にも農耕社会を広めようとしていたことで、アメリカの理想郷としての期待を裏切ることなく未来への可能性を秘めた国であることを指摘した点は、アメリカの特徴を典型的に示しているようだ。

『手紙』を通して、移民の勤勉さ、力強さ、たくましさを改めて知ることができた。当時のアメリカ人の冒険心や探究心、活力に満ちた外向性は、過酷な環境の中であっても人生を豊かに楽しみたいとする夢のある開拓時代を生きてきた彼らだからこそ培われた気質であったようだ。

⑧学んだこと：クレヴクールの好奇心旺盛な行動力、新しいものを取り入れる革新力、独立革戦争時代に生きた運命により、彼自身はアメリカでの安定した農耕生活を望んでいたが、現実には紆余曲折を経て数奇な人生を送ることとなる。だからこそ彼が実際に目で見て肌で感じた当時のアメリカの様子には説得力があり、私にとって非常に興味深いものであった。ここでは取り上げなかったが、『手紙』の中には他にも、自然や動植物への詳細にわたる観察描写、旅先での現地の人々との交流から広がるアメリカの見聞などがたくさん書かれてある。**あらゆることに興味を持ち、社交的であり、物事を肯定的・受容的に受け入れ、よく感動しよく感謝する姿勢は、時空を越えて今のグローバル社会に生きる私たちが見習うべき精神**であるように思う。１９歳で未知の世界へ飛び出したことから始まった彼のオモシロイ軌跡から、自分の人生は自らの手中にあることを信じることができる。大きなリスクを伴う移民たちの人生をかけた勇気も然りである。夢を叶えた彼らから、失敗を恐れず前に進む力、誠実に勤勉に行動することの重要性を学んだ。法律違反すれすれのマネーゲームに熱中する現代社会に、当時のような活力と元気はあるのだろうか。時代は進んだが、私たちは今こそ歴史に学び、彼らの純朴さや勤勉さに習って、夢を持って精一杯生きる喜び、幸せを噛みしめたいものだ。

⑨Summary：I think his words carry much conviction because he says what he saw, experienced and felt in the very land. We learn his way of life, that is to say, having interests for everything, a sociable character, accepting things positively or receptively, much moving and much appreciation. All his outgoing personality made his life wealthy so he lived a storming life. As I read this book, I can believe my life is in my hand. There are a lot of things to learn from the simple, honest and delight people. Now I follow their manners and I want to live wealthy and happily with my dream.

参考文献

『クレヴクール』秋山健、後藤昭次、渡辺利雄、研究社出版（1982 年）
『アメリカの歴史』有賀夏紀、油井大三郎、有斐閣アルマ（2003 年）
『他民族の国アメリカ』ナンシー・グリーン、明石紀雄、創元社（1997 年）

フランス人から見た
アメリカの先住民、そして大地

田中大一

① 英語ﾀｲﾄﾙ：**What the French Navigator Caught a Glimpse of in the Early America**
② 英語名：**Taichi Tanaka**
③ 所属：欧米言語文化講座　仏語圏
④ テーマ決定の動機：フランスに興味・関心があり、フランスとアメリカ両国に関係する歴史的事実を調べてみたかったため。

Ⅰ．始めに

今や世界一の大国となったアメリカであるが、1783年にパリ条約を結ぶまでは様々な国の植民地・領土であった。アメリカ大陸で最も勢力を奮っていたのはイギリスであるが、そのイギリスに主として対抗していたのはフランスである。

フランスはイギリスよりも早くアメリカ大陸に上陸を始め、新天地で勢力拡大を図ろうとしていた。しかしながら、早期のアメリカ大陸は「未知なる大地」であった。そこで、フランス人は当時のアメリカ大陸の存在をどのように受け止めたのか、またその大地に住んでいた先住民や自然に関してどのような感想を抱いたのかを、二人の人物を通じて垣間見ていこうと思う。

Ⅱ．偉大なる探検家　ジャック・カルティエ

一人目の人物、ジャック・カルティエ（**Jacques Cartier、1491-1557**）は、１５３４年から１５４２年の間に、カナダ探検を３回行なった。このときに彼が記したとされている報告書を基にして、後に『航海記（***Les Français en Amérique pendant la première moi tié du XVI siècle.***）』が発表された。この報告書より、早期アメリカ大陸に関する面白い部分を以下に紹介する。

「五月二十一日、我々は鳥が島（現在のファンク島）に到着した。その島は周囲全体を、壊れてばらばらとなった氷塊で出来た帯によって取り巻かれていた。その氷塊を越えて、我々は鳥を捕まえるために同島へ行った。鳥ときては、その数があまりにも多いので、同島の周囲は鳥で満ちみちており、また、上空にも、島にいる数の百倍もの鳥が群れていた。そして、半時間もたたぬうちに、二隻の舟艇は、まるで石塊でも積むように、この鳥でいっぱいになってしまった。この鳥を生のままで食べ、残りを塩漬けにして保存したが、二隻の本船のおのおので、四ないし五樽もの塩漬け肉ができるほどであった。」

この文章を読んで考えられるのは、この島周辺は人間が存在していなかった土地であり、原始的な自然状態のままであったということだ。そこにカルティエ率いる二隻の船が人類として初めて入り込んだ。そして、かつて見たことがなかった光景を目の当たりにした彼は、その時の驚きを素直に、かつ冷静に書きとめている。また、彼はこの島の周囲に生息していたペンギンのことを次のようにまとめている。

「・・・鳥が群れていた。それらのうちには鷲鳥ほどの大きさで、色は白いところと黒いところがあり、嘴は鴉に似た鳥がおり、これらはいつも海中にいて、空を飛ぶことは全然できない。というのも掌の半分くらいの大きさの翼しかないからである。だがその翼を使って飛ぶように海中を往く速さは、他の鳥が空を飛ぶのに劣らないほどであった。そしてこの鳥の脂肪の多いことといっては、驚くばかりであった。」

今となっては、私たちは気軽にペンギンを見ることができる。しかし、当時の船員はこの時初めてペンギンを目撃したのであり、「鳥のような生き物」と表現せざるを得ない様子である。しかし、カルティエ率いる船員は恐らくペンギンのような今まで見たことも無かった生き物に出会ったことにより、ますます未知なる大地アメリカに魅力を感じたに違いない。それにしても、当時の船員は得体の知らない生き物を平気で食べている。当時の食料保存法と言えば、塩漬けが最も主要であったようだが、初めて見た生き物でさえも食材にしてしまう。それはつまり、航海は非常に厳しいものであり、極寒の地で食料を手にするのは難しいことであった、ということを意味しているのだろう。

Ⅲ．先住民を分析した　アンドレ・テヴェ

二人目の人物、アンドレ・テヴェ（**André　Thevet**）は、フランスの旅行記作家である。１５５５年、ブラジルの植民を目指したヴィルガニョン一行に加わってアメリカに渡ったのだが、その時の約１年間で体験したことを書き綴った

のが、『南極フランス異聞』である。この作品は多くの人々に受け入れられ、二度、三度と再出版されている。
そこで、この作品の中から当時のアメリカ大陸に住んでいた先住民に関する報告に焦点を当て、先住民の生活の様子を探って行こうと思う。

「アメリカ人ときたら、男も女も、母親の胎内から産まれた時のままの全裸の姿で生活し、それを少しも恥ずかしいとも破廉恥だとも思っていないのである。・・・たまには、老人などが恥部を木の葉で隠しているのが見られるが、たいていの場合、そこに病気があるからである。」

これは、テヴェが実際に目撃した先住民の格好についての報告である。テヴェは、裸で居ることは恥ずかしいことで、何かを身に着けるべきであると言っている。これからわかることは、当時のヨーロッパとアメリカの間にはかなりの文明化の差があり、キリスト教信者がアメリカ大陸でキリスト教を布教するまでは、衣服を身にまとうという考えが先住民に無かったようだ。
また、彼は先住民に対し、「粗野で知恵が足りない」と発言している。大自然の中で暮らしていた先住民が、あまりにも野蛮で野生的に見えたのだろうか。

また、彼は約1年間の滞在の間に、「アメリカ人の宗教について」、「彼らの飲み食いについて」、「彼らの結婚について」、「彼らが行う儀式、墓、葬式について」、「彼らが冒されているピアンという病気について」など、様々な分野に関する調査を彼自身の視点で行っている。どの調査結果も、テヴェ自身驚く内容となったようだが、やはり先住民を無知な人々とみなしていることに変わりはなかったようだ。また、これらの調査を行うにあたり、現地の言語を巧みに操るフランス人の協力があったと言う。したがって、ここまで細かい部分まで調べ上げることができたのだろう。

Ⅳ．最後に

以上述べてきたように、フランスは早期アメリカ大陸の時代から独自の調査を始めた。様々な報告書が出版されることにより、国民もアメリカ大陸に関して興味心を抱くようになった。このことが、結果的にアメリカに植民地を設けることにつながっていったのは言うまでもない。

また、未知なる大陸に向かって行き、上陸さえした当時の探検家は、アメリカ大陸によほど強い野望を抱き、調査をすることに非常に興味があったのだろ

う。「何日間の航海になるかもわからない」、「現地で疫病にかかるかもしれない」など、不安要素は尽きることが無かったはずだ。しかしながら、事前に航海路を計算し、現地で病に冒されたとしても対処できるように、大量の治療薬を持参し探検を続けた。この様子から、探検・調査を必ず成功させようという強い意志がうかがえる。

ジャック・カルティエに関して調査を進めていくうちに、彼がフランスの小学校の教科書(*"HISTOIRE DE FRANCE" cours élémentaire*)に登場していることを発見した。偉大なフランス人の功績について書かれた文章に彼の記述もあり、あたかも彼の業績を称えているかのようだ。彼がアメリカ大陸に上陸してから既に数百年が経過している。それにも関わらず、未だにフランス人が彼を尊敬してやまないのは、彼がフランスという国に衝撃的な影響を与えた人物であり、かつ未知なる世界へと勇敢に向かっていった勇気・行動力を評価しているように感じた。

カルティエ、テヴェから学べること。それは自分自身が興味を抱いたことに対して、失敗を省みずに果敢に向かっていくことが大事であるということだ。もちろん準備段階として、事前調査や危機対応能力・対策が必要になるが、これらを全て含んだ上で目標を達成することに集中すれば、自ずと満足のいく結果を出すことができるのではないか。これは現在の私にも当てはまる。沢山の魅力が飽和している現代社会において、一生を共にしたい職業に就くことが出来るかどうかである。二人のフランス人航海士を見習い、私も目標に向かって努力し続けていこうと思う。

⑤学んだこと：行動する前にきちんと知識や能力を身に付け、
本来の目的が達成出来るよう努力すること。

⑥summary：Now that two of French navigators are quite respected because of their tremendous observations in America.Their endeavors are certainly worthy of reference, so I'd like to live harder for my goals without any regret.

参考文献

- カルチエ　テヴェ　『フランスとアメリカ大陸 1』　大航海時代業書第Ⅱ期１９
  (西本晃二、山本顕一、二宮敬　訳　　岩波書店　１９８２年発行)
- *"HISTOIRE DE FRANCE" cours élémentaire*
  (A.Bonifacio　L.Mérieult 著　　CLASSIQUES HACHETTE)

ベンジャミン・フランクリンの魅力

福田真弓

Benjamin　Franklin（1706-1790）

執筆者データ
①Benjamin　Franklin　：Why I Like Him
②名前；Mayumi　Fukuta
③所属；欧米言語文化講座　英語圏
④
⑤
⑥
⑦関心事；フランクリンの生涯、十三徳について

Ⅰ．フランクリンについて

ベンジャミン・フランクリンは、1706 年 1 月 17 日(新暦)、ボストンに 13 人兄弟の 11 番目、男子のなかでは末っ子として生まれる。基礎教育は受けたが、経済的困難のため中退して家業に従事。蝋燭工から印刷工助手に転進し、読書の喜びを知る。

伯父のジェームズと組んで急進的リベラル・ジャーナリズム活動を行うが、やがてジェームズと対立してボストンを出奔。フィラデルフィアで旗揚げして後、数年にして早くも独立の印刷工場・新聞発行者となり、功利主義的な美徳を説いた『貧しきリチャードの暦』の作者として名を挙げる。

三十歳にしてペンシルヴェニア州議会の書記となり、啓蒙的活動を盛んに行

いつつ財産と名声を高める。1751 年　州議会の議員となり、54 年にはフレンチ・インディアン戦争に対抗するべく召集されたオルバニー会議にペンシルヴェニア代表として参加。

戦後イギリス本国の統制が強まると、フランクリンも次第に独立運動に傾斜していき、1774 年、フィラデルフィアの第一回大陸会議では委員を務める。76 年の独立宣言起草にあたっては起草者トマス・ジェファーソンに協力して多くの助言を行い、外交官としてヨーロッパに派遣されてフランス宮廷の援助を獲得。フランスの独立戦争への協力・参戦と、他の諸国の中立を成功させる。1790 年 4 月 17 日、84 才で死去。葬儀は国葬とされた。

興味を持った理由

フランクリンの「人生を幸せへと導く **13** の習慣」を以前読んだことがあり、彼の考え方、教えについてもっと学びたいと思ったからである。時代は違うのに現代でも通ずるところがたくさんあり、ためになる本だと思った。また、フランクリンは、日本ではアメリカ独立宣言を起草した 1 人としてよく知られているが、実は、アメリカ合衆国の政治家、外交官、物理学者、気象学者などと、様々な顔を持っている。フランクリンがアメリカの建国の父の一人と呼ばれるようになったその人生を知りたいと思った。

Ⅱ．フランクリンの十三徳

フランクリンが自発的に１３の戒律を作って、自ら習慣となるまで実践した。

（フランクリン自伝より）

1.節制:頭や体が鈍くなるほど食べないこと。

2.沈黙:他人あるいは自分に利益にならないことは話さないこと。

3.規律:自分の持ち物はすべて置き場所を決めておくこと。仕事はそれぞれ時間を決めて行うこと。

4.決断:なすべきことはやろうと決意すること。決意したことは、必ずやり遂げること。

5.節約:他人や自分に役立つことのみお金を使うこと。すなわち、無駄づかいはしないこと。

6.勤勉:時間を無駄にしないこと。いつも有益なことに時間を使うこと。無益な行動をすべて止めること。

7.誠実:だまして人に害を与えないこと。清く正しく思考すること。口にする言葉も、また同じ。

8.正義:不正なことを行い、あるいは、自分の義務であることをやらないで、他人に損害を与えないこと。

9.中庸:何事も極端でないこと。たとえ相手に不正を受け、激怒するに値すると思ってもがまんしたほうがよいときはがまんすること。

10.清潔:身体、衣服、住居、を不潔にしないこと。

11.冷静:つまらないこと、ありがちな事故、避けられない事故などに心をとりみださないこと。

12.純愛:性の営みは、健康のためか、子供をつくるためにのみすること。性におぼれ、なまけものになったり、自分や他人の平和な生活を乱したり、信用を失くしたりしないこと。

13.謙譲:イエスとソクラテスを見習うこと。

ベンジャミン・フランクリンは、アメリカの建国の父の一人と呼ばれている。独立宣言書の起草委員をつとめ、独立戦争後のイギリスとの外交交渉にも全権として従事。アメリカ憲法制定会議にも参加。刻苦勉励して印刷業から身を興し、ピューリタンとしての禁欲と倹約、人間関係を大切にし、一大資産家になる。資産家になるとその資産を慈善事業に惜しみなく使った。科学にも志し、特に黎明期の電気学に興味を持ち、雷雲に向けて凧を揚げ、雷が電気であることを発見したことで有名。避雷針の発明者といわれている。アメリカンドリームを立証した高潔な人物として、現在でもワシントン・リンカーンと並んでアメリカ人に最も尊敬されている偉人の一人である。

⑧学んだこと

フランクリン自伝を読んで、改めてベンジャミン・フランクリンという人のすばらしさがわかった。フランクリンが亡くなってから 200 年以上経つにもかかわらず、愛され続けているのは、彼の偉大さと魅力的な人柄に惹かれる人が多いからであろう。彼は、貧しい家庭に生れ、ほとんど学校教育も受けられなかった。父親や兄との衝突もあったが、早くから働きながら読書に励み、独学

で外国語を習得し、哲学、科学の研究をした。そして、巡回図書館を作り、哲学協会を設立し、ペンシルヴァニア大学の設立を援助し、多くの公共事業に貢献し、有益な発明、発見をし、また有能な政治家としてアメリカの独立に多大の貢献をした。政治家として、科学者として、天才的な活躍をし、一般の人々とは、かけ離れた存在ではあるが、フランクリン自伝には、現代の私たちの日常生活にすぐにでも取り入れることのできる身近な具体的な助言がたくさん盛り込まれている。多くの苦労と努力を重ねてきたフランクリンだからこそ、彼の言葉には説得力があり、学ぶところが多いのだと思った。

⑨summary ;

Wonderful of the person named B. Franklin has been understood renewing the Franklin autobiography reading. It keeps being loved though 200 years or more have passed since the Franklin died because there are a lot of people that withers in his great and attractive character. He was born to the impecunious family, and the academic training was hardly received. It worked hard at reading while working from early time, it mastered a foreign tongue by self-study, and the philosophy and the science were researched though there was a collision of father and the elder brother, too. And, the traveling library was established, American Philosophical Society was established, the Pennsylvania university was helped to establish, it contributed to a lot of public works, a profitable invention and the discovery were done, and the United States did a large independently contribution as an able politician. Talented activity is done as a scientist a lot of concrete familiar advice that can be taken to daily lives of us modern even at once is included in the Franklin autobiography as a politician though general people are quite different people. I thought many persuasive to his word because of the Franklin who did a lot of hardships and efforts repeatedly, and learning.

参考文献

・『フランクリン自伝』　(岩波文庫)　松本慎一、西川正身訳
・『人生を幸せへと導く **13** の習慣』　(総合法令)　ハイブロー武蔵訳
・『アメリカ古典文庫１』　ベンジャミン・フランクリン　(研究社)
・『人物アメリカ史(上)　』(新潮選書)　ロデリック・ナッシュ著　足立康訳
・『フランクリン』　(やまねこ文庫)　板倉聖宣

ベンジャミン・フランクリンの

生涯・格言から学んだこと

喜久田　尚也

①英語タイトル：What I Learned from Franklin's Life and Proverb

②英語名：Takaya Kikuta ③専攻：欧米言語文化講座　英語圏

④　　⑤　　⑥

⑦論文を書くにあたっての関心ごと：独立する前のアメリカにおいて様々な職種を経験したフランクリンの生き方・独立戦争中やその後における彼の貢献・彼の人生を支えた 13 徳

Ⅰ.略歴

・1706 年 1 月 6 日（ユリウス暦）　マサチューセッツ州ボストンで生まれる

・1716 年　　10 歳で学校教育を終える

・1718 年　　『ニュー・イングランド・クーラント』紙を印刷出版していた兄のジェームズの徒弟となった。その後、次第に記者や編集者として頭角を現す

・1724 年　　知事の勧めによりロンドンに行き、植字工として働く。

・1726 年　帰国、印刷業を再開する

・1729 年　『ペンシルバニア・ガゼット』紙を買収。

・1731 年　フィラデルフィアにアメリカ初の公立図書館を設立するこの図書館は成功を収め、これを規範にアメリカの他の都市にも図書館が開設されるようになった

・1748 年　印刷業をたたみ、公職に専念するようになる。ペンシルバニア植民地議員や郵便総局長をつとめた

・1751 年　フィラデルフィア・アカデミー（後のペンシルバニア大学）を創設

・1754 年　勃発したフレンチ・インディアン戦争ではイギリス軍ための軍需品調達に奔走する

・1757 年　植民地の待遇改善を要求するためにイギリスに派遣された。このとき、彼の科学的な業績を称えオックスフォード大学にて名誉学位を授与されている

・1777 年　アメリカ独立宣言の起草委員となり、トマス・ジェファソンらと共に最初に署名した 5 人の政治家のうちの 1 人となった。独立戦争中はパリの社交界を中心に活動し、欧州諸国との外交交渉に奔走。フランスの独立戦争への協力・参戦と、他の諸国の中立を成功させる

・1790 年 4 月 17 日　84 才で死去。葬儀は国葬とされた

Ⅱ.幼少時代～独立戦争までの業績

ベンジャミン・フランクリンはマサチューセッツ州ボストンにて 17 人の兄弟を持つ農家で 15 番目の子として生まれました。その影響からか家は昔から貧乏でした。そんな家庭のことを考慮したのかはわかりませんが、学校に通いだした 8 歳からわずか 2 年の 10 歳までで学校教育を終わらせてしまいました。その間に彼は当時世の中に出回っていた世界の著名な書物のほとんどを読んでしまっていたようです。その後ロウソク職人を経験した後、印刷業にかかわっていくことになります。そこで新聞を発行して評論家としての名を挙げます。さらに格言つきの暦

を発行して出版業者としても成功を収めることとなります。その後は郵便制度の整備・公立図書館の設立・大学の設立など社会的な設備を充実させていきます。科学者としては、雷の発生しやすい日に凧をあげて、稲妻が自然現象であることを突き止めたり、電気の実用化を実現したり、避雷針、遠近両用メガネ、薪ストーブなど現代の我々の生活に欠かせないものを発明していきます。さらにその後フランクリンはフランス語をマスターし駐フランス米国大使に就任しました。そして彼は印刷家・評論家・社会改良家・出版業者・科学者・発明家・外交官・政治家・哲学者の合計 9 つの肩書きを持つ人物になりました。

Ⅲ.独立戦争以降の業績

独立戦争の時期になると彼は政治家として大きな活躍を見せます。駐フランス米国大使の肩書きを生かしてイギリスと戦った独立戦争時にフランスの支持を取り付け援軍の派遣を得ます。結果的にこれが独立戦争の勝利に結びついたといえます。そしてフランクリンはトマス・ジェファソンらとともに独立宣言を起草する 5 人の政治家のうちの一人に選ばれました。そのとき彼は「まさに我々は共に立ち上がらなければならない。さもなければまず確実に個々につるされることになるだろう」という一つの格言を残し、植民地の人たちの結束を促しました。当時は団結をしなければイギリスに負けてしまう、さらに独立もなくなってしまうということを感じていたフランクリンの言葉もあってアメリカは独立することになりました。そして現在は彼の数々の功績が認められていてアメリカの 100 ドル紙幣の肖像画にはフランクリンが描かれています。

Ⅳ.格言

フランクリンは様々な職業を経験し、社会に貢献してきましたが、また同時に多くの格言も残してきました。フランクリンの 13 徳という自らに必要な「徳」を習慣づけるために作ったものは彼の数々の名言の根源となっています。1 年は 52 週でそれを 4 で割って 13 週。1 週間ずつ 1 徳に集中して 4 周できるという計算となりフランクリンはそれを自らの生活において実践してきました。例えば私たちの多くが知っている「時は金なり(Time is money.)」という言葉はもともとフランクリンが考え出した格言です。意味はもちろん「時間はお金と同じように大切な価値がある。無駄にしてはいけない」ですが、これは13徳のうちの第6徳である「勤勉　時間を空費するなかれ。つねに何か益あることに従うべし。無用の行いはすべて断

つべし」に通じています。またフランクリン自伝の中には何度もこの 13 徳にある「勤勉」と「誠実」という言葉が登場してきています。彼が生涯に渡って数々の地位、名誉などを手にしたのは常に成功ばかりではなく失敗や挫折があったものの、この 2 つの言葉が彼を助け、そして彼がそれらを胸に行動してきたからだという見方が出来ます。彼自身は 13 徳を体得出来なかったと自分で評価していることから、彼自身完璧な人間ではなかったといえますが、これほどの実績や功績を残してきた背景には彼の思い描いていた 13 徳は、客観的にみると、限りなく実現できていたのではないかと考えます。

私がベンジャミン・フランクリンに興味を持ったのは彼の数々の格言の素晴らしさに感激したのと、これほどの功績を残してきたフランクリンが日本においてはそんなに知名度が高くなく彼の生涯について知らない人が多いと聞いたからです。

⑧学んだこと：フランクリンは子どものころから積み重ねてきた努力が実を結んだ結果が彼の功績につながっているのだと思います。「継続は力なり」という言葉を現実のものにして大きな成功を収めた彼の人生から、努力は決して全ては報わるとは言えないが辛抱強く努力を続けていたら絶対に報われるということを学びました。また、人生において様々な経験することが大事であることも学びました。私はこれまで一つのことを持続して努力していくことが出来ませんでしたが、続けてきた努力が報われて最後には大成した彼の姿を見てどんな小さなことでも良いので日々の努力を続けていくことを決心することが出来ました。

⑨英語サマリー：Benjamin Franklin was born in a poor family. However he made much effort again and again. And he experienced many jobs and made a great work in Independence War as a politician. I learned that continuing efforts will make us happy and to have many experiences is so difficult for life.

米文学から見る教師像

上鶴　智子

① 英語タイトル： A Teacher Image Learned From American Literature ② 英語名： Tomoko Kamizuru ③ 所属：欧米言語文化講座　独語圏 ④
⑤ ⑥
⑦ 論文を書くにあたっての関心事：歴史・教育制度・教師に必要なもの・子どもとの接し方

「米文学史」の授業でワシントン・アーヴィング（1783－1859）の『スケッチ・ブック』に収められた短篇の一つ「スリーピー・ホロウの伝説」のビデオを見て，教師が軽んじられている点に疑問を抱くと同時に，今の日本と同じではないかとも感じた。現在の日本でも教育のあり方については大きな課題となっており，様々な取り組みもなされている。私自身，教員を目指していることもあり，当時の社会背景や教育事情なども含めて，「スリーピー・ホロウの伝説」をもう一度見直し，教師が軽んじられている理由を探し，教師のあり方を考えていきたいと思った。

Ⅰ.「スリーピー・ホロウの伝説」

↑ *The Legend of Sleepy Hollow*の絵本（左）とビデオ（右）

独立戦争後のアメリカ。ハドソン河からさほど遠くないところに小さく静かな渓谷があった。眠気をさそう夢のような力がこのあたりをおおっているため，このさびしい谷は長いあいだスリーピー・ホロウ（まどろみの窪）という名で知られていた。ここには伝説は豊富で，幽霊の出る場所も多かった。

そこへある日，イカボット・クレインという男が教師としてやってきた。彼は生活費を補うために，あちこちの百姓の家に下宿し，食事の厄介になっており，そしてその子どもたちを教えていたのだった。さらに彼は，先生は単なる穀つぶしだと思われないように，い

ろいろと用事をしたり，好かれるようにしたりもした。女性たちには大もてだったが，彼は裕福な農夫の娘，カトリーナ・ヴァン・タッセルの愛情を勝ち得たいと願った。ところが彼にはライバルがたくさんいた。そのうちの一人，ブロム・ヴァン・ブラントという男は大した男でイカボットにとっては強敵だった。

そんなある日，タッセル家でパーティーが開かれた。そこへはイカボット，ブロムをはじめ大勢の者が招待された。イカボットはパーティーの最中，年寄りの物識り連中が集まって話をしている中へ入っていった。そこでは，独立戦争中の話やスリーピー・ホロウの幽霊話が出た。しかし，さまざまな物語のうちでいちばん主だったものは「スリーピー・ホロウの首なし騎士」の幽霊話であった。そうしているうちにパーティーは無事に終わり，イカボットは夜遅く一人で家へと向かっていた。その道中，彼は「首なし騎士」に出会ってしまった。その日以来，スリーピー・ホロウでイカボットの姿を見た者はいないのだった。

Ⅱ．アメリカの教育事情

アメリカの義務教育制度は植民地時代からあった。マサチューセッツ植民地で１６４２年，１６４７年に世界で最初の義務教育に関する法令が制定された。とはいえ，教員資格については特別な規定はされていなかった。１６５４年になって初めて教員資格に関する明白な規定がなされたのだが，教員の資格として最も重要とされたのは健全な教義であった。では，マサチューセッツ植民地において教員の資格が免許状の発行を伴う資格となるのはというと，18 世紀になってからである。

一方，バージニアなどを中心とする南部植民地やニューヨークなどの中部植民地においては少々事情が異なる。例えば，１６３７年，当時オランダの植民地であったニューヨーク植民地ではオランダ改革教会によって資格を吟味され，免許状を与えられた者，つまり最初の教員が存在していた。そして彼には学校教員の役割だけではなく，読経者，説教者としての職務を遂行することが求められていた。その後ニューヨーク植民地はイギリスの植民地となったが，英国国教会の支配下における教員免許資格においては，マサチューセッツ植民地と異なり，当該植民地総督の免許状，あるいはロンドン大司教の免許状が必要とされていた。

以上のように，植民地時代においては，教員資格に対して宗教的性格が浸透していた。１９世紀になると，教会の勢力は排斥されるようになり，教員に対する免許権や雇用権は市民の代表の手に渡るようになってきた。法的にはタウンの学級委員によって資格を有すると認められた者のなかから学区学務委員会が雇用を決定しなければならないのであるが，実態はその逆であり，免許状が発行される前に既に雇用が確定しており，教員免許の試験も口答試験での形式的なものであった地域が少なくなかった。

Ⅲ．アーヴィングと教育界

ワシントン・アーヴィング（Washington Irving）は１７８３年４月３日，マンハッタンに生まれた。短篇小説作家としてよく知られているアーヴィングは短篇小説だけでなく，エッセイや伝記，その他様々なジャンルの作品においても多作な作家であった。彼はまた法律家でもあり，アメリカの対イギリス・スペイン外交官のメンバーであった。

１９世紀前半のアメリカでは，公立学校運動が始まり，就学人口の増加に教員数が追いつかない状況となった。そのため，いかに安価に教員を雇用できるかが関心事であった。１８１５年，アーヴィングはヨーロッパへ旅に出かけた。『スケッチ・ブック』はその旅の最中，１８１９年～１８２０年に刊行された。

Ⅳ．イカボット・クレインにみる教師像

以上，Ⅰ～Ⅲで見てきたことから，イカボット・クレインにみる作者の教師像を見ていきたいと思う。

「スリーピー・ホロウの伝説」の中で，イカボット・クレインに関してアーヴィングは次のように描いている。

恍惚となったイカバットは，こんなことを空想しながら，緑色の大きな眼をぐるぐるさせて，ゆたかな牧草地をながめ，豊穣な小麦や，ライ麦や，蕎麦や，玉蜀黍の畑を見わたし，赤い実が枝もたわわになっている果樹園を見，それにかこまれたヴァン・タッセルの暖かい家を見ていた。すると，彼の心は，やがてこの領地をうけつぐことになっている乙女に恋い憧れた。彼の想像はさらにひろがって，こういうものを即座に厳禁にかえて，その金を広大な未開地に投資して，荒野のなかに板ぶき屋根の宮殿をつくることもできよう，などと考えた。（吉田甲子太郎訳『スケッチ・ブック』新潮社，207, 208 ページより引用）

他にもイカボットは女性に対してもろく，甘いとも描かれている。

女性と金銭にもろく，最後は幽霊を恐れて逃げ回る，という姿から教師への尊敬などといったものは受け取れるだろうか。なぜアーヴィングはイカボットをこのような「教師」にしたのか。私はその理由として，アメリカの教育事情が関わっているのではないかと感じた。教員になるための資格も採用もいい加減だったため，教職についている者全てが教師としての誇りを持っていたとも限らないし，人々の間には全体像として教師を軽視する傾向が少なからずあったのではないだろうか。「スリーピー・ホロウ」の中で，イカボットは牧師に次いで学問に通じている，とある。その結果，女性たちにちやほやはされていたが，尊敬の念というものは薄かったのではないか。人々に親切にしてはいても，それには生活費補助のためなどの裏があった。こういったイカボットの姿は今の日本の一部の教師にも見受けられるように思う。結果，教師に対するイメージはどうだろうか。教師への不信感を露にしている人は少なくない。私は，教師にとって不可欠なものとは，知識や表向きだけの指導だけではなく，その人間性であるのだと改めて感じた。

⑧　学んだこと，得たもの：イカボットの姿から，知識だけでなく，自己の人間性を充実させることの大切さを学んだ。そしてそれは教師だけに必要なものでは決してなく，社会の中で人間関係を形成していく上でも重要なものであるとも思う。

⑨　英語サマリー：I learned the importance of enrichment of not only the knowledge but also human nature from the figure of Ichabod. I also think that it is necessary to build well human relationship in a society as well as to be a teacher.

参考文献

W.アーヴィング著『スケッチ・ブック』吉田甲子太郎訳，新潮文庫，2000年

八尾坂修著『アメリカ合衆国教員免許制度の研究』風間書房，1998年

参考ホームページ

The Project Gutenberg EBook of *The Legend of Sleepy Hollow*

http://www.gutenberg.org/dirs/etext92/sleep11h.htm#title

エドガー・アラン・ポー

～推理小説と文学的特徴～

槇野　健太

①英語タイトル: Edger Allan Poe: His Detective Story and the literature feather ②Kenta Makino ③ 所属: 欧米言語文化講座　英語圏 ④　⑤
⑥　⑦論文を書くにあたっての関心事: 推理小説の始祖とも言われ、長い間万人に親しまれているエドガー・アラン・ポーの作品とそこに秘められている彼の作品の特徴

Ⅰ.エドガー・アラン・ポー(Edger Allan Poe, 1809-49)について

まずみなさんの先入観では、エドガー・アラン・ポーという文学作家はある一介のホラー小説家、推理小説家でしかないように思われる。確かに、私自身としても「アッシャー家の崩壊」という中世の拷問などが登場したホラー作品を観たためにその印象しかなかった。しかし、いざエドガー・アラン・ポーの作品世界に足を踏み入れてみると、ホラー小説のみならず推理小説、SF 小説など後世のさまざまな文学作品に影響を与え、講義でも取り上げられたハーマン・メルビル著「白鯨」にも多大な影響を与えており、特に探偵小説の分野にいたっては「推理小説の父」と現代でも語られているほどの文豪である。日本でも、その影響は多大であり、日本の有名推理小説家である江戸川乱歩もその名をエドガー・アラン・ポーからもじるほど影響が強かったと思われる。また、シャーロック・ホームズやコロンボ刑事など今でも万人に好かれている名探偵たちの祖先でもあるオーギュスト・デルパンを誕生させたのもエドガー・アラン・ポーである。

ここでは、私が最も興味のある推理小説の分野に焦点を当ててエドガー・アラン・ポーの作品を分析していきたい。

Ⅱ.エドガー・アラン・ポーの推理小説

私は数あるエドガー・アラン・ポーの作品から 3 つの代表作を挙げていきたい。

①「モルグ街の殺人(The Murders in the Rue Morgue)」

この作品は、エドガー・アラン・ポーの初めての推理小説であり、のちにシャーロック・ホームズにつながるオーギュスト・デュパンの誕生となる作品でもある。また、この作品こそ、古典純準本格の傑作であり、世界で初めて、純本格推理をあつかった小説でもある。犯罪物語は、古くから語られてきましたが、これほど分析的知性に訴える、推理の醍醐味を凝縮した作品だと言われている。

事件に立ち会わせる前に、まず、その資格のある人物であること、すなわち名探偵であることを、演繹帰納推理によって証明するために、デュパンは、語り手が何を考えていたか、的確な観察とあざやかな推理によって、暴露してみせる。そうやって語り手を驚嘆させるわけなのだが、同時に、デュパンの存在感、名探偵の実存性が、読者の胸に、はっきりときざまれるのです。作品自体も、17 世紀パリ、モルグ街で起こった殺人事件で、それはきわめて異常な現場でした。デュパンは、現場をつぶさに観察し、論理的な省察をくわえ、一歩一歩と帰納演繹推理を駆使し、しかも、たどり着いた真相は、驚嘆すべきものでした。

読者からすれば、目の覚めるような、わくわくする物語でありますが、一方、作家の側からすれば、これほど難しい小説構成もないように思える。

凡庸な観察で、凡庸な推理をならべ、誰でも思いつきそうな結論にたどり着いたのでは、推理にリアリティ、推進力、実証性が出ない。えてして陥りがちなのは、大まかな状況、漠然とした手がかり、意外な結論だけ、あらかじめ決めておき、そのあいだに来るべき推理を飛躍した無理な説明で穴埋めする、というやり方では“完全”な探偵小説にはなりえない。「モルグ街の殺人」では、思いもよらなかった真相が指し示されることによって意外性を生み出している。

この作品で私は、彼がとても心の中でどれほど苦悩したかうかがえた。単純な推理ではだめだしましてや読者に先を読まれるようなものはなおさらだろう。その中で、この作品を残した彼から表現の難しさとあえてそれにチャレンジする精神を学んだ。

②「マリー・ロジェの謎(the Mystery of Marie Roget)」

この物語も、オーギュスト・デュパンが名探偵とした作品であり、ニューヨークで実際に起こった、メアリー・ロジャース殺人事件を下敷きに、舞台をパリに置き換えて、再構成したものである。物語そのものはフィクションであるが、作者が冒頭で断っているように、作品の目的はあくまでも真実の追求、真相解明だ。そのため本心的な要素、重要な手がかりは細部にいたるまで事実そのままである、とエドガー・アラン・ポーは念を押している。

「モルグ街の殺人」の解決で名をあげたデュパンが、警察からの協力を要請されるところから、物語は、はじまる。香水店の売り子をしていたマリーが、セーヌ川で遺体となって発見されたためだ。警察は犯人を特定できず、捜査は暗礁にのりあげ、新聞もあれこれ憶測をならべるが、決め手にはならなかった。しかし、デュパンは、それらのことをあっ

さり見抜いた。また、マスコミの記事が、真実を追求にあるものでなく、センセーションをまきおこし、特定の主張を大衆に信じ込ませるためにあると作品を通して主張している。エドガー・アラン・ポー自身、マスコミで雑誌編集者として働き、刺激的な書評、作品、記事を書いて、読者を扇動するのを得意としていたから、非常に説得力がある。

さらにこの作品では、新聞の記事の憶測が、以下に浅薄で、根拠にとぼしいか、ひとつひとつ論破していました。この部分が、この作品最大の見所かもしれない。新聞が単に間違っていると批判するのではなく、記者が、別の目的のために筆をふるっているところまで、見抜き論破していくといった文で構成されている。そして、細かな観察がデータとなっているが、ポーは作中、ニューヨークの現場に行ったことがない、と断っている。ということは新聞記者のみを作中の推理をデータとし、エドガー・アラン・ポー自身が安楽椅子探偵をやってみせたのだ。作品で行き着いた結論はあくまでフィクションであるため実際にある事件をエドガー・アラン・ポーが推理して解決しているといった錯覚めいたものに陥る作品であった。

この作品では、さまざまな新聞の論破している姿が彼の中で疑問に点を明らかにし、それを追及し、読者に公表することで、自分の疑問に思っている点はさまざまな証拠から残らず明らかにするアクティブさがこの作品を通して伝わった。

③「盗まれた手紙(the Purloined Letter)」

この作品こそ、エドガー・アラン・ポーの探偵小説の中でも、傑作とうたわれる名編である。ストーリーの簡潔さ、明晰さ、意外性、そしてユーモア。のちの推理小説家に与えた影響の大きさは、計りしれない。

時は19世紀、舞台はパリ。素人探偵デュパンの書庫兼書斎へ、警察総監が、話にやってきたところから、はじまる。手紙が、誰に盗まれたのかは、わかっている。問題は、手紙が、どこに隠されているのか、という点。その人物の部屋か。外か。どこへやったのか。この単純な問題に、デュパンが挑んだ。話を聞いただけで、ユニークな推理方法をもちいて、見事に解決してみせる。

この作品は、一度読んだだけでは、その真価を理解できないだろう。この作品は何度も読んでこそこの作品の魅力やユニークさが伝わってくるのではないだろうか。そして、興味をそそる物語が、たったふたつのシーンから成っている点に、注目して、この作品は簡潔なプロットこそ、純本格探偵小説の要点なのだと想起させるような作品でもある。

謎は、いたって単純なものだ。どこに手紙を隠したのか。密室殺人も、ダイイング・メッセージも、身元不明の死体も、出てこない。純本格探偵小説は、単純な謎で、いっこうに、かまわない。問題は、謎を、どのように解くか。その解決が、どれほど新鮮で、納得ゆくものであるか。そこが大切なのだと思われる。

この作品で私は、表現の中でいかに物語をシンプルにしるしていくかが重要かというこ

とを学んだ。また、表現の難しさとともにひとつの事柄でもどのように提供していくのかどのようにしたら面白みが出せるのかがこの作品を通して伝わった。このように読者の視点でさまざまな表現をしているようにも思えた。

Ⅲ.イメージ一新

これらの 3 つの作品を通して思ったのは、エドガー・アラン・ポーはどの推理小説の中でも読者に対してシンプルかつ明快に読めるという印象を受けた。また、さまざまなジャンルの小説を活かし、全体的にダークサイドナ面を持ちつつ、ユニークな面も持ち合わせているように作品を読んでいくほどに思えた。そのため、読者に対してハラハラ感やわくわく感を持たせているように思え、それがまさに推理小説の真髄だろう。確かに、エドガー・アラン・ポーという偉大な小説家が一介のホラー作家、推理小説家ではなく、さまざまなジャンルに通じて万人に愛され、文学の世界で一時代を築き、それが現代の小説につながるような小説の始祖のようなものであるというように思い、今までの私のエドガー・アラン・ポーのイメージが崩された気がした。

⑧学んだこと、得たもの: あまり知られることのなかった推理小説にチャレンジする精神、ひとつの決まった表現に満足せずに多くの作品にさまざまな表現を使い、読者に対して知的かつ面白みを与えるために尽力するストイックさと向上心をポーの作品から学んだ。

⑨SUMMARY: I learned the fighting spirit that Poe challenge detective stories which was not be known very much, the stoic, and the spirit of improving that he had not never been satisfied one expression, he tried to use many expressions in his pieces to give readers intelligence and interesting.

参考文献

Wikipedia:
http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%A8%E3%83%89%E3%82%AC%E3%83%BC%E3%83%BB%E3%82%A2%E3%83%A9%E3%83%B3%E3%83%BB%E3%83%9D%E3%83%BC
モルグ街の殺人事件(エドガー・アラン・ポー/佐々木直次郎訳/新潮社出版/1951 年出版)
マリー・ロジェの謎(エドガー・アラン・ポー/佐々木直次郎訳/新潮社出版)
盗まれた手紙(エドガー・アラン・ポー/佐々木直次郎訳/新潮社出版)

エドガー・アラン・ポー
～大作家の生涯～

加納 将貴

① 英語タイトル：Edgar Allan Poe ~the Life of A Great Writer~
② 英語名：Masataka Kano　③ 所属：欧米言語文化講座　英語圏
④　⑤　⑥
⑦ 論文を書くにあたっての関心事：ポーの生涯、作品の特徴

Ⅰ．始めに

エドガー・アラン・ポー(Edgar Allan Poe, １８０９～１８４９)は世界でも有名なアメリカの作家である。私たちの住む日本でも、明治の１０年ごろに紹介されて以来、多くの人々が彼の作品に惹かれ、影響を受けてきた。その一人として有名なのが推理作家の江戸川乱歩(１８９４～１９６５)である。彼の名前はエドガー・アラン・ポーをもじったものである。ポーは時代背景と無関係の作家と思われることが多いが、彼の作品の中には当時の社会から影響を受けた作品もある。そんなポーの生涯、作品について探っていこうと思う。そしてその過程で、彼の生き方、作品から、自分が今を生きる上で役立つことを１つでも見つけてみたいと思う。

Ⅱ．ポーの生涯

ポーは舞台俳優の子としてボストンで生まれた。ポーは幼い時に両親をなくし、リッチモンドの子どものいない裕福なアラン夫妻の養子となった。しかし

義父との間に亀裂が生じ、ポーはアラン家を出ることになる。ポーはボストンに戻り、エドガー・A・ペリーの名で合衆国陸軍に入隊した。上級曹長にまで昇級したが、自ら除隊した。その後ポーは本格的な作家活動に入っていく。リッチモンドの雑誌「南方文学新報」“the Southern Literary Messenger”の編集者となり収入を得た。この頃、２７歳のポーは周囲の猛反対を押し切って、まだ１３歳だったいとこのヴァージニアと結婚した。そしてニューヨークに移った後フィラデルフィアに移転。当時の社会は文筆で生計を立てることは難しく決して豊かな生活ではなかったが、彼の作家としての人生は充実していた。ポーは１８４０年に記念すべき最初の短編集『グロテスクとアラベスクの物語』を出版した。しかしそんな中、４２年にヴァージニアに肺結核の兆候が現れ、精神的な打撃を受け、金欠などの悩みも重なりポーは健康を害していく。ヴァージニアは亡くなり、その２年後、ポー自身もボルティモアの路上で重篤状態で発見され、ワシントン大学病院へ搬送されたが、亡くなった。

ここで着目したいのは１８４０年ごろである。作家としての充実を手にして間もなく、妻に病が襲い掛かった。私はこのことから人生の無常さを感じずにはいられなかった。確かに人生は良いこともあれば悪いこともあるだろう。それの繰り返しが人生なのだと思うが、作家としてこれからという時に、ポーを襲った悲劇は、私が想像する以上にポーにとって残酷だっただろう。

Ⅲ．時代・社会と作品の背景

ポーを語る上で外せないのが短篇小説である。ポーの短篇は多様性に富んでいる。それは大きく４つに分類できる。

１つ目は、「アッシャー家の崩壊」“The Fall of the House of Usher”に代表されるような奇怪な超自然を題材とするものである。日常に潜む不可解な世界の存在を描くことによって、人間存在の不安・不可思議、運命、死の恐怖に対して読者の感覚を研ぎ澄まさせた。

2つ目は、「軽気球夢譚」“The Baloon-Hoax”に代表されるようなパロディやホークスなどのこっけいな物語である。大げさなジェスチャーや言葉遊び、あるいは不条理なストーリーが展開される。またポーの豊かな想像力は当時めざましい発展を遂げつつあった科学と結びつき、ミイラと話したり、サイボーグをつくり上げたりなどのサイエンスフィクションのようなものも生み出した。

3つ目は、架空の人物で世界初の名探偵といわれるC・オーギュスト・デュパン（*C. Auguste Dupin*）が登場する「モルグ街の殺人」“The Murders in the Rue Morgue”に代表されるような推理小説である。これによってポーは推理・探偵小説の祖といわれている。数は多くはないが現代推理小説の代表的なタイプの原型を作ったといえる。

4つ目は、「ウィサヒコンの朝」“Morning on the Wissahiccon” に代表されるような風景を主題とするものである。この作品の中でポーは以下のように述べている。

「アメリカのどの地方でも、一番美しい景色を見たいと思うならば、鉄道や汽船や駅馬車はもちろん、自家用の馬車も、馬すらもあきらめて、自分の足で歩かなければならぬ。」

このようなことから急速に進む産業化による自然破壊に対するポーの批判の気持ちが受け取れる。アメリカは独立戦争(１７７５～１７８３)後どんどん力を増していき、19世紀にはルイジアナ買収、メキシコとの米墨戦争(１８４６～１８４８)などの諸外国との戦争、アメリカ国内での内戦である南北戦争(１８６１～１８６５)などを経ていくことになる。このころ大陸横断鉄道の建設など産業、科学技術も同時に発展していくこととなる。このような変遷の１９世紀の中で、ポーの作品のいくつかは社会を映し出していたと言える。当時の社会に敏感で、かつ自分の世界を作り上げたポーの作品だからこそ時代を越え多くの人々を魅了しているのだと感じた。

Ⅳ．最後に

上で述べた通りにポーの作品の中には社会背景とリンクしているものもある。その作品の中で自然破壊を批判するなどして、自然に対する愛情を示したのだ

と思う。自然だけではなくポーは最愛の妻であるヴァージニアに対しても大きな愛情を持っていたのであろう。ポーの書いた最後の詩「アナベル・リー」*"Annabel Lee"*はヴァージニアに対する痛切な想いから書かれたものであった。以下がその一部分である。

But our love it was stronger by far than the love
Of those who were older than we
Of many far wiser than we
And neither the angels in Heaven above
Nor the demons down under the sea
Can ever dissever my soul from the soul
Of the beautiful Annabel Lee

愛情というものは私たちにとってかけがえのないものだ。人に対する愛情だけではなく、ポーは自然破壊に対する危惧を抱き、自然に対する愛情も忘れなかった。私はポーの生涯や作品について学ぶと同時に、時代が変わっても、変わらない愛情の存在も再認識した。このように、ポーについて探っていく中で、単に文学者について、その作品についてだけではなく、他にも大事なことを学ぶことがあるのだと知った。自分が直接学ぼうとしたこと以外でも、私たちはいくつかのことを学べるのだと。このポーについての考察を通して、これから自分がいろんなことに挑戦する中で、広い視野、広い視野を持って取り組むことによって、より多くを学び吸収できると感じた。これから先、たくさんのものを見て多くを学んでいきたいと思う。

⑧ 学んだこと：ひとつの分野を学ぼうとする中でも、違う分野での発見もあるということ。広い視野を持って多くを学んでいくことが重要だということ。
⑨ 英語サマリー：When we learn or do something ,it is important that we should have a wide view and learn more.

参考文献

『E.A.ポーの短編を読む【多面性の文学】』　板橋好枝　野口啓子　(勁草書房)
HP　http://pinkchiffon.web.infoseek.co.jp/book-AnnabelLee.htm

エイブラハム・リンカーン

～努力し、成功し、愛されたアメリカンドリーム～

井上　繭加

執筆者データ：①英語タイトル：Abraham Lincoln：Ideal American　②英語名：Mayuka Inoue
③所属：欧米言語文化講座　英語圏　④　　⑤　　⑥
⑦論文を書くにあたっての関心事：リンカーン　南北戦争　国際交流　教育問題　公民権運動

Ⅰ.はじめに

リンカーン(1809-65)と言えば、「奴隷解放宣言」、「ゲティスバーグの演説」などで有名なアメリカ合衆国の第 16 代大統領である。彼は政治家としてさまざまな演説を行ったが、彼の言葉は多くの人々の心を動かし、社会に影響を与えた。ここでは彼の残した言葉を文学と捉えて、そこから得られるものについて考えていこうと思う。

彼は国民にもっとも愛され、尊敬された大統領であると言われているが、なぜそのように言われているのか、実際にはどのような人物であったのか探っていきたいと思う。そして、自分のためになることをその過程で見つけていきたい。

Ⅱ.生い立ち

リンカーン(Abraham Lincoln)は 1809 年、ケンタッキー州の貧しい農家に生まれた。両親の農作業を手伝いながら学校に通い、熱心に勉強した。そして、雑貨屋、郵便局員、測量士、弁護士など、たくさんの仕事を経験した。

1834 年、イリノイ州の選挙に立候補し、議員となる。しかし、議員になったものの収入は多くはなかったため、彼は弁護士になった。そこでも、彼は多くの人を助け、多くの人の信頼を得た。また、その頃から奴隷制度について反対する演説を各地で行った。その演説が素晴らしかったため、共和党から大統領に立候補するよう薦められ、1860 年、ついに第 16 代大統領に当選した。

このように、彼が大統領という立派な地位に到達することができたのは、貧しさに負けることなく努力し、いろいろな経験を積んだ結果だと思う。努力の大切さを改めて感じた。

Ⅲ. 南北戦争

奴隷制度に反対していたリンカーンの大統領就任を南部諸州は容認せず、次々と連邦からの離脱を行う。連邦の分裂と分断を防ぐため、リンカーンは強硬な態度に出た。これが南北戦争へとつながる。南北戦争は彼のフラストレーションの源であり、任期のほぼすべてを占めた。リンカーンは正規の軍事教育を受けたことがなく、指揮官クラスで戦争に参加した経験もなかった。しかし彼は持ち前の人格と知性を駆使し、偉大な軍事指導者として後に賞賛されることになる。ジョージ・マクレラン将軍を始めとする総指揮官達が繰り返した一連の失敗によるフラストレーションの後に、リンカーンは、急進的で有能な軍指揮官ユリシーズ・S・グラント将軍を任命する運命的な決定を下した。グラントは軍事知識とリーダーシップを発揮した。

リンカーンはここで、洗練された人格、信頼を持つ指導者としての非凡なる才能を開花させ、みんなに慕われる存在であったことが分かる。

Ⅳ. 奴隷解放宣言

リンカーンは奴隷解放宣言によって黒人奴隷を解放したことで賞賛される。しかし、実際には連邦軍によって制圧された南部連合支配地域の奴隷が解放されただけであって、奴隷制が認められていた北部領域では奴隷の解放は行われなかった。リンカーンは、戦争の発生だけが大統領に合衆国内に既に存在する奴隷を解放する憲法上の力を与えたと主張して戦時立法として宣言に署名した。反乱州における奴隷制度を廃止した宣言は公式な戦争の終結となり、それは奴隷制の廃止と連邦での市民権の確立に関するアメリカ合衆国憲法第13条および14条の修正条項制定の推進力となった。政治上奴隷解放宣言は北部に対して大きな支援となった。南部の綿花の主な購入先であり、北軍の海上封鎖を打破しうる海軍力をもっていたのはイギリスだったが、イギリス世論は奴隷廃止を支持。イギリスが南部を支持することはなかった。

この宣言は、実際にすべての奴隷が解放されたわけではないにしても、歴史的に非常に意味のあるものであったと思う。

Ⅴ. ゲティスバーグの演説

1863 年、アメリカ南北戦争最大の激戦地ゲティスバーグで、リンカーンは戦没者墓地奉献式典の中で短い演説を行った。これが「ゲティスバーグの演説」である。

この演説の一節にある「人民の、人民による、人民のための政治」という言葉はとても有名である。これはその後民主主義の本質を簡潔に示す名文句とされる。原語の“government of the people, by the people, for the people”は「人民から構成する、人民による、人民のための政治」という意味である。これは、1380 年にイギリスで出版された旧約聖書にジョン・ウィクリフが序文として書き込んだ文章であり、牧師のセオドア・パーカーが著書で紹介したのを引用したものと思われる。なお、演説自体は3分程度と非常に短く、当時の新聞の評価はいずれも厳しいものであったが、翌年大統領選挙が行われ、リンカーンは再選を果たしている。

短いが説得力のある演説である。自由と平等という民主主義の意味を考えさせられた。

〔1863年、11月19日のゲティスバーグ演説〕

87年前、我々の父祖たちは自由は保障されなければならない、すべての人は平等につくられているという信条を持って新しい国家を築き上げた。今、我々な大きな内戦の渦中に立たされており、父祖たちが築き上げたこの国の自由と平等の精神、信条がこれから永遠に後生に伝えていけるかが試されている。父祖たちの自由を勝ち取るために戦った戦場に、今我々一同は会している。この国の存続の為に命を捧げた人々の安息の地であるこの場所で自らを捧げるべく、我々は今ここに集まった。我々がやらなければいけない行動は、紛れもなく適切で正しい行動だ。しかし、広い意味で考えると、私たちがこの土地に自分を捧げることはできないだろう。ましてや、この土地を神聖なものとすることもできない。戦争で奮闘した勇敢な戦士たちこそが、その生死に関わらずその身をこの地に捧げたことによって、この地は神聖なものとされたのだ。彼らに対して、非力な私たちがこの土地をどうこうしようなどとはお門違いなのである。我々がここで何をどれだけ言っても、世界は父祖たちの勇敢な行動に見向きもしないかもしれない、またいずれは忘れてしまうかもしれないだろう。しかし、我々は勇敢な戦士たちの行動を絶対に忘れることはできない。むしろ、これまで勇敢な戦士たちが気高き心で推し進めてきた未完の仕事を成し遂げるために自らを捧げなければならない。 むしろ、我々の目の前に残された大きな宿題に身を捧げなければならない。彼等が最後まで身を捧げた大義の為に、彼等の死を無駄にはしない為に、名誉ある戦死者たちが最後まで全身全霊に身を捧げた大義のために、私たちも一層の献身をもってあたらなければならない。これらの勇敢な父祖たちの死を無駄にしないために、神のもとで新しい自由を生み出し、そして、人民の人民による人民のための政治・統治がこの地上から失われてしまわないよう高らかに決意しなければならない。

VI.最後に

以上のように、南北戦争、奴隷解放宣言、ゲティスバーグ演説などでリンカーンはとても大きな役割を果たし、歴史を動かした偉大な大統領であったことがわかる。

アメリカでは、すべての人が家柄や身分に関わりなく、努力次第でいかなる成功をも達成し、豊かになれる「アメリカン・ドリーム」という言葉がある。「丸太小屋からホワイトハウスへ」というのが、リンカーンのキャッチフレーズであったが、実際に丸太小屋で生まれ、十分な学校教育を受けることができなかった少年が、努力を重ね、ついには大統領の地位までのぼりつめ、「アメリカン・ドリーム」を実現させたというのは、リンカーンはアメリカ人にとっての希望である。そしてまた、演説からリンカーンは何よりも民衆を愛し、民衆を大切にする政治家であったことがわかる。

このような理由から、リンカーンは今でもアメリカ国民に愛され続けているのだろう。

私は、彼の人生から学んだたくさんのことを、自分の人生に活かしていきたい。

⑧学んだこと、得たもの：リンカーンは貧しい家庭に生まれながらも努力して大統領となり、奴隷解放などに携わりアメリカの歴史を大きく変えた偉大な人物の一人だ。今でも多くの人々に尊敬されているのは、彼の生き方や、人柄ゆえであると思う。彼は、努力をすれば誰にでも成功するチャンスがあるということを証明したと思う。

⑨英語サマリー：Lincoln was born a poor farmer's son. However, he became a president of the United States because he made efforts. And he is one of the greatest persons that changed American history. Even now, many people respect him for his way of life and personality. I think that he showed that everyone could make a success in life if he exerts oneself to realize one's dream.

参考文献

『リンカーン』　砂田 弘　著　(講談社 1989)

参考 HP

http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%A8%E3%82%A4%E3%83%96%E3%83%A9%E3%83%8F%E3%83%A0%E3%83%BB%E3%83%AA%E3%83%B3%E3%82%AB%E3%83%BC%E3%83%B3

http://ja.wikiquote.org/wiki/%E3%82%A8%E3%82%A4%E3%83%96%E3%83%A9%E3%83%8F%E3%83%A0%E3%83%BB%E3%83%AA%E3%83%B3%E3%82%AB%E3%83%BC%E3%83%B3

『森の生活』とアーミッシュの暮らしから学ぶもの

橋本　加奈子

執筆者データ：①見出し：Learning from the Life of the Amish ②英語名：Kanako Hashimoto ③所属：欧米言語文化講座　独語圏 ④　　⑤
⑥　　⑦関心ごと：電気も水道もない生活がどのようなものか,Henry David Thoreau は森での生活に何を求めたのか,アメリカとドイツのつながり

Ⅰ．Henry David Thoreau が目指した生活

ヘンリー・デイヴィッド・ソロー（Henry David Thoreau,1817-1862）は、アメリカ合衆国マサチューセッツ州コンコード市生まれの作家・思想家・詩人・博物学者である。ソローはコンコード市のウォルデン湖の森の中に自ら小屋を建て、1845 年から 2年2ヶ月にわたり自給自足の生活を送った。その記録が『森の生活』(*Walden*, 1854) で語られている。森に住んだ目的として、「私が森へ行ったのは、思慮深く生き、人生の本質的な事実のみに直面し、人生が教えてくれるものを自分が学び取れるかどうか確かめてみたかったから･･･」と語っている。また、「原始的な辺境生活を送ってみると、最低限の生活必需品とはなんであり、それを手に入れるにはどうしたらよいかがわかる」と書かれており、生活必需品とはつまり「食物」である。衣･食･住が揃えば生活は出来るが、近頃ではそれらに贅沢さを求めるようになってしまった。ソローは「われわれが簡素に、また賢明に暮らす気になれば、この地上で自分の身を養っていくことは苦痛であるどころか気晴らしにすぎない･･･」と語っており、この簡素で倹約な生活がまさにアーミッシュの暮らしであり、現在ロハスという生活スタイルが流行している中、ずっと以前に実行したのがソローであった。

唯一の交通手段である馬車　　シンプルな衣服

興味を持った理由：ソローの『森の生活』がアーミッシュの暮らしであり、それはドイツに関連していると聞き興味を持った。調べていると、ペンシルバニア州東部の町ランカスターを中心とする田園地帯の呼び名で、１７世紀に、宗教迫害を逃れてきたドイツ系開拓移民が住みついた土地であるダッチ・カントリーでは「ダッチ」は、「オランダ」を意味するのではなく、ドイツ語を母国語とする人々だと分かった。また普段私たちが何気なく使っている「電気や水道のない生活」に彼らは様々な工夫をしていることを知り、キャンプを趣味としている私はとても興味を持ったからである。

Ⅱ．アーミッシュとは？

17 世紀の終わりにヨーロッパから宗教迫害を逃れてやってきたアーミッシュの祖先が最初に開拓して住み着いたのがペンシルベニアである。彼らはキリスト教徒であり、その中でもアーミッシュ派・メノナイト派・ブレスレン派・ダンカー派などの人たちは特に「質素な人々」“Plain　People”と呼ばれていた。彼らの生活には、電気もガスも水道もなく、ラジオもテレビも自動車もない。そのように便利なものを拒否するためには家族やコミュニティの結束が不可欠になる。家族は常に一緒にいて、一緒に働き、一緒に食事をしている。時代の移り変わりと共にアーミッシュ派の中には、自動車の所有を許すなど、近代文明の利器を取り入れながら、やや寛大な戒律に従った生活を送るグループも出てきているが、自らの意志と所属する社会の意志とを調整してからでなければ新しいものをそのまま取り入れることはない。

アーミッシュの家庭では、性別により仕事の分担がはっきりと決まっている。夫であり父親である男性は、社会と関係することについての決定権を持ち、農場経営の役割分担を決め、農場や納屋での仕事の指導をする。女性は結婚すると、ふつう 8～10 人くらいの子どもを生み育てる。彼女たちは、菜園の手入れ・食事の準備・子どもの世話・掃除・洗濯・縫いものなどを日々の仕事としている。子どもたちの学校教育は 8 年間だけとし、いわゆる「読み・書き・そろばん」という基本的なことだけを教えている。16～18 歳になると洗礼を受けることが多い。洗礼はアーミッシュの社会では大きな意味を持っており、結婚への絶対必要条件である。

このような姿は昔の日本を見ているように思える。男は外で働き、女は家事をする。アーミッシュの社会において、これは男尊女卑ではなく、それぞれの仕事を誇りにして生きている。また子どもたちは決まった枠の中で縛り付けられて生活しているのでもない。

アーミッシュの生活を「衣･食･住」に分けて詳しく説明すると・・・

i.衣

女性には2種類の帽子があり、1つがコップと呼ばれる白のオーガンディで作られたもので髪の毛をおおうもの、もう1つは黒い布で作られたボンネットで頭部すっぽりおおうものである。ワンピースはシンプルで無地のもの、スカートの上には白か黒のエプロンをする。その上ケープで上半身を覆うのが普通である。男性は黒いつばの広い帽子、夏は麦わら帽子をかぶり、無地のシャツに吊りズボンをはいて、靴は黒といったスタイルがポピュラーである。外出や正装時には黒のジャケットやベストを身に着ける。

女性は髪を切ることを禁じられているので、真ん中で分けて後ろで束ねて、化粧をすることも宝石を身につけることもない。男性は髪を耳たぶのところで刈り、前髪も切るので分けることはない。結婚するまでは髭を剃るが、結婚すると髭をはやし、もみあげも伸ばして良い。

成人男女の衣服→

ii.食

彼らは自給自足の生活をしており、冷蔵庫を持たないので、畑や裏庭で採れた野菜や果物や肉類までもびん詰めにしたり、冷凍･乾燥させて保存する。週に一度か二度はパンをオーブンで焼いているが、ビスケットやケーキなど簡単なものを焼く時には、ダッチ・オーブンと呼ばれる3本の鉄製の脚のついた鍋が使われ、これは日本でもキャンプなどでよく使われている。また食事の時間は家族全員が顔を合わせる、家族の大切なコミュニケーションの時間となる。

iii.住

アーミッシュの家はたいていレンガ造りか木造二階建てで、白か灰色のペンキで塗られている。1階に広い居間と台所、2階には家族のそれぞれの部屋がある。カーテンや絵画、写真などの装飾となるようなものはひとつもない。また彼らの唯一の交通手段は馬車である。屋根なしの二人乗り、箱型の家族用、荷台付きワゴンなどがよく見かけられる。電気がないので、電話や電球はもちろんないが、“The Budget”と呼ばれる新聞で情報を伝え合い、ランプなどを使って生活している。

Ⅲ. Ordunung と Gelassenheit とは？

アーミッシュの社会は、自らのアイデンティティを維持するために伝統を重んじている。“Ordunung”とは、アーミッシュにとって非常に大切なものであり、衣服のこと、家具のことなど、きわめて具体的な事柄についての約束事である。また生き方の基本を“Gelassenheit”「従順・謙虚・服従・倹約・質素」とし、これを犯すことは罪を犯すことと同じであると考えている。彼らの人生の目的は従順で、礼儀正しく、家庭的な個人になり、社会より大きな目的の為に自らをささげることであり、彼らはこのような規則を守り、家族を大切にしながら生活をしているのである。私たちの社会ではテレビ・ラジオ・インターネットなどで情報が飛び交い、他人の評価を気にして慌しく生活しているが、アーミッシュは他人に評価されることを避け、ゆったりとした生活を送っているのである。また、「孤食」をしている日本の子どもたちにとってアーミッシュのように家族のとの時間を大切にすることが重要なのではないかと思う。

⑧学んだこと：従順で質素な生活をする中で培われる、謙虚さ・責任感・忍耐強さをもったアーミッシュの人々。いじめや少年問題が絶えず流れている日本において、子どもたちにはそのような心が必要なのではないかと思う。

⑨英語サマリー：The Amish have modesty, a sense of responsibillity and patience which are cultivated in their plain and simple life. In Japan, there are continually bullying and juvenile delinquency. I think that Japanese children should learn the mind and spirit of the Amish.

参　考　文　献

『森の生活』上・下　H.D.ソロー著　飯田　実訳　(ワイド版岩波文庫,2001)

『アーミッシュの人々』　池田　智著　(サイマル出版会,1995)

『アーミッシュの贈り物』　ジョセフ・リー・ダンクル著　(主婦の友の会,1995)

リアリズムの夜明けから ロストジェネレーション、そして 戦後へ

O・ヘンリー

F・スコット・フィッツジェラルド

アーネスト・ヘミングウェイ

『トム・ソーヤーの冒険』の魅力

和田　綾輔

① Charms of *The Adventures of Tom Sawyer*　②英語名：Ryosuke Wada
③所属：欧米言語文化講座　英語圏　④　　⑤
⑥　　⑦論文を書くにあたっての関心事：作者は何を考え、何を伝えたくてこの作品を書いたのか

I. はじめに

『トム・ソーヤーの冒険』（*The Adventures of Tom Sawyer*）は１８７６年にマーク・トウェイン（Mark Twain、１８３５－１９１０）によって発表された有名な物語である。現在に至るまでに映画化され、日本ではアニメ化までされるほどの人気を誇る。時代を越えて愛され続けるこの作品の魅力は何か？また、筆者はこの作品を通して読者に何を伝えたかったのか？マーク・トウェインの人生、生き方なども絡めながら考察していきたいと思う。

II. 作者の生い立ち

マーク・トウェインは１８３５年にミズーリ州フロリダで６人兄弟の５番目としてうまれた。本名はサミュエル・ラングホーン・クレメンズ（Samuel Langhorne　Clemens ）。彼が４歳の時、一家はハンニバルという町に移ったがそこは当時舟運で栄え、後にその町とそこの住人が彼の作品『トム・ソーヤーの冒険』に現れる人物と場所のモデルとなった。１８４７年に父が多くの負債

を残して死去した後は町の新聞社に勤め、そこで文章を書く術を身につけた。南北戦争が勃発すると国軍の小尉として従軍するもすぐに除隊した後はカリフォルニアに移り新聞社に勤めた。東部出身の裕福な家庭で育った女性と結婚し、これ以降は東部に移り住み作家としての後半生に入る。　彼の３大傑作と呼ばれる『トム・ソーヤーの冒険』『河上の生活』『ハックルベリー・フィンの冒険』など主要作品のほとんどがこの時期に生み出され、多くの人々に読み継がれることとなった。このように波乱万丈な人生を歩んだ彼だが、ユーモアには非常に富んでおり、その文体はヘミングウェイなどの有名な作家に引き継がれている。

Ⅲ. あらすじ

主人公トム・ソーヤーはおよそ１０歳のわんぱく少年である。母は亡くなり、優等生の弟シドと共に、伯母のポリーに引き取られて暮らしていた。トムは勉強が嫌いでいたずらに情熱を傾け、家の手伝いをさぼることに知恵を働かせた。いつも親友のハックと一緒に遊んだりいたずらしたり、日曜学校でも校長先生の訓話をぶち壊そうと企んだり、気障りな少年と取っ組みあいになったり、家出して川をいかだで下り海賊ごっこをしたりと、まさに「いたずら小僧」と言うにふさわしい少年であった。しかしそんなトムではあったが驚くべき行動力の持ち主であり、新しい遊びを流行らせたり子供たちの心をつかむような行動をすることにかけては天才であり、周りの子供からは一目置かれる人気者であった。ある日トムはハックと共に真夜中の墓地で殺人を目撃してしまう。犯人のインジャン・ジョーは他人に罪を着せるが裁判でトムに真実を告げられ逃走する。夏休みに観光用洞窟でトムは迷子になり、途中に行方不明になっていたインジャン・ジョーと遭遇してしまうが、なんとか逃れ町に戻る。しかしインジャン・ジョーが洞窟で何をしていたか気になったトムは再び洞窟に戻り、そこで財宝を探し当てる。

Ⅳ. 内容の分析

この作品のテーマはやんちゃ少年トム・ソーヤーの人並みはずれた「冒険心」と「自由」である。この作品が発表される当時のアメリカ社会を考えてみるとこの時代は開拓時代であり人々の好奇心や冒険心をそそっていた、さらに１８６３年にはリンカーンによって「人民の、人民による、人民のための政治」という民主主義の基本理念が発せられ、「自由の国」アメリカという理念の旗がかかげられた時代である。どうやら、この作品のテーマである「自由」と「冒険」は作品が作られた時代のアメリカ社会や人々の様子を反映していると言えるのではないだろうか。さらに作者の生い立ちを見ると、トム・ソーヤーの境遇と

大きく重なっているということが容易にわかるだろう。実際に筆者は物語序文でこの作品は自身の少年期の記憶を再構成したものであると書いている。筆者はトム・ソーヤーに少年時代の自分の姿を投影し、彼自身がトムになりきって冒険を楽しんだように、全ての読者に楽しみながら読んで欲しいという思いがこめられているのだろう。

V. トム・ソーヤーの魅力

なぜやんちゃ少年トム・ソーヤーが読者の心を捉え続けるのだろうか。その秘密はやはりトムの並外れた冒険心と自由にあるのではないだろうか。その毎日の「冒険」の楽しさを読むと、どことなく懐かしく感じ、自分もこんなところでこんな冒険をしたかったという思いにとらわれてしまう読者は私も含め、大勢いるはずである。いつもいたずらすることを欠かさないやんちゃなトムは、少年なら一度は憧れを持つ「不良」少年であり、アメリカ文学における「不良」像の起源であると思われる。テレビゲームなどが遊びの中心となっている現代だが、このやんちゃな少年は我々現代人が忘れてしまった本当の「遊び」を知っている。これもまたトムの魅力の一つである。実際に私達が子供の時も外を走り回ったり、冒険をしたりという事はあまりしなかっただろう。私自身もトムの冒険、やんちゃぶりには憧れを感じた。現代人が忘れてしまったものをトムは持っていて、そんな彼自身に我々読者は憧れを抱くのではないだろうか。

⑧学んだこと

マーク・トウェインは序文でこの小説の主たる対象が少年少女であると書いている。しかしそれに続く文章の中で、大人に対しても童心に帰って楽しむことを呼びかけている。彼自身この作品を通じて子供心に帰り、トム・ソーヤーに自分を重ね合わせて冒険を楽しんでいる様子もうかがえることから、彼の本来の目的そして読者に伝えたかったことはそこにあったのではないだろうか。私自身の生活でも、もう大人なのだから子供みたいにいつまでも遊んでいられないと思うときもある。が、しかしこの作品を読んでユーモアにあふれいつまでも子供の時の遊び心と冒険心を忘れずに人生を楽しむ、という彼の生き方は見習うべき価値があると私は感じた。

⑨Summary

Mark Twain is a very humorous novelist. He had always tried to enjoy his life as if he were a child. Many people were interested in his masterpiece, *The Adventures of Tom Sawyer* and his life. I think it is worthy following his way of life.

参考文献

『トム・ソーヤーの冒険』　マーク・トウェイン著　大久保　康雄訳
（新潮社　１９５３）

参考ＨＰ

http://www001.upp.so-net.ne.jp/meisaku/meisaku/tom/tom.html
http://www.marktwainhouse.org/japanese/

O・ヘンリーの「最後の一葉」から学んだこと

爲家　弥生

① 英語タイトル：Lesson of "The Last Leaf"
② 英語名：Yayoi Tameka
③ 所属：欧米言語文化講座 英語圏
④
⑤
⑥
⑦ 論文を書くにあたっての関心事：将来(人生)について・社会に出る不安・短篇小説が持つメッセージ性

Ⅰ．興味を持った理由

米文学に関する知識が皆無に近かった高校生の私が唯一「アメリカの作家」として名前を認識していたのがO・ヘンリーで、その作品をいくつか読んだことがあった。その頃、「小説＝長くて読むのに時間がかかるもの」と何となく考えていた私は、彼の作品に触れて初めて短篇小説の存在を知った。彼の作品は結末に意外性を持たせたものが多いのだが、いくつか作品を読むにつれて、短いページ数の中の話の展開にはそれぞれ深い意味があるのだろうと感じるようになった。当時はそれ以上深く考えず、ただ読んでいただけだったのだが、今回与えられたテーマに沿って論文を書くにあたって、この機会に作品を私なりに読み解いてみようと思った。これが、O・ヘンリーの作品を取り上げようと思った理由である。

今回読むことにした「最後の一葉」("The Last Leaf")も、以前読んだことのあった作品の中の一つであった。一度読んだあとの感想は、「ちょっと感動できる話」くらいだったが、もう一度読み返してみると、考えさせられることが多いのではないかと思うようになった。大学三回生の今、頭の中にある考え事でもっとも多いのは、卒業後の就職のことを含めた、これからの自分の生き方についてである。そこで、「実学」としてこの文学作品をとらえるために、原文では8ページ強、日本語訳文でも12ページという短い話ではあるが、そこから、これからの生き方にヒントを得られるような何かを学び取りたいと思っている。

Ⅱ. O. Henry と「最後の一葉」

ⅰ. 作者と作品について

「最後の一葉」の作者である O・ヘンリーは、本名をウィリアム・シドニー・ポーター(William Sydney Porter, 1862-1910)という。彼の人生は、妻を早くに亡くしたり、勤めていた銀行の金を流用して投獄される経験を持っていたりと、あまり平穏ではないものだった。彼の創作について、大津の解説を引用すると、「十三冊の短篇集、二百七十二の作品を残した。人気の絶頂を迎えたのは、死後全集が刊行されてからであった」(258)ということである。

(O. Henry's American Scenes, 1978)

「最後の一葉」の舞台は、絵描きが多く住む、ニューヨークのある地区とされている。あたりで猛威を振るうようになっていた肺炎がその町にもやってきてしまったことによって、若い女性画家ジョンシー(Johnsy)もそれにかかってしまった。病気で生きる希望をなくし、窓から見える蔦の葉が全部落ちたら自分も死ぬと悲観的になっている彼女のために、いつか傑作を書きたいと思い続けていた彼女の階下に住む画家ベールマン老人(Old Behrman)が心をこめて、冷たい嵐の夜に一枚の葉を描き、完成した後肺炎にかかって自分は亡くなるが、彼女は助かる、という話である。この二人以外にも、ジョンシーの同居人スー(Sue)とジョンシーとベールマン老人を診察する医者が出てくるが、以下では、ジョンシーとベールマン老人の二人の言動に注目する。

ⅱ. 希望を捨てず、前向きに生きることと、人を励ますこと

ジョンシーは、肺炎にかかって寝込んだことによって、弱気な気持ちが強くなっていた。部屋のベッドから見える蔦の葉が落ちていく様子を眺め、一枚一枚数を数え、その葉が全て落ちると自分も死ぬのだ、と悲観的になっていた。その彼女に看病をするスー

に対し、医者は、「助かる見込みは――そうだな――まあ、十に一つといったところだな(中略)その見込みも、あの娘が生きたいと思う気持ちにかかっている」(232)と言っていた。日本語でいう、“病は気から”が悪い意味で当てはまっている、という状況だった。

このような状況から抜け出し、病気が快方に向かっていったのはなぜだろうか。これは、この小説の一番重要な展開である、ベールマン老人の「傑作」によってであると言える。生きる希望を失っていた彼女だったが、最後の一枚になった葉を眺め、じきに落ちると言っていたにもかかわらずそれがなかなか落ちなかったのを見て、「あの最後の一枚がなにかの力でいまでもあそこに残っているのは、私がどんなに罪深かったかを私に教えるためだったのね。死にたいと願うなんて罪悪ね」(239)と言うようになった。そしてその後、また絵を描きたいとまで思うほど生きることに対しての希望を取り戻したのである。おそらく、ベールマン老人が葉を描いておらず、ジョンシーが全ての葉が落ちてしまった様子を目の当たりにしていたなら、このような前向きな気持ちになることは難しかっただろう。“一枚の葉”というきっかけによって、ジョンシーは気持ちを持ち直すことができたのである。

実際に病気になったとき、気持ちを前向きに保つことでこの小説のように病気が治るか、これは決して確実に言えることではない。しかし、病気のときに限らず、何か失敗をして落ち込んでいたり、悩みや不安を抱えていたりするとき、少しでも前向きな気持ちを持つように心がけることによって、落ち込んだ気持ちや悩みなどが和らぐことが多いのではないだろうか。また、この小説では、ジョンシーの気持ちの持ち方が回復に影響したことは指摘できるが、そのきっかけとして“一枚の葉”の存在があったことは確かだろう。実生活に置き換えて考えてみると、この葉のような働きができるもの、すなわち、人に前向きな考えを持たせるようにできるものの一つには、周りの人の「言葉」があるのではないだろうか。ある人が何かの理由で落ち込んだり悩んだりしているとき、自分の気持ちを自分で持ち直すことは難しくても、周りの誰かの「言葉」によって励まされ、前向きになれることがある。ジョンシーの気持ちの変化と、実際に身に起こった変化の描写から、辛いことがあっても、気持ちを前向きに持とうとすること、自分以外の人に対しても「言葉」やその他の方法によるきっかけを与えて気持ちを持ち直させることが出来るのではないか、と考えた。

iii. 自分のことは顧みず、人のために何かをすること

ジョンシーに生きる希望を与えた“一枚の葉”を書いたベールマン老人は、「芸術の落伍者」(236)といわれていた人物で、たびたび“傑作を描く”と言いながら、長い間着手もしないままだった。スーからジョンシーの様子を聞いたとき、ジョンシーの状況を哀れみ、「いつか傑作をわしが描いてやろう」(237)と言っていたが、恐らくスーはこの発言を本気とは思っていなかっただろう。しかし、この老人は、長い間書きそびれていた傑作を書き上げ、それが完成した後、命絶えたのである。

ベールマン老人は、なぜ“一枚の葉”を描いたのだろうか。これは、ジョンシーという一人の若い女性が死と隣り合わせになっている上に、本人が生きることに対して消極的になっているという事実を知って、大きく心を動かされたからだと言える。彼の心境の深い部分までは推測仕切れないが、おそらく、それまで傑作を描けていなかったのは、描こうと思えるようなきっかけをつかめていなかったからであろう。単に絵を描くだけなら、何となく気に入った風景や人物のモデルを描けばよいが、自分が心から満足できる、思いをこめて描ける“傑作”になる題材というのは、そう簡単に見つけられるものではないだろう。しかし、ベールマン老人は、偶然階上の女性(スー)から聞いたその友人(ジョンシー)の話によって心を動かされ、創作への意欲が掻き立てられたのだといえる。

ベールマン老人は、渾身の力を振り絞って“一枚の葉”を描いた。その作品は、ジョンシーが本物の葉と見間違えた程緻密で精巧なもの、まさに傑作と呼ぶにふさわしいものであった。この葉によってジョンシーの命は助かったが、老人自身は肺炎で亡くなった。彼はもちろんその結果に不満を持ってはおらず、むしろ、思い通りの作品が描けて満足だという気持ち、ジョンシーの命を救うきっかけを作ることが出来て嬉しいという気持ちを持っていると思われる。自身が傑作を描きたかったという気持ちはあっただろうが、ベールマン老人のしたことは、客観的な言い方をすると、「自分のことは顧みず、人のためになることをした」と言えるだろう。このことも、この小説の中だけに言えるのではなく、社会生活の中でも大切なことであると言える。もちろん、この老人のように命を懸けてまで人のために行動するのは容易に出来ることではないし、自分自身の命は大切にしなければならない。しかし、自分の利益や損得については考えずに、誰か他の人のために小さなことでも一途になって行動することは、人として備わっていることが望ましい姿勢ではないだろうか。そして、こういった「自分ではない誰か」への行動によって、自分自身の心も豊かさを感じられるのではないか、ということも、ベールマン老人の創作のエピソードから考えるようになった。

iv. 文学作品から学ぶこと

「最後の一葉」という短い小説の中に、作者がどのような主題をおいたのか、今の私には深層部分までは理解出来ていないだろう。しかし、一つの文学作品に対して、自分なりの教訓を見つけることや、その話から自分の考え方を再検討することというのも、文学作品の一つの読み方だと言えると考える。したがって、この考えのもと、上の節で述べた**この小説から学んだ二つのこと**について、改めて検討したい。

まず、「希望を捨てず、前向きに生きることと、人を励ますこと」についてである。この小説の登場人物であるジョンシーは、病気にかかったことにより弱気になり、生きる希望を失っていた。確かに、気持ちが後ろ向きになっているときは、その理由が深刻であればあるほど、自分で前向きな気持ちを持とうとすることは難しいだろう。しかし、立ち直った後に振り返ってみると、悩んでいた事がそれほど深刻ではなかった、という

ことに気づくことも珍しくないのではないだろうか。人間は、一つの心配事や悩みを抱えたとき、それに対して不安を感じることによって、悩んでいなかったときには気にしなかったような事まで気になってしまうことが多いと思われる。したがって、やはり、悩みや心配事のある中でも、あまり考え込まず、明るい気持ちを持つようにすることで、その解決につながる鍵をつかんでいられるのではないか、と考える。

しかしながら、望ましいことではありながら、自分自身の気持ちの持ち方で悩みや心配事を解決することは必ずしも出来ることではない。ジョンシーにベールマン老人の絵があったように、自分以外の何か、誰かの助けが必要なことも多いであろう。そして、上の節でも述べたように、その手助けの一つとして、「言葉」があると言える。人から悩みを打ち明けられたとき、それに対するアドバイスをすること、落ち込んでいる人に、励ましの声をかけることなど、「言葉」は多くの役割を担っている。これから社会に出て行けば、今までよりも多くの壁にぶつかり、自分自身が悩んだり、周りの人が落ち込んでいたりする場面に出会うことがあるだろう。自分自身のことで悩むことが多い現在、自分に目を向けることに精一杯で、周りの人に「言葉」をかけることにあまり目を向けられていなかったが、この小説のベールマン老人の生き様に触れて、人に「言葉」を与えられる側でもいられるよう努力したい、と考えるようになった。

「最後の一葉」から学んだもう一つのことは、「自分のことは顧みず、人のために何かをすること」である。この小説のベールマン老人のように、命を顧みず行動することは難しいことだが、こういった姿勢というのは、「相手のことを思いやる」ということにつながる部分があるのではないか、と考える。自分のことを最優先に考え、自分がよければ他のことはどうでもいい、という考えを持っていては、相手のことを思いやるなどとうていできない。しかし、人間は一人一人が好き勝手に生きていては社会は成り立たず、多くの人が集団の中で生活することによって成り立っている。その中において、相手を気遣う心を持ち、そのひとのために何かをしたいと考えたとき、それを実現するには、自分のことはひとまず考えないで行動しなければならないこともあるだろう。そして、相手のことを大切にするという考えを持って、実際に行動を起こしたとき、その人自身も満ち足りた思いを感じることが出来るのではないだろうか。自分自身のことで考えてみると、学生として大学に通う今に比べて、一人の社会人として働き始めると、今よりも更に、集団の中で生かされていることを認識するであろう。今でも、相手のことを気遣い、その人のためになることをするべきだ、ということを意識しているつもりではいるが、社会に出てからはその重要性をより意識するようになるだろう。こうした「一人の人間として備えておくべき人間性」についても、この小説を通して考えることができた。

Ⅲ. むすび

O・ヘンリーの「最後の一葉」から、単に読んで感動出来たという小説の一面だけでなく、これからの人生において教訓とできるような一面を垣間見ることができた。それは、「希望を捨てず、前向きに生きることと、人を励ますこと」と、「自分のことを顧みず、人のために何かをすること」である。ベールマン老人の行動によってジョンシーが助けられたという実際の小説からも、また、それをもとに自分の考えを巡らせていても、感じたのは、人間は一人では決して生きられないということだった。人間は誰しも弱い部分を持っているため、何かに悩んだり、落ち込んだりすることが当然ある。それをまずは自分で解決しようと試みるが、それが出来ないときは、周囲の人の助けが必要になる。それは、「言葉」という方法であったり、行動によって示される方法であったりと、時と場合によって異なるが、いずれにしても、手を差し伸べる側は「悩んでいる、落ち込んでいる人のために自分が出来ることをしたい」という、相手を思いやる気持ちを持っていることが大切である。私自身がこれから歩んでいく人生においては、自分自身で立ち直れないほど落ち込むことや、自分のことしか考えられなくなるようなことがあり、人に助けてもらわなければならないことがあるだろう。しかし、逆に、自分の周りの人がそういう状況に陥っていたら、自分が人にしてもらったことを思い出し、また、小説を読んで学んだことも思い返して、思いやりの心を持って接することが出来るようになりたいと思っている。

⑧　学んだこと、得たもの：O・ヘンリーの「最後の一葉」から、今後社会の中で生きていく上で大切になるだろう教訓を得られた。それは、希望を捨てずに前向きに生き、それを周りの人にも「言葉」などによって伝え、励ますことと、思いやりの心を持って、時には自分を顧みず、人のために行動すること、である。

⑨　SUMMARY : “The Last Leaf” written by O. Henry taught me some lesson which is important to live as a member of society in the future. One is to live thinking positively and to encourage other people. The other is to have consideration for others and to act for others without regard to your personal profit in certain circumstances.

参考文献・ホームページ

『オー・ヘンリー傑作選』、大津栄一郎訳、岩波書店(1979)
『対訳オー・ヘンリー』、小倉多加志訳注、南雲堂(1957)
<http://www.online-literature.com/authorpics/o_henry.jpg>
<http://www.yohan.co.jp/toeic/YL470.html>

オー・ヘンリーの人生と作品からメッセージを探る

乾　恵利

執筆者データ
①英語タイトル：　The Message from O.Henry's Life and His Work
②英語名：　Eri Inui
③所属：　欧米言語文化講座　独語圏
④
⑤
⑥
⑦論文を書くにあたっての関心事：　米文学史に残る人物の知られざる素顔・人生、
人々に勇気や感動を与えてきた作品、
作家が作品に込めたメッセージ

Ⅰ．はじめに

肺炎で生きる望みを失った若い女性ジョンジーは、寝たきりのベッドから見える蔦の葉が全部落ちるとき自分の命も尽きてしまうと信じ込んでいる。冷たい秋風に吹きつけられて蔦の葉はどんどん散っていくが、一枚だけ嵐にも耐え抜いた葉があった。その葉のおかげでジョンジーは生きる気力を取り戻し、病状も快方へと向かう。実はジョンジーを救った最後の一枚の葉というのは、ジョンジーの病状を聞いた、普段は酒浸りのだらしない生活を送っているぶっきらぼうな男ベーアマンが、最後の一枚の葉が散った嵐の夜に自分の命と引き換えにして書き上げた、最後にして最高の傑作であった。

（“ The Last Leaf ”本文要約）

貧しい夫妻デラとジムが、クリスマス・プレゼントにお互い何をあげようかと悩む。デラは、ジムが祖父と父から受け継いで大切にしている金の懐中時計を吊るすための鎖を買おうと考え、ジムは、褐色で輝くばかりに美しいデラの髪の毛をとかす鼈甲の櫛を買おうとする。しかし、そのようなものを買う余裕はこの夫婦にはなかったため、自分の一番大切なものを売ることでプレゼント代を工面する。結局、二人は金の懐中時計に相応しい立派な鎖と鼈甲の櫛を手にしたが、それらを使うべきデラの美しい髪の毛と金の懐中時計は既に売ってしまったのであった。（物語の結末では、「この一見愚かな行き違いをした二人こそが、本当の賢者である」とされている。）

（“ The Gift of the Magi ”本文要約）

この二作品を知っているだろうか？有名な作品なので、全文を読んでいなくても、大体の話の流れとしては知っているという人も多いだろう。そこで、この作品を知っているという人に対して一つ問いたい。この作品の作者は誰であるのか？・・・結論から言うと、これらの作者はオー・ヘンリー(O.Henry, 本名:William Sydney Porter 1862-1910)である。彼の作品としては、他に「都会の敗北」("The Defeat of the City")や「警官と賛美歌」("The Cop and the Anthem")、「よみがえった改心」("A Retrieved Reformation")、「赤い酋長の身代金」("The Ransom of Red Chief")などがある。短篇小説ということから誰でも気軽に手に取ることができ、それでいて深い印象を与えてくれる彼の作品に、私たちは心奪われたり、勇気付けられたりする。

彼はこのような有名な作品を残しただけではなく、非常に数奇な人生を送ったことでも他の多くの作家とは異なる。

興味を持った理由

オー・ヘンリーは500以上もの作品を残し、その中には映画化されたものや、前述した二編のような非常に有名な作品もある。また、英語の優れた短篇小説に与えられる賞として「オー・ヘンリー賞」が創設されている。彼に興味を持った最初の理由は、彼の作品のいくつかは知っていたけれども、全くといっていいほど彼自身についての知識を持っていなかったことにある。その後、同様にいくつか興味のある候補を出していき、それらについて軽く調べる作業を経て、最終的に彼を取り上げることにした決め手は、彼の驚くべき人生にあった。

II. オー・ヘンリーの生涯

ノースカロライナ州グリーンズボロで、医師アルジャーノン・シドニーの息子としてウィリアム・シドニー・ポーター(後のオー・ヘンリー)は生まれた。母親を3歳で亡くし、父の妹にあたる教育者の叔母によって育てられる。高等教育を受けずに、15歳で学校を卒業する。

20歳になると、知人の勧めによりテキサスに移り住む。そこで薬剤師、ジャーナリスト、銀行員の

出納係などの様々な職を転々として数年を過ごす。1884年に同じテキサスのオースティンに移り、1887 年にアトール・エステスと結婚する。この頃、彼はジャーナリストになるため、仕事からの帰宅後と休日を勉強時間に充てていた。それから数年後、倒産した新聞工場を借金して買い取り、1894年からは銀行員として働く一方、*The Rolling Stones*という風刺週刊誌を刊行する。しかし、売れ行きが不振であったために、翌年には廃刊となってしまう。そして『ヒューストン・ポスト』にコラムニスト兼記者として参加するようになる。

1896年、以前働いていたオハイオ銀行の公金を横領した疑いで起訴される。この銀行ではもともと経理処理がきちんと行われていなかったため、銀行側も周囲も彼に対して好意的であったにもかかわらず、裁判所に出頭する途中の列車の乗り換え時に逃亡を図る。それからしばらく逃亡生活を送っていたが、1897年に妻の危篤を聞きつけて戻ってくる。保釈金を納めて数ヶ月間は妻の看病に徹したが、同年の7月に先立たれる。そして1898年2月に懲役5年の有罪判決を受ける。刑務所では、監房に入らずに刑務所病院で薬剤師として働き、模範囚として減刑され1901年の7月には釈放となる。

釈放後、娘と義父母と共にピッツバーグで、『ピッツバーグ・ディスパッチ』紙のフリーランスの記者として働きながら作家活動をする生活を送り始める。しかし、9ヵ月後にはニューヨークの雑誌社の誘いを受け、娘を義父母に預けて単身でニューヨークに移り住む。そうして彼の前科のことを知る人がいないこの地で、作家活動を展開していく。

1907年には、一枚の手紙が縁で、幼馴染のサラ・リンゼイ・コールマンと再婚する。そして新居を構えて、ピッツバーグにいた娘のマーガレットを呼び寄せて三人で新しい生活を送り始める。

1910年6月、主に過度の飲酒を原因とする肝硬変により、病院で48年の生涯を閉じる。

波乱万丈の人生を送ったオー・ヘンリーだが、その核となるのが彼の物書きに対する憧れと情熱であった。罪を犯して刑務所行きになってしまった点においては非難を免れないだろうが、一貫して夢に向かって前向きに取り組む姿勢は、いつの時代においても私たちが見習わなければならないものではないだろうか。死因から推測するに、スランプでアルコールに頼って自虐的になったことも多かったことだろう。それでも最後まで、一般的な小説家には考えられないペースで作品を書き続けていたということから、彼の小説家としての意識の高さをうかがい知ることができた。

Ⅲ. オー・ヘンリーの転換期

オー・ヘンリーが短篇小説家として名を知られるようになるにあたって、最も重要となる時期は、刑務所で過ごした3年3ヶ月であろう。小説家は芸能人とは違って、本名でデビューすることが多い。しかし、彼の場合には本名の「ウィリアム・シドニー・ポーター」ではない「オー・ヘンリー」という名前が絶対的に必要であった。というのも、彼は刑務所内から新聞社や雑誌社に投稿し続けていたからである。本来ならばこのようなことは禁止されているのだが、刑務所内部の人が彼に同情して協力してくれたのであった。これまで家計を支えるために仕事の一環としてしか実現していなかった「作家になりたい」という夢が、皮肉な言い方をすれば、刑務所に入ってお金の心配をせずに

作家修行をする時間が存分にできたために、一歩一歩近づいていったのである。おかげで、入所したときは作家としてアマチュアだったけれど、出所したときはプロの作家になっていたといわれている。ここで考えたいのは、果たして自分なら刑務所に入ったときに彼ほど充実した時間を過ごせるのかということである。きっと多くの人が自分自身に絶望して、自分の夢を実現することについて考える余裕などないだろう。刑務所という場所においても彼が作家修行を続けることができたのは、彼自身の並大抵ならぬ意志・熱意によるものに違いない。人間は、なにかと理由をつけて楽な方へと逃れようとする生き物である。それを、どれだけ自分の意志で止めることができるのか…夢に向かって、いかなる境遇にあろうとも逃げ出すことのなかったオー・ヘンリーが、その良い例となってくれた。

入獄中にできた作品の中で、日本語で読めるものは以下の作品である。

・「あやつり人形」　河出文庫
・「口笛ディックのクリスマス・プレゼント」　河出文庫
・「ブラックジャックの売渡人」　新潮文庫
・「ハーグレイヴスの二役」　角川文庫, 岩波文庫, 新潮文庫

Ⅳ. オー・ヘンリーの作品に対する評価

まずはオー・ヘンリーについて書かれた二つの文章を紹介したい。

「彼はニューヨーク独特の真髄と芳香を探し求めた。その結果、この都会について彼が書いた物語の中には、その神秘を感じ、それを探り出そうとする意思によって品位を増したものもあった。」

「彼にはその場限りの考えしかなく、読者を即興的に楽しませる技法しかもたない根っからのエンターテイナーとなった。その効果を上げるためならば、彼はすべてのことを、たとえ真実さえも犠牲にするのを厭わなかった。」

一つ目の文章は、1952 年にヴァン・ウィック・ブルックスが雑誌『コンフィデント・イアーズ』に発表した「ニューヨーク　オー・ヘンリー」というエッセイに書かれたものである。そして二つ目の文章は、1923 年に F・L・パッティによって書かれた『アメリカ短編小説の発展』に書かれたものである。作家の真の評価は死後に下されると言われるが、そもそも世間は、生前の行いとして悪いことよりも良いことを評価することで美化しようとするきらいがある。しかしながら、オー・ヘンリーは先に述べたような有名な作品の作者であるのだから、その点を大いに評価されるのかと思えば、彼の作品に対する評価は時代や人によって良かったり悪かったりと一貫していない。その理由としては、彼の膨大な作品数に対して芸術的価値のあるものが少ないとされる点にある。その数少ない傑作と呼ばれるものに重点を置くのか、彼の全作品数に対する傑作数の割合に重点を置くかによって、彼の作品に対する評価が違ってくる。また、オー・ヘンリーが「ブラックマスク派」でも「ニューヨーカー派」でもないという、文学史におけるポジションの微妙さが文学的評価にまで影響しているとも考え

られる。

それでも、やはり彼の作品を愛読する人は多い。私もそのうちの一人であるが、彼の作品には芸術的価値や文学的なポジションでははかれないような何かがある。その何かこそが、彼の作品の愛読者を未来へと繋げていくものであり、最も重要な隠し味となっているのだと思う。おそらく、彼が作品に込めた並々ならぬ愛情が私たちにも何らかの形で感じ取れているのではないだろうか。本のようなモノを通してでも、魂や努力といったものを伝えられるということを学んだ。きっと、今後も多くの人たちが、彼の作品に魅了されていくことだろう。

私にとってオー・ヘンリーの「文学界におけるポジションの微妙さ」というのは、彼の魅力を追求する上で有利に働いたと思われる。一般的に彼の作品を評価する際には不利になっているとはいえ、言葉を変えれば「彼の作品は型にとらわれない」ということになるのではないだろうか。有名な作家だけの特権であるとはいえ、一般的な意見として小説家の総合評価が下され、その評価を作品を読んだこともないような人が鵜呑みにしてしまうのは非常に恐ろしいことである。

⑧学んだこと

オー・ヘンリーは、短い生涯の中にも多くの経験をしてきた。彼がどのような職に就こうと、どのような場所にいようと、彼の「物書き」に対する憧れや熱意といったものは終始変わることがなかった。

どのような境遇に立たされようとも、それを乗り越えられるほどの熱意や努力をすることの大切さを知った。

⑨英語サマリー

O. Henry had many experiences in his short life. Regardless of his job and circumstances, his longing and passion to be a writer did never change from beginning to end.

I understood that we should be eager and make every effort to get over hardship even if we are under bad circumstances.

参考文献・HP

『アメリカ文学史　A Brief History of American Literature』　西田　実　成美堂　1984 年出版

『「最後の一葉」はこうして生まれた』　斉藤　昇　角川学芸ブックス　2005 年出版

年譜　http://www13.ocn.ne.jp/~m-room/henry-note.html

オー・ヘンリー1　http://homepage1.nifty.com/y_nakahara/nw14.htm

オー・ヘンリー2　http://homepage1.nifty.com/y_nakahara/nw15.htm

「賢者の贈り物」　結城　浩　訳　http://www.hyuki.com/trans/magi.html

「最後の一枚の葉」　結城　浩　訳　http://www.hyuki.com/trans/magi.html

http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%AA%E3%83%BC%E3%83%BB%E3%83%98%E3%83%B3%E3%83%AA%E3%83%BC

先駆者としてのヘンリー・ジェイムズ

—新しいことへの挑戦—

田中めぐみ

執筆者データ；
①英語タイトル：Henry James as a Pioneer
②英語名：Megumi Tanaka
③所属：欧米言語文化講座　フランス語圏
④
⑤
⑥
⑦論文を書くにあたっての関心事：ヘンリー・ジェイムズの小説、書法、生い立ち

興味をもった理由；「ねじの回転」（“*The Turn of the Screw*”）を以前に読んだことがあり、ストーリーが気に入ったので、この作者である、ヘンリー・ジェイムズはどんな状況でこの作品を書いたのだろうかと思ったから。また、この作品は約 100 年前に書かれたはずなのに、構成等がすごく読みやすく書かれてあると思ったから。

I．ヘンリー・ジェイムズの生涯

ヘンリー・ジェイムズ (Henry James)は 1843 年にニューヨークで生まれました。ジェイムズ家はアイルランド系の移民の家柄で、アイルランドからの移民であったヘンリーの祖父は、事業に成功し、一代で富を築き上げました。そのため、非常に裕福な家で

育ちました。父は教育上の方針から息子達とともに、何度もヨーロッパへ旅行をして見聞を広めさせています。ヘンリーが生後6ヶ月の時にすでに兄とともに、イギリスやフランスに何ヶ月も旅行しています。またこれだけでなく、少年時代より何度もヨーロッパとニューヨークを行き来していて、生涯全体ではニューヨークにいるよりも、ヨーロッパに滞在している時間のほうが長いとも言われています。それ故幼い頃から、各国の文学に親しむようになりました。

19 歳の時にハーバード大学に進学しましたが一年で中退し、その後ボストンやその近郊のケンブリッジに住むようになりました。1876 年にはロンドンに居住し、死去するまで 40 年近くロンドンを拠点に活動していました。その後も、パリやイタリアへ幾度となく訪問しています。また親交も広め、モーパッサンやフロベール、ゾラ、テニソン、ジョージ・エリオットらを知ります。1905 年には長年離れていた、アメリカへ帰国しましたが、1915 年にアメリカが第一次世界大戦に参戦しないのに業を煮やして、またイギリスへ帰化します。そして、1916 年にメリット勲章を受けます。しかし同年、脳卒中と肺炎を患い死去しました。そしてその亡骸は、祖国であるアメリカのボストン郊外のケンブリッジのジェイムズ一家の墓に葬られました。

II. 発表作品

まず、1865 年に短篇小説「ある年の物語」(“The story of a Year”) を執筆しました。そして、71 年には「後見人と被後見人」(“Watch and Ward”) を発表します。75 年には処女出版である『情熱の巡礼、その他』(*A Passionate Pilgrim*) を出版しました。77 年に『アメリカ人』(*The American*)、78 年には代表作のひとつである『デイジー・ミラー』(*Daisy Miller*) を、79 年には『国際挿話』を発表し、一躍有名小説家となりました。81 年には長篇『ある婦人の肖像』(*The Portrait of a Lady*) を発表し、代表作となりました。89 年頃からは劇作にも打ち込むようになりましたが、失敗におわりました。

98 年に「ねじの回転」(“The Turn of The Screw”) を発表しました。この頃から、心理主義的な作風が多くなり始めます。1901 年に長篇『使者たち』(*The Ambassadors*)、03 年には長篇『鳩の翼』(*The Wings of the Dove*)、04 年に『黄金の盃』(*The Golden Bowl*) をそれぞれ発表しました。後期を代表する長篇小説家となります。05 年には『ニューヨーク版』と呼ばれる、自身の全集『ヘンリー・ジェイムズ全集』(*New York Edition*) の出版にとりかかりました。全集の刊行は 07 年から始まり、没後の 17 年に完結しました。

Ⅲ. 書法

●語り手●

ヘンリー・ジェイムズは初め、自分自身の役割は単なるストーリー・テラーであると考えていたようで、初期の作品2作においては、“My story begins with…” で始まります。全知の語り手が物語を語るという設定です。このことにより「作者＝語り手」の等式は当然視され、語り手は読み手の関心外に置かれ、読み手の関心は語りの内容そのものに向かいます。これは、読書が苦手な人でも読みやすい書法だと言えるでしょう。

●空白●

また、ヘンリーの小説は、読者を困惑させるあいまいな書法を用いていて、物語世界を巨大な空白で満たしています。例えば「ねじの回転」です。[この作品の内容は、両親をなくした幼い兄妹の家庭教師を引き受けた若い女性が屋敷を訪れ、そこで男女の幽霊を目撃します。そして、幽霊たちが兄妹を虜にしていることに気づきますが、兄妹は幽霊の存在自体に気づいていないふりをします。女家庭教師と兄妹との心理的やりとり、屋敷に現れる幽霊と女家庭教師との対決、兄妹がなぜ幽霊に魅かれるのか等を描いた作品です。この作品でのあいまいな書法の結果として、女家庭教師は本当に幽霊を見たのか、あるいは幽霊は出現しておらず女家庭教師の妄想によるものなのかということが最後まで謎のまま終わります。] 語り手の女性の心理のゆれを精緻にえがきだして、この感情のゆれの幅を必然的なものにします。この小説技法は、今となっては当たり前のものですが、ヘンリーが先駆けとなりました。このように、読み手のとり方によって話をとれるというのはとても面白い書法で、この時代にすでにこのような書法を用いたヘンリーはとても新しい人だと思いました。

●展開方法●

他にも気になる手法があります。たとえば、『カサマシマ公爵夫人』(*The Princess Casamassima*) においてです。この主人公はハイアシンス・ロビンソンです。全六部のうちの第一部を成す冒頭の数章からすでに、暗く、悲劇的な色調に塗りこめられています。すなわち、冒頭の三章において主人公はまだ十歳の少年で、その一生に決定的な影響を及ぼすことになるある事実がそこで語られています。しかし一転して、第四章で、成人したあとのハイアシンスが登場するという、映画に似た書法がまず読者を一驚させます。つまり、書き出しの三つの章は、映画で言えばタイトルの出る前に写されのちのち重要な意味を持つことになります。短くて印象的なシーンに相当し、それらの章のさまざまな場面は、のちにフラッシュ・バック的に、作中、幾度か主人公やその幼年期に

かかわりを持つ人物たちの脳裏をよぎることになります。ここにも映画の方法が感じられます。この手法は、まさに映画で現代も用いられています。

Ⅳ. ジェイムズの挑戦、その生き方を見習えば

ヘンリーはアメリカやイギリス、フランスなどたくさんの文化を学び、それらを比べ、作品で描いていきました。このことは、私に日本の文化だけでなく、他国の文化について知ろうという気持ちをおこさせました。また、あいまいな書法という新しい方法を取り入れていくなど、新たなことをどんどん取り入れていくということにも関心を持ちました。私もヘンリーのように新しいことにおびえずにどんどん取り入れ、たくさんの違う文化を学んでいこうと思いました。

⑧学んだこと：大部分の人は全く新しいことの挑戦することを控える傾向にあり、誰かが挑戦してみて広まってから自分もやってみようとします。しかし、ヘンリー・ジェイムズは新しい書法を用いて、作品を書きました。自分がこれだと思ったことは、やるという考え方はすごくいいなぁ、とおもいました。また、自分の生涯で得た考え方、例えば、ヘンリーはアメリカとヨーロッパを行き来していたことによって、アメリカとヨーロッパの考え方、風習を比較しながら、作品を作り上げていきました。そのように、自分が得たものを自分以外の人にも何らかの方法で伝えたいと思いました。

⑨英語の要約：

Henry James was born in America, but he visited Europe for many times when he was a child. As a result, he could compare America and Europe in his novels. The novels of Henry are famous for his ways . He used a narrator, a way to develop a story and so on. His works are still discussed and fascinate many people.

参考文献

『ヘンリー・ジェイムズ小説研究』　甲斐　二六生著　溪水社

『ヘンリー・ジェイムズの語り　一人称の語りを中心に』

市川　美香子著　大阪教育図書

『グレート・ギャツビー』から学ぶ人生の幸福と苦労

畑　美寿穂

① 英語タイトル：*The Great Gatsby*：Happiness and Trouble of Life
② 英語名：Mizuho Hata
③ 所属：欧米言語文化講座　独語圏
④
⑤
⑥
⑦ 論文を書くにあたっての関心事　：　失われた世代・アメリカの繁栄の歴史・世界恐慌・人生の光と影、幸福と苦労・人間の幸福とは何か

Ⅰ．興味をもった理由

以前より世界史の授業やマスメディア等で、フィッツジェラルドの名前を耳にしていたのでこの機会に読んでみたいと思い、取り組むことにした。

フィッツジェラルドの作品をよく引用する村上春樹氏の作品の中でも、特に『ノルウェイの森』では主人公に多大なる影響を与える本として出てきていた。国籍も世代も違うにもかかわらず読む人を夢中にさせる魅力とは何か、また時代を超えても読み継がれるギャツビーの人生から得る教訓は何か、学びたいと思う。

Ⅱ．フランシス・スコット・キー・フィッツジェラルドの生い立ち

フランシス・スコット・キー・フィッツジェラルド（Francis Scott Key Fitzgerald）は1896年9月24日ミネソタ州・セント・ポールに生まれたアメリカの小説家。「失われた世代」を代表する作家の一人である。「失われた世代」とはガートルード・スタインが命名し、1920年から1930年代にかけて活躍したアメリカの小説家や詩人たちを指している。フィッツジェラルドのほかには、アーネスト・ヘミングウェイやシャーウッド・アンダーソン、ワルド・パースなどが含まれている。

フィッツジェラルドが生まれる前に父は破産しており母の実家の援助で暮らしていた。その後父は再就職するもまたもや解雇され、フィッツジェラルドはこの時点で人生の幸福

と苦労の部分に目を向けざるを得ない生活を送っていく。このときから彼は人生について考え出すようになったのではないかと考えられる。その後彼は大学に入るが劇団での作品作りにのめりこみ、授業を休みがちになり、単位が足りなくなる。フィッツジェラルドは大学を中退、第一次世界大戦の影響で陸軍に入隊した。訓練中も書くことをやめず、「ロマンティック・エゴイスト」を書き上げた。出版社に持ち込み、一定の評価は受けたものの出版は認められなかった。第一次世界大戦は1918年に終結し内地勤務のままであったフィッツジェラルドは、ヨーロッパへ渡ることなく除隊した。

除隊する前にキャンプ・シェルダンでゼルダ・セイヤーと出会った彼は除隊後、彼女と婚約するがフィッツジェラルド自身の職業が安定しないため婚約を解消されてしまう。彼はここでも人生の苦労を味わうわけだが、あきらめず、実家に帰って『ロマンティック・エゴイスト』の推敲を重ねる。ついに1920年『楽園のこちら側』として出版された。この作品が評価され、ベストセラー入りするとゼルダと再度婚約、結婚し1921年には娘も誕生した。フィッツジェラルドは苦労の人生から一転し、華々しい栄光を手に入れる。その後『美しく呪われし者』を発表し、1925年には『グレート・ギャツビー』(*The Great Gatsby*)が出版された。この時代こそ間違いなく彼が輝いた時代であり、彼の人生にとっての幸福期だった。

1929年に世界恐慌がおき景気が一気に落ち込みだすと本が売れなくなってくる。また翌年1930年には妻ゼルダが病気になり、彼の人生にも苦労の影が差し始める。そのような状況下でも彼は1934年に『夜はやさし』(*Tender is the Night*)を出版した。しかし売り上げは良くなく、次第に執筆も衰え始め、彼は酒に溺れるようになる。

そのような生活からフィッツジェラルド自身も胸を病み、自殺を図ることもあった。1940年12月21日、フィッツジェラルドは心臓麻痺で亡くなり、その人生を終えた。

常に人生の光と影、幸福と苦労の間を行き来するような人生であった。そんな彼の人生は作品にも影響している。

若き日のスコット・フィッツジェラルド（左）と妻ゼルダ（右）

Ⅲ.『グレート・ギャツビー』とは

フィッツジェラルドの代表作であると同時に、アメリカ文学を代表する作品のひとつでもある。映像化もされており、1920年代の世界恐慌以前の夢のようなアメリカがよく現れ

ている。

ストーリーは、1922 年ロングアイランドを舞台にギャツビーという人物について隣人ニック（Nick）の目から語られている。ギャツビーは謎の人物であり、それが少しずつ解明されていくにつれて、彼の心の清らかさ、純粋さが浮き彫りにされていく。昔の恋を追い求めるが最後は複雑な人間関係から知り合った人間によって殺されてしまう。その彼の死後、ニックは実家に帰る前にギャツビーの家を訪れ、夢や人生について考えながら終わる。

このギャツビーという人物の人生は幸福と苦労に満ち溢れていた。戦地にも行き、頻繁にパーティーを開き、昔の恋人・デイジーのために罪までかぶる。このような幸福と苦労が交錯する人生は作者フィッツジェラルドと重なるところがある。フィッツジェラルド自身戦争に赴くも、アメリカを出ることなく終結した。その中で出会ったゼルダと恋に落ちるのだが、これはデイジーとギャツビーに似ている。ただしこの作品とは違いゼルダとフィッツジェラルドは結婚したが、それが必ずしも人生の幸福になったわけではなかった。つまりこの話は 1920 年代を生きたフィッツジェラルド自身でもあり、同時代を生きた多くのアメリカ人に当てはまりうると考えた。

この話の中では 1929 年には到達していないが、ニックが送る日常生活にも次第に不穏な影がしのびよってきていた。『グレート・ギャツビー』は当時のアメリカ社会の反映であり、作者は好景気の後に必ずおとずれる不景気を予感しながら書いていたのではないだろうか。また主要人物の出身地に東部、西部という言い方が頻出するが、ここには当時の東部と西部の文化の対立という面も組み込まれているようだ。ニックもギャツビーも中西部出身となっているのは、フィッツジェラルド自身も北西部のミネソタ州・セントポール出身だからであろう。

このように『グレート・ギャツビー』には話として楽しめるという点以上に学ぶべきことがたくさん含まれているように感じた。歴史の中でしか見られないアメリカではなく、当時の臨場感あふれるアメリカが登場人物たちを通して描かれている。これによって過去アメリカが好景気のときにどれほど浮かれ、備えを怠ったか、という苦い経験も教えてくれる。この本から人生はどう生きるべきか、指標のようなものを手に入れられたと思う。幸福とは苦労とはなにか今一度考えて生きたいと思うようになった。

一人の人生を追うことで人生の幸福と苦労をわかりやすく表現している。歓喜、落胆、平穏、戸惑いなど生きていくうえで不可欠な人間の感情を取り入れたことで読んでいる人に現実味を与える作品となっている。人間の本質、人生を考える作品だからこそ、世代を超えても読み続けられていくのだろう。

私自身、人生においての困難や憂鬱にぶつかったとき、もう一度読みたいと思うようになった。何度読んでも学ぶところが尽きない作品だと感じる。

繁栄と没落の 1920 年代、という歴史に基づきながらも、その時代を生きた人達の心が繊細に書かれているところが素晴らしいと感じた。アメリカを代表する文学作品であることも納得出来る作品である。

⑧　学んだこと、得たもの：ギャツビーの人生や作者フィッツジェラルドの生き方から、好景気のアメリカで物があふれている状況でも心が幸せでないと満たされないのだ、という人間の心の深さを学んだ。誰でも、どの時代にも、人生には常に幸福と苦労が混在し、それを乗り越えることが大切なのだということも学ぶことが出来た。このような考え方が示されているから、時代が流れても読まれ続けているのだろう。幸福や苦労という光と影が存在しても、どちらも長くは続かないし、そこにとらわれず前に進む、という人生に対する向き合い方を知ることができたし、今の人生を楽しむという力もこの本から得たものである。

⑨　英語サマリー：Both Scott Fitzgerald and Mr. Gatsby had a lot of happiness and troubles in their lives but they were never disappointed.　They always tried to get over them.

This book taught me what the life is and how to face it. Happiness and troubles don't last long.　It's important to know that life has both sides and to enjoy what you are doing now.

参考文献・HP

- 『グレート・ギャツビー』　スコット・フィッツジェラルド著　村上春樹訳　中央公論新社
- 『グレート・ギャツビー』　スコット・フィッツジェラルド著　野崎孝訳　新潮社
- 『アメリカ文学史』　西田　実　著　成美堂
- 映画『華麗なるギャツビー』1926年、1949年、1974年、2001年製作　（原題 The Great Gatsby）
- Wikipedia－スコット・フィッツジェラルド—
- Wikipedia—グレート・ギャツビー—

F・スコット・フィッツジェラルド『偉大なるギャッツビー』の魅力

田中　真裕

①タイトル：Why I Am Fascinated by *The Great Gastby*　②英語名：Masahiro Tanaka　③所属：欧米言語文化講座　英語圏　④　⑤　⑥　⑦論文を書くにあたっての関心事：失われた世代についてフィッツジェラルドが抱いた思い

現代においても多くの翻訳家によって翻訳され、また映画にもなったF・スコット・フィッツジェラルド（F・Scott Fitzgelard,1896–1940）の『偉大なるギャッツビー』（*The Great Gastby*,1925)。その魅力について論じてみる。

興味を持った理由：自分の使っているヘアワックスのギャッツビーがこの作品から来ていることを知り、どんな作品かしりたくなったため。失われた世代においてフィッツジェラルドが偉大なるギャッツビーにこめた思いとその作品の魅力について学びたいため。

Ⅰ.フィッツジェラルドと失われた世代

どんな作品においても言えることだが、作品には作者の思想が反映される。特にF・スコット・フィッツジェラルドは「失われた世代」を代表する作家でありこの作品には様々なフィッツジェラルドの思想が含まれている。

第一次世界大戦においてアメリカでは今まで人々が作り上げてきた思想や文化といったものがすべて崩壊し、そのことによる喪失感が人々を襲った。その中で自らが新しい思想を生み出そうとした世代を「失われた世代」と呼ぶ。

「失われた世代」を代表する作家には以後、傑作と称される作品を生み出したものも多く、フィッツジェラルドの他にもヘミングウェイ(Ernest Miller Hemingway, 1899-1961) やフォークナー(William Cuthbert Faulkner, 1897-1962) などが挙げられる。私は彼らが「失ったもの」はそれぞれ異なり、また新たに生み出そうとしたものも異なるため、それぞれにの作品にこめた思いも異なると思いました。

次にフィッツジェラルドについて。フィッツジェラルドはアメリカ合衆国北西部ミネソタ州のセントポールに生まれた。両親はカトリックを信仰し、共にアイルランド系の家系であり、母は著名な実業家の娘であった。父はフィッツジェラルドの生まれる前に事業で失敗し破産していたが、母の実家からの援助もあり過不足のない生活を送っていた。アメリカ国歌の作詞をおこなったフランシス・スコット・キーは父方の遠縁にあたる。

II.『偉大なるギャッツビー』のあらすじ

舞台はニューヨーク付近の別荘地。謎の男ギャッツビー (Gatsby) は毎晩のように有名人を呼んではパーティーを開いている。物語は彼の家の隣に住むニック (Nick) によって語られる。ギャッツビーが何者で、なぜこのような生活をおくっているか知るものもいない。パーティーの参加者は彼が酒の密売人だの、人殺しだの言っているがどれも根拠がない噂である。やがてニックはギャッツビーとの交流の中で彼が離れていった女性の心を取り戻す為に人生の全てを捧げているのだと知る。そしてギャッツビーはその恋人の男女関係により銃でうたれあっさり死んでしまう。彼の死後、父はニックにギャッツビーの形見である少年時代の本を見せる。その中には毎月３ドル貯金するなど勤勉なギャッツビーの少年時代が描かれていた。

新潮文庫『グレート・ギャツビー』　　映画『華麗なるギャツビー』

Ⅲ.なぜ『偉大なるギャッツビー』が人々の心に響いたのか

まず注目したのはフィッツジェラルドがこの『偉大なるギャッツビー』を書いた時代、つまり第一次世界大戦後はそのまま作品の時代と一致しているということだ。つまりその時の人々の考えや共感するところが多かったということだ。

ギャッツビーの人生に焦点をあると、その生活は華やかであったが最後はあっけなく銃で射殺されてしまう。この華やかさは戦後の好景気を鮮やかに表現しており、ギャッツビーの死の儚さは戦争という時代を暗喩している。

そしてギャッツビーが最愛の彼女をどんな形であれ自分のもとに取り戻そうとしたことが、「失われたもの」を取り戻そうとした当時のアメリカの人々の共感を得たのだろう。

最後にニックはギャッツビーの成功までの苦労を知る。このギャッツビーの貧しさから成功へとつながるサクセスストーリーに私は勇気をもらいました。

Ⅳ.ギャッツビーとニック

作品中に登場するギャッツビーとニックは対照的な人物であるが、この二人は作者のニューヨークに対する思いの象徴である。つまりこの二人は作者の分身である。この街の中で成功を収め都市の繁栄を象徴したようなギャッツビーと、田舎から都市に憧れを持ってやって来て、しかしどこか馴染むことができず、やがては喪失感すら感じてしまうニックは、著者がニューヨークに対して感じる愛と憎しみを表しているのだろう。

Ⅴ.フィッツジェラルドとギャッツビー

フィッツジェラルドの生活もギャッツビーに近いものであり豪華なものであった。ジャズエイジにおいては皆の注目を浴びたが、世界恐慌によって貧しくなった世の中からは避けられた。そのうえ妻は精神を病み、自らは必死に働くも成果が出なかった。そしてフィッツジェラルドは、『ラスト・タイクーン』で再起を図るが、心臓麻痺で四十四歳という若さであっさりと命を落とした。彼はまさにギャッツビーの命運をそのままになぞってしまったのだ。『偉大なるギャッツビー』は輝きの中にあるニューヨークでフィッツジェラルドによって書かれたが、この時点で繁栄には破滅的な予感が含まれていたというのは、なんとも皮肉なことだ。

VI.『偉大なるギャッツビー』の教訓

文学作品はその作品の中に教訓を含むものが多い。その教訓は時代を超えて、地域を問わず人々に響くものである。そこでこの作品を読むにあたってフィッツジェラルドの示した教訓について考えてみた。

一番作者が伝えたかったのは夢をあきらめずに追い続けることの大切さである。ギャッツビーはデイズィの心を取り戻そうと必死に成り上がる。ギャッツビーにとってデイズィはいわば夢であり、その夢に全力になることはすばらしいことである。

このことから、夢を持ちそれに向かい全力で頑張ることのすばらしさを改めて実感できた。今ははっきりとした夢が目の前にはないが、それを自分で見つけ出したい。そして頑張ればいつか夢は現実となり、それは私たちの人生をギャッツビーのように輝かせるのだ。

⑧学んだこと：自ら夢を持ち、それに向かい全力で努力することは大切である。
⑨英語サマリー：It is important for us to have a dream and to do our best for it.

参考文献

・『グレート・ギャッツビー』　スコット・フィッツジェラルド　著
村上春樹　訳　出版：中央公論新社

・『華麗なるギャツビー』　監督　ジャック・クレイトン
製作　デヴィッド・メリック
公開　１９７４年

・ウィキペディア

Ｆ・スコット・フィッツジェラルド

http://ja.wikipedia.org/wiki/F%E3%83%BB%E3%82%B9%E3%82%B3%E3%83%83%E3%83%88%E3%83%BB%E3%83%95%E3%82%A3%E3%83%83%E3%83%84%E3%82%B8%E3%82%A7%E3%83%A9%E3%83%AB%E3%83%89

グレートギャッツビー

http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%B0%E3%83%AC%E3%83%BC%E3%83%88%E3%83%BB%E3%82%AE%E3%83%A3%E3%83%84%E3%83%93%E3%83%BC

ベストセラー小説『風と共に去りぬ』の魅力とは

木下　めぐみ

☆　執筆者データ：①英語タイトル：Attraction of the Bestselling Novel *Gone with the Wind*
②英語名：Megumi Kinoshita　③所属：欧米言語文化講座　英語圏
④　⑤　⑥
⑦論文を書くにあたっての関心事：歴史、南北戦争及び戦後の再建時代、マーガレット・ミッチェル、『風と共に去りぬ』がベストセラー作品となった理由、奴隷制度、近年の女性の社会進出、自立した生き方

Ⅰ．はじめに…

聖書につぐベストセラー小説となった『風と共に去りぬ』(*Gone with the Wind*,1936)は、世界中で大反響をよび、今日も多くの読者に愛され続けている。

私がこの小説と初めて出会ったのは高校二年生のときで、とても第二次世界大戦以前の作品とは思えない、味わい深い作品に感銘を受けた。DVD でも鑑賞してみたが、4 時間弱もの長編であるにも関わらず、少しも長く感じさせない場面展開で、豪華なキャストたちが小説の世界を見事に再現していた。

今回の文学研究では、この歴史に残る大作の作者であるマーガレット・ミッチェル(Margaret Mitchell,1900-1949)が、この一作に込めた思いを探るとともに、世界を魅了したこの作品の魅力を考察してみることにした。

Ⅱ．『風と共に去りぬ』のあらすじ

舞台は、奴隷制が残る 1860 年代のアメリカ南部、ジョージア州アトランタ。南北戦争の頃である。

大農場主の娘スカーレット・オハラ(Scarlett O'Hara)は幼馴染のアシュレー(Ashley)を愛していたが、彼は従妹メラニー(Melanie)と結婚してしまう。彼女は腹いせにメラニーの兄と結婚するが、夫はまもなく戦地で病死。スカーレットは 17 歳にして、彼との間にできた長男ウェードを抱える未亡人となる。

そんな中、南軍は北軍に対して苦戦を強いられ、ついにアトランタも占領される。メラニーを連れ逃げ帰ったスカーレットだが、故郷は荒廃し、頼

りにしていた母も病死していた。飢えを凌ぐことと故郷を守ることだけに集中した彼女は、今度は妹の婚約者を横取りして商売を始めたが、彼もまもなく亡くなってしまう。

やがてスカーレットは、ひそかに彼女に思いを寄せていた海賊的紳士であるレット・バトラー(Rhett Butler)の、強引とも言える求婚に引きずられて結婚する。しかし、彼女はアシュレーへの思いが断ち切れず、次第に二人の気持ちはすれ違い、二人の間に生まれた最愛の娘ボニーの事故死がきっかけで、その最後の絆も断たれてしまう。さらに娘を失ったショックから抜けきらないうちに、スカーレットに最後まで友愛を示し続けたメラニーまでが、流産により命を落とす。そこでスカーレットはアシュレーを奪った恋敵として憎んでいたはずのメラニーを、実は心から愛していたことに気づく。また、自分が愛しているのはアシュレーではなくバトラーだ、ということにもそのとき初めて気づき、一人故郷であるタラの地へ向かうのだった…。

Ⅲ. 内容の分析

この作品はトルストイの『戦争と平和』に影響を受けて書かれており、主人公スカーレット・オハラが最初の恋に破れてから三人の夫を送り迎える数奇な運命に、南北戦争の勃発と北軍の進入、南軍の敗戦、戦争の破壊と戦後の再建といったアメリカで最も重要な歴史的事件を絡めた大作である。

あらすじだけを見ると、一見主人公スカーレットの人物像はわがままで気性の激しい女性のように感じられるかもしれない。しかしこの本を読み終えると、私は彼女に同じ女性として尊敬の念を抱いた。過酷な南北戦争の戦況下、故郷タラの地と家族を守るために、すべてを失ってもなお、生きることを諦めなかった彼女の力強い生き方には、圧倒され、共感せずにはいられなかった。

またこの作品では男女の愛憎など、人間の真実の部分が赤裸々に描かれているほか、南北戦争の残酷さや悲惨さ、黒人は奴隷であるのが当たり前、といった当時の因習などの要素も盛り込まれており、様々な視点から深く考えさせられた。

近年、女性の社会進出が顕著になってきており、戦前に比べるとかなり女性の力が強まってきているが、男性中心社会に生きた当時の人々の中にも、スカーレットのような自立した女性像に、ひそかに憧れる女性が少なからずいたことが、作品の世界的反響からうかがえる。

☆興味をもった理由：なぜこの作品が今もなお世界中で愛され続けているのか/なぜマーガレット・ミッチェルは初作が世界的なベストセラーになったのにも関わらず、生涯この一作しか執筆しなかったのかという疑問。

Ⅳ. 著者マーガレット・ミッチェルの生涯

マーガレット・ミッチェルは1900年11月8日、ジョージア州アトランタで生まれ、幼年期は南北戦争を生き抜いた母方の親類の影響を大きく受けた。

1918 年にワシントン女学院を卒業し、その後医学を志しスミス・カレッジに入学する。しかし1919年1月に母親がその年流行したインフルエンザで亡くなったために、学業を諦めアトランタへ戻った。この出来事は『風と共に去りぬ』でスカーレットの母親が腸チフスで死去し、タラへ戻る場面の元となっている。

その後、彼女はアトランタで日曜版のコラム執筆者となり、1922年にはベリアン・「レッド」アップショーと結婚するが、間もなく離婚する。1925年にはアップショーの友人であったジョン・マーシュと再婚する。

1949年8月11日の晩、ミッチェルは夫マーシュとアトランタのアーツ劇場に行く途中、自動車事故に遭い亡くなった。彼女はアトランタのオークランド墓地に埋葬された。

『風と共に去りぬ』の主人公スカーレットの波瀾万丈な人生のモデルとなったのは、何よりこの作者であるミッチェル自身の人生であると思われる。このような時代を越えて輝く歴史的大作を書くことができたのは、自身の人生経験と母から受け継いだ豊富な知識を兼ね備えたミッチェルならではだと感じた。

Ⅴ.『風と共に去りぬ』出版に至るまで

マーガレット・ミッチェルは、くるぶしの骨折で寝たきり生活を送っていた1926年に、『風と共に去りぬ』を執筆し始めたと伝えられている。当時の夫マーシュの協力もあって、ミッチェルは療養中の楽しみを小説の執筆に見出していた。彼女は最終章から書き出し、章を飛び飛びに書き進めるなど、独特な執筆手法を取っていた。山積みになった原稿はタオルで覆い、戸棚やベッドの下に置いて、他人の目には触れないように保管していた。

1935年、彼女の運命を一変させる出来事があった。南部地域で有望な作家を探していた編集者のハワード・ラザムが、ミッチェルのもとを訪れたのである。彼は膨大な量の彼女の原稿を読み、未完成ではあるが、大ベストセラーになる作品だと確信した。

小説は1936年に完成したが、不思議なことに彼女は最後まで第1章を書かかなかった。同年6月30日、『風と共に去りぬ』は出版され、翌年ピューリッツァー賞を受賞。1939年にはデビッド・0・セルズニックによって映画化され、当時としては画期的な長編カラー映画であったことも手伝って世界的なヒット作となり、アカデミー賞を多数受賞した。

ミッチェルがなぜ第一章を最後まで書かなかったのかは未だ謎であるが、最終章から書

き始めたということは、彼女の中でこの小説を通して伝えたい、何か強いテーマがすでに決まっていたのだと思う。次の章ではそんなミッチェルの心境について、考察してみたい。

VI. ミッチェルがスカーレットに託した思い

マーガレット・ミッチェルが生涯この一作しか執筆しなかった理由は、彼女自身が病弱であり、『風と共に去りぬ』の執筆だけでも膨大な年月を要したため、これ以降創作意欲を喪失してしまったことが大きな原因である、と言われている。しかし私はそれ以上に、ミッチェルが描きたかったのは単なる恋多き女性ではなく、男性が表舞台の時代に自分の意思で強く生きる女性であり、彼女は自身の知識と人生経験の集大成としてこの大作を作り上げたので、もうこれ以上続編を書く必要はないと感じたからだと思う。『風と共に去りぬ』は、そんな彼女の思いがこもった魂の一作なのではないだろうか。

またこの作品でミッチェルは、何度も絶望のふちに立たされながらも、明日への希望を持ち続けた主人公スカーレットを通して、いかなる状況でも最後まで自分を信じて諦めないことの大切さを伝えたかったのだと思う。実際、作者である彼女自身も怒涛の人生を送っており、人間として、女性として、強く生きることがどれほど大変なことか身をもって体験している。若くして母を亡くしたミッチェルが、学業を諦めて故郷に帰るときの心境も、生きるために強い意思をもって、タラの地へ帰郷したスカーレットが物語っている。

そんな彼女の魂の作品『風と共に去りぬ』は、世界中で大反響をよび、時を越えて、歴史の延長線上にある今を生きる私たちにも、大きな影響を与え続けている。きっとこれから先も、世界中の人々の心に響く不朽の名作として、色あせることはないだろう。

この作品の魅力、それはスカーレットの自立した女性としての力強い生き方が、多くの読者に自分を信じ続ける勇気を与えてくれていることだと思う。**私も、これから先何度も人生の壁にぶつかることがあるかもしれないが、そのたびにスカーレットを思い出し、自分の意思を強く持ち続けて、乗り越えていきたいと感じた。**

⑧学んだこと、得たもの：『風と共に去りぬ』という作品は、ミッチェルの人生の集大成ともいえる。いかなる状況でも、最後まで自分を信じて諦めないことが大事であるということを学んだ。
⑨SUMMARY : The novel *Gone with the Wind* is the corpus of Mitchell's life. I learned that it is important to believe in myself and never to give up, however difficult the situation may be.

参考文献・ホームページ

・『風と共に去りぬ①～⑤』Margaret Mitchell 著、大久保康雄・竹内道之助訳、新潮文庫
・『世界文学全集＜第1期第21＞マーガレット・ミッチェル』、河出書房
http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%9E%E3%83%BC%E3%82%AC%E3%83%AC%E3%83%83%E3%83%88%E3%83%BB%E3%83%9F%E3%83%83%E3%83%81%E3%82%A7%E3%83%AB

マーガレット・ミッチェルとスカーレット・オハラ

～『風と共に去りぬ』にみる、二人の女性～

源　麻由

〈執筆者データ〉

①英語タイトル：Margaret Mitchell and Scarlett O'Hara ~Two Women in *Gone with the Wind*~　②英語名：Mayu Minamoto　③所属：欧米言語文化講座 英語圏

④　　⑤　　⑥

⑦キーワード：女性の生き方、南北戦争、19世紀のアメリカ

アメリカ文学界において、小説『風と共に去りぬ』(*Gone with the Wind*,1936)は常に冷遇されてきました。その理由はいくつもあり、ストーリー自体を非難する人もいれば、超ベストセラーになったということのみを非難する人もいます。このレポートでは、小説『風と共に去りぬ』を通して、作者であるマーガレット・ミッチェル(Margaret Mitchell,1900-1949)と小説の主人公であるスカーレット・オハラについて深く追究してみたいと思います。私が実在の人物(ミッチェル)と架空の人物(スカーレット)を同等に扱っているのは、作者の性格がスカーレットに反映されているからで、どうしても切り離して考えることができなかったからです。ミッチェルがスカーレットに託した思いとは何だったのでしょうか。早速、小説『風と共に去りぬ』を手がかりに、二人の女性について見ていきたいと思います。

Ⅰ．作者マーガレット・ミッチェルの生い立ち

ミッチェルは1900年、ジョージア州アトランタで生まれました。彼女の幼年期は南北戦争を生き抜いた母方の親類の影響を大きく受けています。彼女は男の子とばかり遊ぶおてんばで、11、2歳ころまでは、ズボンをはかされていました。あまりにおてんばだったため、暖炉の火がスカートに燃え移ったことがあったのです。

そんな彼女も1918年にワシントン女学院を卒業し、その後医学を志しスミス・カレッジに入学しました。女学院時代、学校との違和感ゆえに、彼女はますます男友達と遊ぶようになりました。このことは、女性仲間からうとまれ、常に若い男たちに取り巻かれていたスカーレットとミッチェルの相似を浮き立たせずにはおきません。しかしながら1919年1月に母親がその年流行したインフルエンザで死去し、ミッチェルは学業をあきらめアトランタへ戻りました。この出来事は『風と共に去りぬ』でスカーレットの母

親が腸チフスで死去し、タラへ戻る場面の元になりました。彼女はアトランタで「アトランタ・ジャーナル」に入社し、日曜版のコラム執筆者となりました。1922年に彼女はベリアン・「レッド」アップショーと結婚しました。しかしながらレッドは酒の密売人であり、彼らは間もなく離婚しました。その後、彼女は1925年7月4日にアップショーの友人であり、終生のよき伴侶となったジョン・マーシュと再婚しました。ミッチェルがスカーレットと酷似した部分があったことはすでに紹介しましたが、再婚後、彼女の性格はがらりと変わって、むしろアシュレーの妻メラニーに似始めました。「事実は小説より奇なり」とはまさにこのようなことを言うのでしょう。

II.『風と共に去りぬ』のあらすじと登場人物

小説『風と共に去りぬ』は、南北戦争下のジョージア州アトランタを背景に、気性の激しい南部の女スカーレット・オハラの半生を、彼女を取り巻く人々ともども壮大に描いた作品です。ここで、簡単なあらすじと、主な登場人物4人について触れておこうと思います。

〈あらすじ〉

アメリカ南部の大農園に生まれたスカーレット・オハラは16歳、輝くばかりの美貌と火のように激しい気性の持ち主だった。スカーレットがひそかに憧れていたアシュレーは、いとこのメラニーと結婚することになってしまった。スカーレットは、腹いせにメラニーの兄チャールズの妻となる。そんなスカーレットをひそかに見つめる謎の男レット・バトラー。そんな中で南北戦争が勃発、スカーレットの波瀾の人生が幕をあけた。

〈登場人物〉

☆スカーレット・オハラ(Scarlett O'Hara)☆

アイルランド人移民の父と優雅なフランス貴族系の家柄出身の母をもつ農園主の娘の若い貴婦人。気が強く、女性でありながら騎士道精神をもつ。一度とらえると離さない動的な美貌の持ち主で、周りの男性からちやほやされて育った。しかし、結婚してすぐに未亡人となり、さらに南北戦争の敗戦後財産を全て失い、波瀾の人生を送ることになる。算数に強く、男性の心を掴む技術に長けており、商才がある。実家の農園を心から愛している。

☆レット・バトラー(Rhett Butler)☆

チャールストンの名家出身だが、紳士的に振舞おうとせず、うわべの愛国心を装うことなく、世間の反感をかう。父親から勘当され社交界からは締め出された。戦争が始まる前から南部の敗戦を予測し、軍隊には加わらず、北軍の封鎖を破って商品を投機的に売り巨万の富を築き、戦後は莫大な公金を横領した海賊的紳士。スカーレットを愛しているが、なかなか本心を見せようとせず、彼独特の方法で求愛を続けた。長い恋路の末スカーレッ

トと結ばれるが、最後には彼女の愛に疲れ、彼女の前から去る。

☆アシュレー・ウィルクス(Ashley Wilkes)☆

スカーレットが思いを寄せる名家出身で教養もあり、紳士的な長身の美青年。スカーレットの誘惑に悩まされるが、精神的な支えとして、最初から従姉妹のメラニーと結ばれていた。「メラニーが僕の全てだった。そしてスカーレットは肉体的にしか愛せない」と、彼女の死後、スカーレットに打ち明ける。

☆メラニー・ウィルクス(Melanie Hamilton Wilkes)☆

旧姓ハミルトン。アシュレーの妻でスカーレットの義妹。病弱だが、心優しく純真で健気な女性。家族を心から愛しており、またスカーレットが自分に深い嫉妬を抱いているとは知らず、スカーレットを信じ、まるで実の姉のように一途に慕っている。普段は気が弱いが、いざ自分の愛するものに危機が迫ると勇気を発揮する。

転んでもただでは起きない強いスカーレット、野生的で男らしいレット・バトラー、繊細な芸術青年アシュレー、そして、優しく母性的なメラニー。この 4 人は、常に読者へ影響を与え続けます。本を読み進める読者の中には、優しいメラニーにこよなくあこがれる一方でとても近づけないと痛感し、そうかといってスカーレットみたいに激しくて強いのはいやだと思う人がいるかもしれません。自分がメラニーなのかスカーレットなのか、つい重ね合わせてしまうところにこの小説の奥深さがあります。それが、この小説の大きな魅力の一つでもあるのです。

Ⅲ.ミッチェルの生き方・スカーレットの生き方

ミッチェルは生涯に 3 度、全く別のタイプの男性と婚約を交わしました。1 人目はクリフォード・W・ヘンリー中尉、2 人目はベリアン・「レッド」アップショー、そして終生の伴侶となったジョン・マーシュです。

ヘンリー中尉はハーヴァード出身、文学の素養もあるおとなしい美男子で、おてんばな彼女にはちょうどよかったのでしょう。この中尉がアシュリーのイメージと重なるといわれています。彼と密かに婚約するものの、2 ヵ月後に彼が戦死してしまいました。この出来事は、結婚してすぐに未亡人となってしまうスカーレットに反映されています。

2 人目のアップショーは、世間の評判がよくないものの、まことに性的魅力に富んだ男でした。彼は、赤毛であることから呼び名がレッドで、密造酒の件、両親からの勘当などの点で、レット・バトラーのモデルといわれています。家族や友人の激しい反対を押し切って、ミッチェルはアップショーと結婚、ところが、彼は生計を立てるどころか、着実な生活すらできず、2、3 ヵ月で結婚生活は破綻してしました。彼女は原因が、ヘンリー中尉への淡いロマンスを告白した自分にあると思い、傷つきながらも自責の念にかられました。

結婚の破綻から立ち直るべく、ミッチェルは「アトランタ・ジャーナル」で新聞記者とし

て働きました。そこで、もともとアップショーの友人だったジョン・マーシュと出会い、再婚しました。この数奇な人間関係は、小説内にも反映されています。『風と共に去りぬ』の三角関係は、アップショー＝ミッチェル＝ヘンリー中尉の三角関係と呼応し、ジョンはその外に立っていました。彼との結婚を彼女がしぶったのは、ジョンがその外に立つ男性だったからであり、従って彼女が結婚後フラッパーから南部女性に変身したのも、自分も関わった三角関係をレット＝スカーレット＝アシュレーの関係にすり替え、物語の次元へと切り離し、みずからをジョンとともにその外へ位置づけたからでしょう。

では、スカーレットにとって恋愛とは、そして結婚とは何なのでしょうか。彼女にとって、結婚とは生きるための手段でしかなかったのです。南北戦争で敗れた南部を生き抜くことばかりを重視しすぎたために、最後の最後まで自分の本当の気持ち(レットへの想い)に気付かなかったスカーレットは、ようやくその気持ちに気付きますが、時機遅く別れを告げられてしまいます。この結末に託された、「失ってはじめて理解するものはある。」というスカーレットからのメッセージは、読者である私たちに対して作者ミッチェルから投げかけられた、永遠のテーマなのではないかと思います。

Ⅳ.スカーレットに託された、理想の女性像

作者ミッチェルの性格が反映された主人公スカーレットは、作者さえもあこがれた理想の女性像として私の目に映ります。スカーレットは私のあこがれの女性です。しかしながら、この小説を読んだ人すべてが、彼女に好感を抱くわけではありません。中には、彼女を「悪女」だと考える人もいます。確かにスカーレットには欠点がありますが、それを補うだけの魅力も持ち合わせています。なので、私には彼女が「悪女」には思えないのです。

スカーレットは、女性が元々生まれ持っている性質や本能に従って、誠実に生きた女性です。投げ出して、逃げてしまえたらどんなに楽かもしれない重荷も全て自分の持つ責任として何としてでも、誰かを傷つけてでも、守り抜こうとする姿勢は、スカーレットがするからこそ、信じられるものがあります。そこには偽善も嘘も存在しないのです。

どこまでも自分の感情や本能の赴くままに激しく生きるスカーレットの姿は、それだけでも、彼女のように生きる事のできない多くの女性をひきつけます。きっと、作者であるミッチェル自身も、スカーレットにひきつけられたことでしょう。しかし、もうひとつの一面、偽善や嘘のない真っ正直に生きる性質こそが一番、このスカーレットの持つ、世間に反感を買われる性質であり、人をひきつける美徳の一部なのだと思います。

私はこの小説において、スカーレットという鏡に映った、マーガレット・ミッチェルという女性が生きた証、彼女の理想を垣間見ることができました。スカーレットのように、絶望の中から希望を見出せる、強い女性になりたいと思います。

マーガレット・ミッチェル　　スカーレット・オハラ

⑧学んだこと：『風と共に去りぬ』の作者マーガレット・ミッチェルと主人公スカーレット・オハラとの比較のなかで、現代社会では目にすることのできない女性の強さを知りました。私にとって両者の生き方はとても真似することのできないものですが、手本として、これから少しずつ自分の道を進んでいこうと思います。

⑨Summary : Margaret Mitchell was an American author, who wrote the novel, *Gone With The Wind* . The novel is one of the most popular books of all time. Scarlett O'Hara is a protagonist, willful and spoiled Southern bell. She would do anything to keep her land and get what she wants. I think that Scarlett is the woman who fulfills her life following the instinct every woman has. This is not only her fascination but also her bad point. I want to be a strong woman like Scarlett who can find hope from adversity.

参考文献

・『風と共に去りぬ～スカーレットの故郷、アメリカ南部をめぐる～』
越智道雄　著、求龍堂、(1999 年)

・『風と共に去りぬ』1～5 巻　大久保康雄　著、新潮社、(1977 年)

ヘミングウェイ『老人と海』に隠されたメッセージ
～私にとってのメカジキとは～

古谷　容子

執筆者データ：
① 英語タイトル：Messages from *The Old Man and the Sea*
② 英語名：Yoko Furuya　③所属：欧米言語文化講座　英語圏
④　　⑤
⑥
⑦論文を書くにあたっての関心事：
現代の私たちは、過程やそれを追い求める自身の熱い思いを大切にせず、結果ばかりにこだわっているのではないだろうか。または、理想ばかりを並べて何も行動に移せていない人が多いのではないだろうか。自分の目標を決め、孤独にも負けず、最後までそれを追い求めた老人サンチャゴの生涯から自分の人生を見つめなおす。

ヘミングウェイ
Hemingway, Ernest
(1899 年～1961 年)

『老人と海』新潮文庫
ヘミングウェイ著、福田恒存訳

興味を持った理由：
ヘミングウェイの代表作である『老人と海』。老人が海に出て、やっと捕まえた獲物を帰る途中に鮫に食べられるというストーリーである。ただそれだけの話にもかかわらず、現在までこれだけ長い間、多くの人に読まれているのはなぜなのだろうか。シンプルなストーリーでありながら、読めば読むほどにいろいろなことを感じさせてくれるこの作品に隠された、主人公である老人サンチャゴからの、また、作者ヘミングウェイから私たち、読者への隠されたメッセージを探りたかったから。

Ⅰ．はじめに

『老人と海』(*The Old Man and the Sea,* 1952)というと、ヘミングウェイの代表作であり、読んだことのある人も多いだろう。ストーリーはタイトルそのままと言ってもよいほど大変シンプルなものである。あらすじは、老人サンチャゴがたった一人で海に出て、不漁が何日も続いた後、大物のメカジキに出会う。捕らえるのにも大変苦労し、帰る途中には鮫に遭遇し、やっと帰り着いたがそのときには、メカジキは鮫に食われて骨だけになっているというものである。読み終えたあとに「それだけ？」や「だから何？」という感想をもつ人もいるかもしれない。しかし、私はそのような感想を持った人にはもう一度作品を読み直してほしい。

この作品は全体を通して老人一人の場面で展開している。それにもかかわらず、私たち、読者が老人と一緒に海に出ているような臨場感を感じさせてくれるのは、ヘミングウェイの情景描写のすばらしさのおかげであろう。また、しばしばでてくる老人の思いや独り言も読者を惹きつける。

Ⅱ．老人サンチャゴについて

時には優しいが、時には過酷でもある海という舞台に一人で、メカジキと出会うまでの長い間、サンチャゴは一体何を思ったのだろう。私はそのことを自分の生活に置き換えて考えてみた。広い海に一人で・・・広い世界に一人で・・・。メカジキと出会うまでの長い間・・・自分が追い求めようとする何かを見つけるまでの長い間・・・。

私はサンチャゴのように何かを追い求めることはできていない。自分が置かれた状況や時代のことなどさまざまなことを言い訳にして現実から逃げている。それに対してサンチャゴは、老いを自覚しながらもどこかでそれを認めない意地をもっている。漁師としてのプライドや男としてのプライドがその意地を支えている。失敗を恐れて何もしないようなつまらないプライドではない。サンチャゴの海に対する姿勢から私たちが忘れかけている目的を持って全力で生きる事の尊さを再認識した。不運だろうと、不幸だろうと必死に闘うことこそ人間がもっとも美しくなれる瞬間なのであると感じた。

また、大きな理想を抱きながらも「老い」という肉体の限界が立ちはだかる。そこにもこの作品のすばらしさを感じる。もしこのストーリーの結末がハッピーエンドであった場合、つまり、苦労の末に大物を港に連れて帰ることができるというようなものであったとしたら、「頑張れば必ず良い結果がついてくる」ということを示す作品になってしまうのではないか。始めにも述べたように、私は結果を重視することではなく、どんな結果であったとしてもそれまでの過程で自分が何を得たかを重視するべきだということをサンチャゴから学んだのだ。

さらに、このカジキ漁は戦争中の混乱した時期に生きることをも描いたのではないかと感じた。戦争をしても何も良い結果は得られない。しかし、戦争を経験することで初めてその無意味さに気づくことができる。そのようなメッセージさえも感じ取ることができた。

サンチャゴの言葉の中に「人間は、殺されるかも知れない。でも、負けちゃいけないんだ！」（The man may be destroyed, but not defeated.）というものがある。ヘミングウェイは他の作品の中で「人は、打ちのめされるが、負ける事は無い」とも言う。つまり、勝ち負けというのは結果ではなく自分の心が決めるものなのだ。希望を捨てたとき、何かを諦めたとき人は負ける。サンチャゴの漁は失敗に終わったと思う人もいるかもしれない。サンチャゴは大きな挫折を経験したのかもしれない。しかし、サンチャゴはメカジキや鮫、さらには孤独や自分自身に勝ったのだ。なぜなら、最後まで諦めなかったから。サンチャゴが得たものは失ったものよりもはるかに大きかったのだ。

私もこれからの人生でこのような大きな挫折を経験することはあるだろう。一度だけでなく何度も何度もあるかもしれない。けれども、何度打ちのめされることがあっても決して自分に負けることがあってはいけない。サンチャゴのように強く生きなくてはいけない。

Ⅲ．ヘミングウェイの描きたかったもの

このサンチャゴの姿はヘミングウェイの理想を描いたものなのではないだろうか。病気や老衰によってヘミングウェイは、文章が書けなくなり、酒に走った。酒を飲んだら、ますます書けなくなり、拳銃を口にくわえて、自殺した。ヘミングウェイは臆病で弱い男だったのかもしれない。だから、サンチャゴのような強い男にあこがれたのだろう。『老人と海』は、ヘミングウェイがあこがれた世界を描いた作品だといえる。また、この作品はヘミングウェイだけでなく私たちみんなもあこ

がれる世界なのではないだろうか。海の上で一人サンチャゴが己の生き方を自分自身に問うたように私たちもサンチャゴの姿をみて自分の生き方を問い直してみてはどうだろうか。

⑧学んだこと、得たもの：
老人サンチャゴに対して生まれた「何のために漁を続けるのか？」という疑問から、自分自身に対する「何のために生きるのか？」という疑問を考えさせられた。老いてもなお希望を失わず、最後までメカジキを追い求める。私にとってのメカジキとは何なのか。漁とは何なのか。私にとっての漁とは人生そのものであることに気づくことができた。まだメカジキは見つけることはできていないが、見つけることができたとき、サンチャゴのように全力で追い求めていくつもりである。

⑨英語サマリー：
I wondered why the old man continued to go fishing. The question made me to think the purpose of my life. His attitude toward the sea impressed me very much. I decided to pursue my goal with all my force through my life.

参考文献

『老人と海』新潮文庫、ヘミングウェイ著、福田恒存訳(2003)

参考ホームページ

人名辞典
http://www.jinmei.info

アーネスト・ヘミングウェイ
信念と勇気のメッセージ

菱川　美保

① 英語タイトル：Ernest　Hemingway：Living up to My Principles
② 英語名：Miho　Hishikawa
③ 所属　：欧米言語文化講座　独語圏
④
⑤
⑥
⑦ 論文を書くにあたっての関心事：
　　1つのことを最後までやり遂げることの難しさ
　　戦争時代を生きた人
　　目の前に立ちはだかる壁を打ち砕く心の強さ

Ⅰ．初めに

ヘミングウェイ（Ernest　Hemingway，1899－1961）といえば、1952年に発表された『老人と海』（*The Old Man and the Sea*）で有名であるが、個人的には1940年に出版された『誰がために鐘は鳴る』（*For Whom the Bell Tolls*）が好きである。ヘミングウェイは英雄的な作品を数多く残したが、作品の多くは出版された当時、非常に注目を集め、賞賛された。これらの作品はいまなお私たち読者に感動を呼び起こす。一体、彼の作品のどのようなところが、現代の私たちの心をも魅了するのだろうか。彼の人生と作品の一部に焦点を当てて探っていきたいと思う。

Ⅱ．ヘミングウェイの生い立ち

まず、彼の足跡をたどってみたい。1899年、ヘミングウェイはアメリカのイリノイ州オーク・パークに生まれた。高校卒業後、『カンザスシティー・スター』紙の見習い記者になったが、第一次世界大戦中に赤十字隊の一員としてイタリア戦線に出た。19歳にも満たなかった彼は砲弾をあび、負傷したため帰国した。その後、パリに渡り、作家ガートルード・スタインらとの出会いをきっかけに本格的に創作の道へと入ることになる。短篇集『われらの時代に』（*In Our Time*，1925）が好評を博し、『日はまた昇る』（*The Sun Also Rises*，1926）や『武

器よさらば』(*A Farewell to Arms*,1929) などで作家としての地位を不動のものとした。この時期の作品では、個人的な体験を基にした無力感や敗北感を主題としており、これが時代の持つ憂鬱や閉塞を見事に表していたために共感を呼び、「ロストジェネレーション」の名が生まれるきっかけとなった。30 年代に入ると社会的な問題に主題が移り、『第５列および最初の４９短編』(1938) に収録された戯曲「第５列」では、政治的、経済的不法行為を強烈に糾弾し、『誰がために鐘は鳴る』では自由の危機を訴えた。以後は創作のペースこそ落とすが論客として様々な場に登場し、スペイン内戦や第二次世界大戦にも従軍記者として参加した。1952 年には『老人と海』を発表してピューリッツァー賞を受賞、1954 年にはノーベル文学賞を受賞した。晩年は健康及び精神状態に支障をきたし、1961 年にアイダホ州ケチャムで猟銃自殺を遂げた。

Ⅲ.『老人と海』 *The Old Man and the Sea*

『老人と海』はヘミングウェイの代表作である。サンチャゴという老漁夫の 3 日 3 晩の孤独な闘いを通して、自然という偉大な存在とそれに対峙する人間の尊厳が描かれている。「俺には運がついていない」と言う、老漁師の舟には一匹の魚の姿も見当たらない。84 日間、不漁が続いていたサンチャゴは、85 日目の朝、遠洋まで漁へ出かける。そこでいまだかつて見たことのない大きなマカジキを仕留める。帰途に着くが、その途中に鮫が苦労して射止めたマカジキを食べ尽くしてしまい、港に着いた時には骨だけになる。家に帰った老人は床に伏し、少年に見守られながら、深い眠りに落ちていく。「老人はライオンの夢を見ていた」という言葉で終わる。

ここで語られているのは、「人間の強さ」なのではないだろうか。自分のやってきたことに誇りを持って、サンチャゴは 3 日 3 晩もかけて一匹の魚と対峙する。この時点で並大抵の人では耐えられる状況ではないことが考えられる。そこでこれまでに見たこともないような大魚を一人で射止めるが、その姿は、勇敢そのものだと思う。自分が今まで築き上げてきた漁師像を全うすべく命をかけ、鮫がマカジキに食いつこうとする時も全力で阻止しようとする。このシーンは緊張感があり、息つく暇もなかった。まさしく自分との闘いであると思う。サンチャゴのように自分の目標に命をかけるくらいの情熱を持って挑んでみたい、そのような感想を抱かせてくれる小説である。

Ⅳ.『誰がために鐘は鳴る』 *For Whom the Bell Tolls*

次に、私が非常に感銘を受けた『誰がために鐘は鳴る』について述べたい。『誰がために鐘は鳴る』は、スペイン戦争に参加したアメリカ人青年ロベルトの物語である。ゲリラ部隊と協力して橋を爆破するまでの 3 日間が描かれている。この作品は作者自らも経験したことをもとに書かれており、戦場の緊張感や心の動き、駆け引きなどが綿密に描かれている。わずか 3 日間の出来事をここまで引き伸ばしているということを考えると、いかに激動の中で多くのことを考

え、経験していたかということを知らされる。それでいて撃ち合いの場面などは読者の緊張も一気に高まり、息つく暇も与えない迫力がある。老人と海で感じたようなマカジキとの闘いの迫力を思わせる一場面であった。

この作品のテーマは、作戦の描写ではなく、義勇兵としてスペイン戦争に参加したアメリカ人の思想にあると思う。また、ストーリーの最大の特徴は戦争という緊迫した状況と対極をなすように、わずかな期間に燃え上がったロベルトとマリアの恋愛が描かれていることだろう。ロベルトは、作戦の決行前に敵軍の布陣の変更を発見した。前線から爆破の中止を司令部に要請するが、動き出してしまった作戦を止めることはできなかった。青年は命令に従い、多くの犠牲を払って橋を爆破する。命令違反をすれば、自分が粛清されるだろう。内部抗争に明け暮れる官僚化した軍上層部。憎しみだけを生む戦闘。もはや意味のなくなった橋の爆破。この戦いにはどんな意味があるのか。なぜ他国までやってきて戦争をしているのか。自分の死は報われるのか。悲惨な戦いの中にあるロベルトはそれでもなお沈着冷静を保ち、使命のためには命をも惜しまない。使命を果たした後、敵の砲撃により、死と直面した時、ロベルトは傷ついた足の痛みの中で、ただ敵が来るのを待っているが、それでも充実感の中にいた。使命を果たし、味方も無事に逃げるめどがついた。愛するマリアも無事に送り出せた。さらには負傷しているが、少しでも敵を食い止めることが出来るかもしれないと。この小説は息づまるほどの感動を呼び起こさせてくれる。強く、果敢で使命に忠実に生き、愛し合うことを学び、後悔することなく死を受け入れたロベルトは誇り高く厳かであった。

V．孤独と闘う勇気と冒険心

以上よりヘミングウェイの作品からは、**孤独や死といった人間の抱える大きなテーマ**を根底に携え、己に課せられた運命に耐え、自分と闘う力強さが読み取れた。

『老人と海』は決してハッピーエンドとは言えないストーリーではあるが、壮絶で果敢な老人の巨大魚との奮闘に、私は胸の高鳴りを抑えることができなかった。誇り高い人格とは、ヘミングウェイの描いたサンチャゴのような人なのかもしれない。困難な状況に陥ってしまったとき、「若い頃はなぁ…」と過去の栄光に縛られ、現実から目を背けてしまう人は多いのではないだろうか。私は、出来るならば、サンチャゴのように、自分を信じ、困難にも全力で立ち向うことのできる人でありたいと思う。

また、『誰がために鐘は鳴る』からも信念を貫く人間の力強さがうかがえた。「ゆえに問うなかれ、誰がために鐘は鳴るやと、そは汝がために鳴るなれば」という 17 世紀の形而上詩人ジョン・ダンの詩句からとられたこの題名は、それだけでもヘミングウェイの人生態度が積極的、行動的であることを示しているように思われる。死を前にした主人公は、「この世界は美しいところであり、そのために戦うに値するものであり、そしておれは……こんなにいい生涯をおくることができた」と独白している。ヘミングウェイ自身、第一次世界大戦時に青年期だった「失われた世代」の一員であったが、この作品からも見受けられ

るように、世界はもはや虚無でもなければ無意味でもなく愚劣でもないと肯定的に捉えていたのではないだろうか。「失われた世代」というのは『日はまた昇る』でヘミングウェイがやや揶揄気味に用いている。命名の由来は彼に創作上の助言を与えていた作家ガートルード・スタインがヘミングウェイ及び当時パリに集まっていた若者に対して投げかけた言葉である。フランスとスペインを舞台に目的を見失った国籍離脱者の群れを描いたこの長篇は、ペシミズムの暗さと不思議な輝きとが交錯する作品である。ここでは彼の作品のほんの一部を紹介したが、他にも多くの名作がある。『武器よさらば』は『誰がために鐘は鳴る』と同じように、愛と運命を交錯させており、いずれも悲劇的な結末に終わるという点では共通している。ヘミングウェイは、私たちをとりまく現実の世界から、膨大に広がる本の中の「海」へと誘ってくれるようだ。彼の作品を読むと冒険心が揺り起こされ、「よし！頑張ろう！」と奮起させてくれる。思い悩んだ時に勇気を与えてくれるこれらの作品は、これから先も多くの人たちによって愛読され続けるのではないだろうか。

⑧ 学んだこと、得たもの：

私はヘミングウェイの作品から、人間として強く生きることの素晴らしさを学んだ。彼は戦争を経験し、自分が生きる世界において「闘う」姿勢を貫くことを肯定した人物であったのではないか。なにか一心不乱に魂を捧げるというなかにこそ、本物の感動、情熱、そして悲哀といったものが詰まっている。それは現代社会においても変わらないのではないか。彼の作品、人生を垣間見ることで、私は何事にも自分の信念のもとに「闘う」ように鼓舞されたのである。

⑨ 英語サマリー：

I got the importance of being brave from the works of Ernest Hemingway. He experienced the war and affirmed that fighting hard is valuable. It is from trying hard that real emotion, passion and sorrow result. I think this is true for all of modern society. I was inspired by his works and life to fight for my beliefs.

参考文献

『老人と海』　新潮文庫　1966　Ernest Hemingway 著　福田恆存　訳
『誰がために鐘は鳴る』（上・下）　新潮文庫　1973　Ernest Hemingway 著　大久保康雄　訳
『武器よさらば』　新潮文庫　1955　Ernest Hemingway 著　大久保康雄　訳
『日はまた昇る』　新潮文庫　2003　Ernest Hemingway 著　高見浩　訳
『ヘミングウェイの源流を求めて』　飛鳥新社　2002　高見浩　著
『ヘミングウェイの時代　短篇小説を読む』　彩流社　1999　日下洋右　著
『ヘミングウェイを追って』　求龍堂　1995　今村楯夫・和田悟　著
『ヘミングウェイと歩くパリ』　新潮社　1994　John Leland 著　高見浩　編・訳
『ヘミングウェイ 愛と女性の世界』　彩流社　1994　日下洋右　著
『ヘミングウェイの女性たち』　国書刊行会　1995　丸田明生　著
『ヘミングウェイはなぜ死んだか』　朝日ソノラマ　柴山哲也　著

参考ホームページ

アーネスト・ヘミングウェイ－Wikipedia
第29回　Key West（1）　http://www5b.biglobe.ne.jp/~aiida/Keywest.html

ＪＡＺＺでみるアメリカの人種背景

木下加奈子

執筆者データ ①英語タイトル：Jazz:The Racial Background of America ②英語：Kanako Kinoshita ③所属：欧米言語文化講座 英語圏 ④
⑤ ⑥ ⑦論文を書くにあたっての関心事：私を含め、多くの人の心を動かしているジャズが人種の壁を越えて全世界に広く親しまれている事。

日本のみならず、世界の多くの人に親しまれているジャズであるが、その発祥はアメリカである。ジャズは音楽のジャンルの中でも一番多様でジャンル分けが難しいとされている音楽である。その理由は人種のるつぼであるアメリカならではの歴史が絡んでいるのである。人々がジャズに何をこめたのか……１００年余りの時代を経て、変化していったＪＡＺＺを通してアメリカの人種背景を見ていこうと思う。

Ｉ．～ＪＡＺＺの誕生～

ジャズは１９世紀後半から２０世紀初頭、アメリカ南部のルイジアナ州ニューオリンズと言う港町で誕生したとされている。

このミシシッピ川の河口にあるニューオリンズという町は、港町という性格上、世界中の民族や文化が集まってくる特異な土地柄であった。１６世紀初頭にはスペイン人によって支配され、のちにフランス領となり、ナポレオンの時代にフランスはこの土地をアメリカに売り渡した。労働力としてアフリカから西インド諸島を経由、またはアフリカから直接の多くの黒人が奴隷として連れてこられた。彼らは過酷な労働を強いられ、故郷のアフリカを思ってドラム缶を叩き、そのリズムに合わせて踊り、歌いながら、耳に入ってくる白人の音楽を自由に奏でた……こうして、自然に黒人の体の中に刻まれたリズム感と西洋音楽のハーモニーが合体して、ジャズの原型となるのである。黒人だけでも様々な歴史や文化背景を背負った人たちが入り乱れているのである。彼らのように故郷から遠く離れてこれだけの事を経験してきた人々の胸の内から溢れる思いは私達の心を掴むものがあるのも納得できる。ジャズ・ソングの歌詞を見ても、彼らの痛切な思いを感じることが出来るし、かなり感情的なものが込められている。これは 1960 年

代以降の人権運動と共に黒人社会からアメリカ全土に広まった、黒人労働歌にも通じる。

黒人たちが取り上げる曲は賛美歌、マーチ、労働歌、ヨーロッパの民謡だったりと、様々であったことからも、彼らは非常に柔軟性があって、何でも自分達のオリジナルにしてしまう事が分かる。彼らの音楽にはいろんな表情があり、とてもおもしろい。

次に、ニューオリンズでジャズが誕生する大きなカギを握っていたのが、クレオール(creole)と呼ばれるフランス系白人と黒人の間に生まれた混血といわれている。西洋音楽と黒人音楽の融合こそがジャズだといわれることからも、このクレオールの存在そのものがジャズへと繋がったと考えてよいであろう。

ニューオリンズ周辺に多くいたクレオールは、当初白人と同等の扱いを受け、音楽教育も含めてヨーロッパスタイルの教育を受けていた。ところが、１８６５年に北軍の勝利で終結する南北戦争後に奴隷制度が解放されたおかげで、クレオールの人たちは白人の扱いを受けなくなったばかりか、それまで優越感を抱いていた黒人からも迫害されるのである。次第に没落していく過程で、クレオールの人たちが黒人社会に入り込んでいくこととなったのである。こうやってアフリカ出身の黒人達が奏でる音楽や歌に、クレオールの人たちが身につけた西洋音楽の要素が自然に溶け込んでいくこととなるのである。

もうひとつ見逃せないのが南軍にいた音楽隊である。南北戦争の終戦を機に音楽隊は次々に解散していき、同時にそれまで使われていた楽器が市場に大量放出されることになる。安価で流通し始めた楽器を手にし、見様見まねで覚えた黒人たちが、やがて独自の音楽を奏でることになっていくのである。

これらから分かるように、JAZZは誰かによって、意図して生み出されたのではなく、歴史的な地域の特性などのいくつかの偶発的条件の下に発祥したものであると考えることができ、そういった意味ではある種特殊な音楽と思われる。

自分の認識でも、クラシックのような精巧なイメージより、少し個に依存しているような独特なリズムを持っている音楽であるので、起源には納得できるものがある。

この頃アメリカで、人種差別を行っている中、黒人がこれまでにすごく文化的な事柄を生み出すには、いろんな障害もあっただろうに、やはりそういったことが起こるにあたっては、いろんな努力や、カリスマ的存在が必要だっただろう。

そこで次にジャズ界に多大な貢献をしたアーティストの１人であるルイ・アームストロングをジャズの歴史と共に紹介する。

Ⅱ. ～Louis Armstrong～

ジャズの最大の功労者といえば、サッチモことルイ・アームストロング(1901－1971)。

１９２０年にジャズの拠点となったシカゴで、彼は第１期黄金時代を築いた。そして、黒人ジャズの活躍と同時に、「**シカゴ・ジャズ**」と呼ばれる白人主体のジャズも登場して人気を博した。

１９３０年中頃、大好況による不況から徐々に景気が回復してくると、人々は明るく軽快な音楽を求めるようになり、ビッグバンドスタイルの「**スイング・ジャズ**」が台頭し、アメリカ国内の大都市に急速に広まり、スイング黄金時代が開花する。第一次世界大戦から大恐慌までのアメリカの隆盛期が「**ジャズ・エイジ**」と呼ばれるのはこのためである。スイング黄金時代が始まるのであるが、当初のブームの立役者は白人バンドが中心であった。スイング・ジャズが人気を博した背景には、人種的障壁で隔てられていた黒人ミュージシャンと白人ミュージシャンの媒介としての役割を果たしたクレオールの存在があったのだ。特に代表的なバンドリーダーの一人であるアームストロングの存在は、ジャズとヴォーカルとの融合という側面(アームストロングはトランペット奏者でありながら自ら歌も歌った)において重要な役割を果たした。

彼のバンドにおいて黒人と白人が少しずつ歩み寄っていくのである。

Ⅲ．～２１世紀のＪＡＺＺの現状～

ニューヨークはジャズの本場だと言われるが、ジャズのそもそもの演り手であった黒人はＲ＆Ｂかヒップホップに流れてしまい、ジャズをやる若手黒人ミュージシャンは、今ではほとんどいない。ジャズ・クラブに行ってみても、多くのバンドは年配の黒人と若い白人(時折日本人)の混合編成である。そして観客は日本とヨーロッパからの観光客。ハーレムの真ん中に位置するアポロ劇場ですらそのような状況なのだ。これがニューヨークのジャズの現状なのである。今日、数少ないジャズ・ミュージシャンたちは食べていくのに苦労している。ＣＤを出したり、一流ジャズ・クラブで演奏できるミュージシ

ャンはほんの一握りである。多くのジャズ・メンは不本意ながらレストランやパーティでＢＧＭとしてのジャズを演奏して生活している。

楽器での多彩なテクニックと、時には胸に響く歌声で魅了したり、熱い想いが込められた歌詞を歌い上げたりと、これだけエモーショナルな音楽は他にない。今一度ジャズに耳を傾けてほしい。他の人種への偏見や世の中の様々なことに対して思う事、時には愛する誰かへ捧げたい気持ちなど、皆にジャズから生きる力をまさに受け取ってほしいのである。

これまでジャズが様々な変化を遂げてきたように、現代では純粋にジャズと呼ばれるものは少ないが、ジャズとポップスが組み合わされたり、クラブ・ジャズといった、もっと聴きやすく耳に入りやすいサウンドで、音楽のジャンルという垣根を飛び越えたところにある音楽ともいえるであろう。

気がつけばジャズは身近なところにあるのである。

⑧学んだこと、得たもの：音楽は人の歴史と共に絶えず変化している。昔ならではの形ではなくとも、人の手によって進化している。それが黒人と白人の距離を埋めたのだから、音楽の力はやはりすごいと思う。

⑨Summery : Music is changed with human history. Although it is not conventional style, it has evolved by human powers. The gap between the Black and the White was been short, so I think the power of music have a great influence to people.

参考文献

『面白いほどよくわかるジャズのすべて』　澤田俊祐　監修　（日本文芸社　2007）

http://www.nybct.com/2-71-jazz.html

http://www.ssmando.com/main/genre/jazzswing.html

キング牧師が教えてくれる生きるヒント

山場友紀子

①英語タイトル：The Hint for Our Lives Given by Martin Luther King
②英語名：Yukiko Yamaba ③所属：欧米言語文化講座　英語圏　④
⑤　　⑥
⑦論文を書くに当たっての関心事：アメリカの移民問題に関心がある。将来、白人が非白人よりも少なくなるという予想があり、マイノリティである人々の動向に注目が集まっている。そんな、変わりゆくアメリカに注目したい。また、どうしてそのような現状になってきたのかということも知りたい。

Ⅰ．はじめに

アメリカは「移民の国」と言われているように、様々な人種、民族の人々が集まっている国である。近年はアジア系やヒスパニック系の移民が増えているが、今回は、奴隷としてアメリカに連れてこられ、奴隷解放宣言後も差別に苦しみ、闘ってきた黒人に焦点を当ててみたい。特にその中でも、黒人に対する人種隔離制度撤廃に取り組み、公民権法成立に尽力し、ノーベル平和賞も受賞したキング牧師を取り上げようと思う。キング牧師が公民権運動に携わった黒人牧師であることは知っているが、実際、彼はどのような人生を歩み、公民権活動へと進んでいったのかは知らなかった。また、黒人に対する人種差別について考える上で欠かせない人物であるから、彼の生き方、考え方を知ることは、それをより深く理解できるのではないかと思う。人種を超えた多くの人をこの運動に駆り立たせた彼の活動、そして、彼の行った運動の中で最も有名なワシントン行進での「私には夢がある」の演説を取り上げ、そこから現代に生きる私たちは何が学べるかを探ってみたい。

Ⅱ．Martin Luther King

ⅰ．キング牧師とは？

１．生い立ち

キング牧師ことマーティン・ルーサー・キング・ジュニア（Martin Luther King Jr.）は１９２９年1月１５日、アメリカジョージア州アトランタで生まれ、１９６８年4月４日に暗殺された。父のマーティン・ルーサー・キング・シニアは教会の牧師を務める町の有力者であり、銀行理事や全米バプティスト会議やモアハウス大学理事も務めていた。したがって、キング牧師は幼

い頃から大金持ちではないが、中産階級の暮らしができた。何不自由のない暮らしができる一方、聖書の一字一句を生活の規則として実践するファンダメンタリスト（根本主義者）の父親が支配する家庭で厳しく育てられた。

2．人種差別の経験

黒人であるキング牧師は、当然のことながら人種差別を早くから経験していた。当時は、中産階級で経済的に余裕があっても、人種差別を受けないで済むような社会ではなかったのである。それほど南部では人種差別が徹底していた。「白人用」などと書かれた看板を見たり、自分にとっては偉い父が白人から差別されるのを見て人種問題の深刻さを認識していった。しかし、両親からは「差別されても白人を愛さなければいけない、それがクリスチャンだの義務だ」と忠告され、それほど黒人を憎んでいる白人をどうして愛することができるのか、と疑問を持つようになった。

3．牧師を志す

キング牧師は、はじめから牧師を志していたのではない。聖書の教えを全て信じることはできず、父親の行っている説教にも疑問を持っており、むしろ牧師にはなりたくなかったようだ。

しかし、大学時代に転機が訪れた。学長のベンジャミン・ノイズの教えや上級生からの影響を受けて牧師になることを決めた。彼が受けた影響とは、教会は、単に聖書の言葉だけを信じて（この世の苦しみは気にせず、来世での幸福を夢見ること）それを伝えるのではなく、信者の抱えている貧困、飢え、偏見などの社会問題について手を貸すことができる、それも信仰の一部であるというものだった。また、これまで憎悪を抱いていた白人と知り合うようになり、白人の中にも多くの見方がいることを知った。「一部の白人の持っている黒人にたいするやさしさをすべて否定してしまうことは、自分自身も、闘う相手である人種差別主義者の白人と同じになってしまうこと」（上坂　ｐ３４）に気付いた。これも、牧師を志すきっかけとなったようである。

4．キング牧師の生まれから感じられたこと

キング牧師も、幼少の頃は他の黒人と同じように人種差別を受け、白人を憎んでいた。しかし、大学に入り、白人の友を持つことで、白人を憎むことは、自分も差別している側と同じなのだという事に気付いた。これを現代の子供達に伝えれば、頻発しているいじめはなくなるのではないかと思った。

← マーティン・ルーサー・キング牧師

ⅱ．キング牧師と公民権運動

１．公民権運動が起きた背景

公民権運動は１９６０年代に盛んに行われたが、実は、黒人は１８６３年の奴隷解放宣言で自由を手にしていたはずである。合衆国憲法修正第１３条には奴隷制禁止、第１４，１５条には「全て国民は合衆国市民」・「法の平等を受ける権利」・「投票権の行使において差別されない」と明記されている。しかし、それから１００年もの間差別が続いたのはなぜか。それは、奴隷制廃止に反対する南部白人たちが連邦政府に抵抗し、人種隔離制度を制定して黒人の権利を制限したからである。黒人の投票権を剥奪する、バスやレストランなどで白人席と黒人席を設ける、黒人と白人が結婚することを禁止するなどの制限を設けた。ここに、「分離すれども平等」の原則が確立し、黒人に対する差別は続いていくことになる。

２．キング牧師の活動

１９５４年、キング牧師はアラバマ州モントゴメリーのデクスター教会に着任した。はじめ、彼の説教は大学の授業のように知識を与えるような内容だった。当時の黒人教会では、目の前の現状（人種差別）には触れずに、来世でどう幸せになるかを説教している場合が多く、よって市民も、差別状態は仕方がないものとして諦めていた。しかし、キング牧師は、人々が、神や世界について自分たちの感情をどう表現したらいいのかを知りたがっていることに気付き、聞いている人を熱狂させることが重要で、自分が理性的な態度を捨て、感情表現を豊かに訴えなければいけないと思うようになった。彼は、理性よりも情緒に訴える、響きの良い言葉を繰り返し用いる演説を行った。

１９５５年、モントゴメリーでバス・ボイコット事件が起きる。これは、交通機関における人種隔離は、社会生活に影響を及ぼすという点で違憲だとして行われたボイコット（乗車拒否）運動である。この運動を行うに当たり、一般の黒人市民の支持を集めるため、影響力のある牧師に協力要請が来た。このとき、同市の教会で牧師をしていたキングにも要請が来た。この出来事が、彼が公民権運動に関わっていくきっかけとなったのである。

こうして、公民権運動に携わっていくキング牧師は、非暴力直接行動という思想を基に活動していく。この、非暴力直接行動とは、ガンジーの思想に影響されていて、「「行動すること」によって、不法な法を破り服従しないという能動的な市民的不服従」（上坂　ｐ６１）を意味する。具体的に言えば、人は不法な法（つまり人種隔離法）には従わない道義的責任があり、ボイコットやデモ行進などをしてそれに従わなかった時に、暴力などで危害を加えられても非暴力で耐えることで、加害者とこれを見ている人々の良心を呼び覚まそうとするものである。

このようにしてキング牧師は、独立宣言や憲法の原則に従って様々な非暴力直接行動を行い、人種差別撤廃を求めていった。この過程で彼は、いかに不当な扱いを受けても白人を恨んだり憎んだりしてはいけないとも訴え運動を進めた。そして、これが功を奏したのか、良識ある白人たちもこの運動に共鳴するようになっていった。

３．キング牧師の活動から感じられたこと

キング牧師は、大学を卒業し牧師となり、黒人たちの為に教会で説教を行った。牧師になった頃から既に、情緒に訴えたり、同じ言葉を繰り返すような説教を行っていた。このような説教のスタイルが、彼の活動の集大成とも言える私には夢があるの演説を生み出したのだと思う。そして、この演説のスタイルは、来世での幸せについて説くような従来の説教をやめてキング牧師自身が生み出したものである。このように、彼は非常に積極的であったので、公民権運動でも頭角を現し、リーダーになれたのだと思う。

iii．ワシントン大行進

１．流れ

キング牧師の非暴力直接行動で一番の盛り上がりを見せたのは、１９６３年８月２８日、奴隷解放宣言からちょうど１００年目の日に行われた「ワシントン大行進」である。この日の参加者は、約２５万人で、うち白人は６万人も参加した。１００人近くの連邦議員も参加するなど、宗教界、労働界、公民権運動団体が大同団結した集会となった。「まさに、この集会は、抜本的な公民権法の成立を願う全米の良心的な人びとを、人種の差をこえて、総結集させる場となった。」（油井　ｐ４０１）そして、集会の最後にワシントンのリンカーン記念堂前で行われたキング牧師の私には夢があるという演説は大変有名なものとなり、公民権法成立を支持する世論は増加していった。その後、根強い抵抗があったものの、１９６４年に公民権法が成立した。

２．「私には夢がある」

まず、演説の前半では、アメリカに対する恨み、つらみ、落胆、半ば脅迫じみた警告を発している。奴隷解放から１００年も経っても、黒人はいまだに差別されているという進歩の無い現状を批判し、差別撤廃の根拠を独立宣言や憲法の精神に求め、それを黒人にも適用するよう要求した。黒人が持つべき様々な権利を小切手にたとえ、その小切手を換金するためにワシントンまでやってきたと述べている。

「しかし、１００年たったいまもなお黒人は自由ではありません。１００年たったいまもなお黒人は、人種隔離の足かせと差別の鉄鎖によってひどく痛めつけられています。１００年たったいなもなお黒人は、物質的繁栄の大海にある貧困の孤島に閉じ込められています。１００年たったいまもなお黒人は、アメリカ社会の片隅でみじめに暮らしており、自分が自分の国の異邦人として扱われていることを思い知らされています。」

「言い換えれば、私たちは、小切手を現金にかえてもらうためにこの国の首都にやってきたのです。…この手形は、白人だけでなく黒人も、すべての人には、生命、自由、そして幸福追求の権利が与えられると約束しています。」

また、黒人同胞に対しては、白人への不信感を取り除き、非暴力の姿勢を説いた。人種隔離撤廃を達成するためには、黒人自身が見返りを求めない神の愛を白人たちに注ぐことを強調している。平等を求める闘いは、白人全体を敵とする戦いではなく、白人をとらえている不正義との闘い、理解と友情を求める闘いであった。

「私は、正義の宮殿の暖かい門口にたつ黒人のみなさんに申し上げなければなりません。私たちは、正当な場所を確保する闘いの過程で誤った行動の罪を犯してはなりません。
反感と憎しみの杯を飲んで自由への渇望を癒そうとしてはいけません。私たちは、いつまでも尊厳と自制の高みに立って闘いを進めなければなりません。新しい世界を生み出す私たちの抵抗が物理的な暴力に墜すことのないようにせねばなりません。」

「黒人社会をまきこんできた信じられないような新しい戦闘精神は、すべての白人に対する不信ににわれわれを導くものであってはなりません。なぜならば、今日この場に多数の白人が参加していることにも示されているように、白人の友人の多くは、自分たちの運命と密接に結ばれており、自分たちの自由は、分かちがたく私たちの自由と結びついていることを理解するようになっているからであります。」

演説の後半は、いよいよ、有名な「わたしには夢がある」の演説に入っていく。ここでは、人を肌の色でなく、能力によって判断することを「私には夢がある」で始まる演説を繰り返し、印象付けることで切実に訴えた。

「私の友人であるみなさんに、私は申し上げたい。私たちは、今日も明日も困難に直面しなければなりません。それでも私には夢があります。それは、アメリカの夢に深く根ざした夢であります。その夢とは、いつかこの国がよみがえって、「人はみな平等に創られているという真理を自明のことと信ずる」信条の真意が現実となる夢であります。」

「私には夢があります。いつの日か、ジョージアの赤土の丘のうえでかつての奴隷の子どもたちと、かつての奴隷主の子どもたちが一緒に腰を下ろして、兄弟として同じテーブルにつく時がくる夢です。」

「私には夢があります。いつの日か、私の四人の子どもたちが、肌の色によってではなく、人となりそのものによって人間的評価がなされる国に生きるときが来る夢です。」

なお、この演説の訳文は古矢旬編『史料で読むアメリカ文化史５　アメリカ的価値観の変容　１９６０年代－２０世紀末』（東京大学出版会）で読むことができる。

3．演説から感じられたこと

キング牧師の「私には夢がある」の訳文を読んで、彼の演説は、その内容や方法が人種や民族を超えて多くの人々の心に響くもので、だから、社会全体を動かすことができたのだと思った。「私には夢がある」で始まる文章を何度も繰り返すことで、演説が、より印象深いものになっている。同じような箇所が前半の「一〇〇年たった今でもなお…」という部分にも見られる。また、「私には夢がある」の部分は、日常見られる差別風景を例に挙げて、誰にでもわかりやすく、人種隔離はいけないことだということを伝えている。

キング牧師は、同じ言葉を繰り返して印象付けたり、例を挙げて分かりやすく解説することで、より多くの人々の心を動かしたが、他にも彼の演説内容に人々の心を動かした理由が感じられた。それは、演説を聞いている人々を「私の友人であるみなさん」と呼んだり、差別してきた白人を「白人の友人」と呼んだ点であるエラー! リンクが正しくありません。。聴衆を「友人」と呼ぶことで、人種隔離の問題や公民権運動が身近なものに感じられ、自分たちの手でこの問題を解決しようという意識が広がっていったのではないかと思う。

このように、キング牧師は、公民権運動の指導者でありながら、民衆と同じ目線に立って誰に対しても分かりやすい言葉で演説を行い人種隔離撤廃を訴え、多くの人々の心を動かしていったのだとわかった。

↑ワシントン行進で演説するキング牧師

Ⅲ．最後に

キング牧師は、キリスト教の教えに即し、また、当時の黒人が差別を克服するのに必要なものとは一体何なのかを自らの人生経験から見つけ出し、非暴力直接行動に結び付けていった。これまで人種隔離制度について受動的で消極的であった黒人の態度を改めさせ、しかしながら、憎んでいた白人には寛容であることをキリスト教の精神に基づき説いた。そして、その活動の集大成がワシントン行進であり、「私には夢がある」の演説であった。

いつの時代も、人と違うことをするのには大変な勇気がいる。特に現代に生きる私達はそれを恐れる傾向があるように思う。しかし、キング牧師のように何事にも恐れず積極的に、かつ誰に対しても思いやりを持って行動することで、目の前にあるどんな大きな困難も乗り越えていけるのだと分かった。

⑧最近、ニュースや新聞などでいじめが話題になっている。いじめを見て見ぬふりをしたり、多数派に居たいからと言っていじめに加担したりすることがあるだろう。そんな時、「いじめはダメだ！」とはっきり口に出せる人がいれば状況は一変するに違いない。キング牧師の生き方から、勇気と思いやりを持って行動することの大切さを学べた。

⑨Recently, bullying is a very timely topic in the news and the newspaper. There are many cases that someone pretends not to look at bullying or others participate in it because they want to be with majority. Then, if someone says clearly “bullying is bad!” it has to change that situation. From King’s life, I can learn it important to act with courage and kindness.

参考文献

有賀貞・大下尚一・志邨晃佑・平野孝編
『世界歴史大系　アメリカ史２－１８７７年～１９９２年』（山川出版社、１９９３年）

上坂昇『キング牧師とマルコムｘ』（講談社現代新書、１９９４年）

猿谷要『キング牧師とその時代』（日本放送出版協会、１９９４年）

明石紀雄・飯野正子『エスニックアメリカ　多民族国家における統合の現実』
（有斐閣選書、１９８７年）

古矢旬編『史料で読むアメリカ文化史５　アメリカ的価値観の変容　１９６０年代－２０世紀末』
（東京大学出版会、２００６年）

『タイタンズを忘れない』という作品から得たもの

中　尾　晋　吾

①英語タイトル：What I Learned From the Work *Remember the Titans*　②英語名：Shingo Nakao　③所属：欧米言語文化講座英語圏　④　　⑤
⑥　　⑥論文を書くにあたっての関心事：黒人差別はなくなるのかということ・スポーツを通じた人間関係・差別、偏見に対しての正確な知識　⑦キーワードｉ）スポーツを通じた人間関係　ii）黒人差別問題　iii）偏見・固定観念

Ⅰ．はじめに

なぜこの『タイタンズを忘れない』(*Remember the Titans,* 2000年　アメリカ公開、2001年　日本公開）という作品を選んだかというと、黒人差別問題に元々関心があり、スポーツを通じて偏見を超えた人間関係を築いていくこの作品がとても印象的で興味深かったからである。前々から友人に見るように薦められていたが、予想以上の印象を受けた。実際に私はアメリカのヴァージニア州に住んでいるわけではないが、アメリカのより現実的な黒人差別という状況に触れることができた。実際にヴァージニア州に住んでいる人々はこの作品から自分とは比べ物にならないほどの印象をうけただろう。私はこの執筆に当たって、まずこの作品のおおまかなあらすじを記し、そして次にこの作品から得たもの、そして、自分に起きた変化をまとめていきたいと思う。

Ⅱ．あらすじ

1971年、ヴァージニア州アレクサンドリア。アメリカ国内では公民権運動が盛り上がり、この保守的な小さな町にも変化の波が押し寄せてきた。白人学校と黒人学校が統合され、T・C・ウィリアムズ高校が開校。アメリカンフットボールチームも統合され「タイタンズ」が結成される。統合に反対する住民達のデモが起こる中、ヘッド・コーチとしてやってきたのが、数々の栄光に輝く黒人コーチ、ハーマン・ブーンだった。これまではヘッド・コーチを勤めていたビル・ヨーストは自分の地位が黒人に奪われた事にショックを受ける。反対していた町の人々もヨーストを支持するが、これまで育ててきた選手達のためにも、彼はアシスタント・コーチを引き受ける決意をする。チームが一丸となるために、ゲティスバーグ大学で合宿が行われることになり、

生徒達はバスで出発する。だが偏見はなかなか消えず、事あるたびに激しい対立が起きる。白人のチーム・リーダー、ゲーリーと黒人のチーム・リーダー、ジュリアスはさっそく殴り合いのケンカ。しかしブーンは「怒りを抑えそのエネルギーを勝負にぶつけろ」と訴え、軍隊のように厳しいトレーニングを強いる。ある朝、ブーンは生徒達を叩き起こし、ゲディースバーグの決戦場までランニングさせる。そこは南北戦争で多くの若者の命が失われた歴史的な場所だった。そこでのブーンの言葉は若者達の心に深く響く。その日をさかいに、チームは確実に変わり始めた。町の大人たちの心の壁は消えなかったがチームは順調にトレーニングを重ね、遂に最初の試合が行われた。相手は全員が白人のヘイ・フィールド高校。途中でミスをしたピーティーが試合をはずされかけたが、ヨーストの指示で配置換えが行われ、見事ウィリアムズ校の勝利。興奮にわくサンシャインはピーティーを連れて、白人専門のパブに入るが入店を拒否される。人種の壁はまだまだ根強かった。第二戦のハーンドン高校との試合では同点から見事に点を奪い取り、勝利。ただ同僚達の活躍を見ながら、出番の回ってこないロニーは複雑な気持ちだった。早くフィールドで活躍したい！そんな彼の夢が遂に現実になったのは、グローブトン高校との第三戦。途中でメンバーの‘牧師’が骨折し、彼が代理でクオーターバックとなった。サンシャインの大活躍でチームは見事に勝利。いよいよ地区大会の決勝へと進出する。混成チームの大躍進は、一方で偏見を拭い切れない人々の反感も買った。北ヴァージニア地区決勝では町の有力者の指示で審判がわざと不利なジャッジを下す。殿堂入りが目前のヨーストは不正をわざと見逃すように圧力をかけられていたが、純粋にフットボールを愛する娘シェリルのためにも不正を正す。チームは勝利を手にするが、ヨーストは殿堂入りの資格を失う。チームはいよいよ地区大会へと進出し快進撃を続ける。若者達のひたむきな情熱に町の人々もいつしか心からの拍手と喝采をタイタンズに贈っていた。だが大事な決勝戦を目前に控えた夜、誰もが予期しなかった悲劇が起ころうとしていた。タイタンズのキャプテンであり全米先発でもあるゲーリーが交通事故にあってしまい、下半身不随になってしまったのである。チームは不安定なまま決勝戦を迎える。決勝戦は**アンドリュー・ルイス高校に優位にゲームが進んでいく。ハーフタイムに監督、コーチがあきらめかけていたときにチームメイトみんなが決してあきらめず、勝利へこだわる気持ちを爆発させ勝利へと導き、見事地区優勝を果たす。**

Ⅲ. この作品から得たもの・自分に起きた変化

アメリカでは白人至上主義が残っていて、黒人の学校は白人とは別、黒人の投票は妨害され、図書館に入れず、裁判の傍聴席も白人は一階、黒人は二階、バス、食堂のテーブル、トイレや水飲み場も別という状況の中で、白人学校と黒人学校が統合された。そのような中で、アメリカンフットボールというスポーツを通じてチームメイトが差別を超えた深い友情にまでつながったこの作品には得るものがとても多くあった。私も部活を小学校・中学校・高校と渡ってサッカーをしていたので、つらくてくじけ

そうな状況、厳しい練習、スポーツを通じての人間関係といったように共感できるところが多くあった。しかし、生徒たち・監督・コーチはそこに人種差別問題が入り込んでいるので自分には経験することのできない難しく困難な問題に直面していた。黒人のヘッドコーチであるハーマン・ブーンは自分自身もこの問題に直面していて、さらにチームをまとめなければならないという立場にあってタイタンズを地区優勝、そして全米２位にまで勝ち進んだことは多くのアメリカ人に人種差別問題に対する考え方に影響を与えたことだろう。

ここで自分自身が得たものはスポーツを通じた人間関係が周りの人に影響を与えていることである。しかも、ここでは国家問題でもある人種差別問題への考え方に対してである。生徒同士の偏見を超えた人間関係から監督とコーチが、大人の観点からも学ばされる場面もあった。始めは応援していなかったＴ・Ｃ・ウィリアムズ高校の生徒たちも決勝戦には応援してきていた。そして、最初は冷ややかな視線で見られていたハーマン・ブーン監督も最終的には地域住民から暖かい声援をもらっていた。この変化を見ていると、とても微笑ましい光景であった。彼らの高校時代はとても想像することができないほどのものとなったことだろう。

差別というものは永遠になくなることのない問題であると私自身は考えた。歴史的にみても黒人差別問題は遠い過去にさかのぼるものである。しかし、タイタンズのチームにおける若者がはるか昔からあった偏見を乗り越えて協力しあった。そして大人たちにも影響を与えた。自分自身もこれまで生きてきて形成されている特定の人種に対しての偏見や固定観念はある。この作品からその人種が果たしてどのようなものなのか、自分はその人種をしっかりと知ろうとしているのかと自分に問いただしてみたくなった。ちゃんとした知識もなくて周りに流されている情報を鵜呑みにしていないか、ということにも気づくことができた。エンディングの場面を見ていたら分かることであるが、黒人のチーム・リーダーであるジュリアスがその後、全米先発に選ばれたとのことである。ここにも黒人差別の改善が見られていると感じた。

黒人監督ハーマン・ブーン（Denzel Washinton）　　白人監督ビル・ヨースト（Will Patton）

（『タイタンズを忘れない』ホームページから）

また、強く印象を受けた人は黒人のヘッド・コーチのハーマン・ブーンである。彼の指導が無かったならチームタイタンズは上手くまとまらなくて差別意識が残ったままで崩壊していたことだろう。彼の人種の壁を越える厳しい指導にとても感動した。実際

にその課題をこなした生徒たち全員は賞賛に価するだろう。スポーツの上では「黒も緑も青も白もオレンジも関係ない」とブーン監督が言った場面はとても印象的だった。これはあらすじでも紹介したが、海兵隊の訓練のような早朝のランニングの途中にアメリカ南北戦争において北軍が南軍を破った地であるゲティスバーグの戦場に立ち寄ったときのことである。そのときの台詞を作品(『タイタンズを忘れない』　日本語吹き替え版)の中から引用したい。

「**5万人の兵士がここで命を落とした。まだ俺たちは同じ戦いを続けている。この緑の野原が若者の血で真っ赤になった。心の悪意が兄弟を殺した。憎しみが家族をずたずたにした。耳を済ませろ。死者から学べ。この神聖な場所で。1つにならないなら俺たちもずたずたになる。彼らのようにな。お互い好きにならなくてもいい。だが相手を認めろ。もしかしたら、いつの日か、人として向き合えるだろう**」

この日を境にして、キャプテンであるゲーリーが肌の色に関係なくプレイの良し悪しでメンバーにものを言うようになった。そして、チームが初めてまとまり始める。黒人差別意識がとても残る中で白人、黒人のどちらにたいしても厳しく指導するブーン監督にチームのメンバーはとてつもなく影響されたことでしょう。また、ヘイ・フィールド戦の試合前にはまたこのように言っていた。

「あっちのチームには人種問題がない。こっちにはある。だからこそ強い。これだけは言っておく。何者もわれわれを引き裂くことができない。」

人種問題の有無について、試合前に触れていた。でもそれを強さにして試合前に望めと言っているブーン監督にとても感銘を受けた。そして、白人コーチであるヨーストとの関係にも注目した。ディフェンスは白人側が任されていて、オフェンスは黒人側が任されていた。お互いの戦略のことには口出しするなというここにも人種の壁が感じられていた。チームメイト同士は途中で差別意識が問題でケンカや仲間割れなどが見られたが、お互いを認め合う姿勢が見られていた。しかし、生徒たちを指導する立場にある監督同士には生徒以上に人種の壁を感じた。やはり高校生よりも倍以上も生きているとそれまで持ち続けてきた偏見・固定観念は簡単には拭い去ることのできないものであるということにも着目できた。おそらく現在の日本でもこのような状況なのではないだろうか。ここで周りにある情報を自分でしっかりと判断する力というものが必要であるということに気づいた。最終的に州の決勝戦でヨーストが生徒たちに学ばされる場面や優勝してブーン監督と抱き合う場面は大人が人種差別の壁を超えた場面と見ることもできた。とても感動的な場面であった。

自分も部活動を通じて厳しい監督にであってきたが、人種問題というものを意識したことがなかった。人間関係というよりは自分のプレイの質に集中していた。部活動に人種問題が関わってくるという感覚はどんなに苦しいものであったのであろうか。もし、自分がタイタンズにいたとしたら、黒人、白人どちらの立場にいたとしてもその苦しさに耐えることができたのであろうか。自分は高校時代レギュラー争いというもので、つらい思いをしていたと感じていたが、この作品を通じて自分は周りから偏

見など何も感じないでプレイできていたことを痛感した。今まで考えてきた部活動というものに対して新たなものを発見することができた。さらにアメリカにおける人種差別という状況をより現実的な目で見ることができた。

Ⅳ. 最後に

今まで映画を見てきて、多くの作品に感銘を受けてきた。友情、恋愛、戦争などテーマは様々なものであった。しかしどの分野にわたっても感銘を受け新たに考えさせられることが多々あった。これからも、もっとたくさんの映画を見て自分の見解を広げていきたいと思う。

⑧学んだこと：これまでこの作品のおおまかなあらすじ、そして自分が得たもの・自分に起きた変化について個人的な意見をまとめてきた。簡潔に自分が得たものと起きた変化を述べると、

①スポーツを通じて人種問題という偏見を超えた人間関係が周りの人々にまで影響を与えたということ

②アメリカにおける黒人差別問題についてより現実的に理解できたこと

③私が特定の人種の集団に対して不確かな固定観念を持っていることに気づいたこと

主にこの３点を学ぶことができた。これらのことは今まで私が生きてきて、意識をしていなかったことである。この作品を見て新しい発見ができた。自分自身の成長にもつながり、より広い見解をもつこともできた。今後この作品を見て学んだことをいかして、より広い視野を持って生きていきたい。

⑨SUMMARY

I learned mainly three points below from this work

1 To realize that people were influenced by human relations between black and white people through the sport, American football.

2 To understand about the racial discrimination in America more realistically.

3 To realize that I have an uncertain stereotype of some racial groups.

参 考 文 献

Boaz Yakin 監督 『タイタンズを忘れない／吹き替え版』

http://www.simpson-bruckheimer.com/rememberthetitans/rememberthetitansstory.htm

http://www.simpson-bruckheimer.com/rememberthetitans/rememberthetitanscast.htm

トニ・モリスンから学ぶ生き方

山　根　志　保

①英語タイトル：The Way of Life to Learn from Toni Morrison
②英語名： Shiho Yamane　③所属： 科目等履修生　④　　⑤
⑥
⑦本論を書くにあたっての関心事： フロンティアスピリット・差別問題・他の人が成し得なかったことを志した気持ち

Ⅰ．トニ・モリスンについて
Ⅱ．人種差別
Ⅲ．女流作家として
Ⅳ．夢を持つこと

興味をもった理由：女流作家というだけでもなかなか受け入れられるのが困難であった時代に、黒人に対する差別意識のあるアメリカで、黒人女流作家がどのように自分の作品を世に広めていったのか、どのように人々に受け入れられていったのかに興味をもった。そこから目標を持って強く生きる力を学びたいと思った。

Ⅰ．トニ・モリスンについて

トニ・モリスン（Toni Morrison, 1931－）は、黒人女流作家です。彼女が生まれた1931年は、黒人の奴隷制度こそはなかったものの、やはり黒人に対する差別はありました。その中で彼女の両親はそれを物ともせず懸命に働き、また差別を気にすることなく振舞うほど前向きでした。そんな両親の姿を見て、彼女自身も自分が黒人であることを誇りに思いながら育っていくのです。もちろん彼女自身差別を目の当たりにすることもありましたが、それでも彼女は黒人だけの社会にとどまらず、白人も生活する場所へ足を踏み入れてゆくのです。

彼女は大学卒業後、教師になりました。やがて大学教授となり、小さな頃から読書が好きだったため、その大学の文芸グループに入ることにしました。そのグループでは毎月会合があり、その際、その月の担当者が自分の書いた作品を持っていき発表するという活動を行っていました。この頃のモリスンはまだ「書くこと」にはさほど興味がなく、会合にぎりぎり間に合う、という中で作品を作るといったくらいでした。

そんな中、彼女は結婚し息子を産み、その後も教授を続けますが、第二子を身ごもった

あとに辞めます。そしてその頃に家族三人でヨーロッパ旅行に行きますが、そのときに旦那との関係がこじれ、結局離婚することになってしまいます。その後、子供二人を育てるために編集の仕事に再就職しました。

そこでは教科書を扱うことがあり、その教科書を見て、いまだに黒人に対する差別があるということを感じました。そのときに「黒人差別をなんとかしたい」という感情が彼女の中に生まれ始めたのです。またこれと同じ頃、一人で子供を育てている中で孤独を感じることも多く、子供が寝静まった後に文章を書き始めました。これがモリスンの作家人生の始まりと言ってもよいでしょう。

そして彼女は1970年に『青い眼が欲しい』でデビューしたのでした。これは、白人文化に自分たちが吸収されてしまわないようにという彼女の気持ちが詰まった作品であり、当時には衝撃的な内容でした。また、1981年には『タール・ベイビー』で黒人社会の中級階級化による価値観の分裂を述べ、1988年には『ビラヴド』で奴隷時代の苦しさゆえに逆に希望が見出せたことを示し、黒人男女からの共感を得たのでした。また、この作品では人生愛についての美しい描写がありました。

Ⅱ．人種差別

モリスンはしばしば、白人と黒人の二分化について触れていました。アメリカにはたくさんの移民が押し寄せ、その中にはヨーロッパ系、アジア系もたくさんいました。それにもかかわらず、差別されるのは黒人だけ、他は皆「白人」という言葉でまとめられ、その人たちがどこの国の出身なのかはさほど関係なく扱われていました。それに比べ、黒人は肌が黒いということだけで差別されてきたように思います。ヨーロッパ人たちは開拓地アメリカで自分たちが優位に立つために、さらには黒人の力を知った上でそれを恐れ、肌が黒いという自分たちとの“違い”につけ込んで、黒人を抑制し続けました。しかもその差別は本当にひどいものだったと思います。「奴隷」という言葉が存在する自体おかしなことだと思いませんか？人を人でないように、まるで物や道具であるかのように扱う。そんな時代があったことをとても悲しく思います。本当に人間の汚い部分だと思います。

先日、ベルギーのブリュッセルに旅行に行きましたが、そのときにおもしろいことがありました。ベルギーでは黒人はもちろん、アジア系・トルコ系・アラブ系・インド系などヨーロッパ以外のさまざまな人種の人たちも生活していました。ベルギー人もそういったいわゆる移民の人たちも、その人が何人であるか、ということには一切意識を置いておらず、ベルギーに住む同じ人間としてみていました。実際、私も私の母も、街角で道を聞かれることがしばしばあり、街頭インタビューまでさせられそうでした。ベルギーではその人の出身や国籍は一切関係なく、そこに住む同じ仲間という意識が強く見られ、それこそが人間のあるべき姿ではないかと感じました。

また、パリに行ったときの話ですが、パリにも移民が実にたくさんいました。植民地時

代の名残なのか、ベルギーよりもさらに黒人の多さが目立ちました。また、パリではインド系やアラブ系の人たちが自身の民族衣装を着ているのも目立ちました。パリは大きな街で人口も多いので、ブリュッセルよりもさらにその人が何人かということは気にしないように感じました。

今でこそこのようにいろいろな国の人が共存することが当たり前の国もあるようになってきましたが、日本ではまだ差別とまではいかなくとも、日本人以外に対する目というのが存在すると思います。「外人」という言葉が存在するように、日本人以外の人を見ると目をそらすのはよく見受けられる光景です。これは今後の日本の課題ではないかと考えます。

Ⅲ. 女流作家として

モリスンはまた、当時には珍しい女流作家でした。女性が文章を書くことが認められなかったというのもひとつの差別ですね。彼女が執筆を始めた頃も、まだ女流作家は敬遠されており、モリスン自身も自分を作家と認めることには抵抗を感じていたようです。しかし彼女はもう書くことから離れられなくなっており、編集の仕事を非常勤にし、主に作家活動を行うようになります。

もちろん彼女の作家人生は初めからうまくいったわけではありませんでした。特に白人からの批判は相次ぎましたが、彼女の作品は評価されて雑誌等にも載るようになり、白人で彼女を支持する人もたくさんいました。その人たちによってトニ・モリスンの作品、そして彼女自身も救われたのです。

やはり彼女が書き続けたこと、そして彼女を応援し支え続けた人、そのどちらもがなければ前へ進むことはできなかったでしょう。モリスンは女性ですが、彼女が書く文章は「文章」であり、それは男性が書こうと、女性が書こうとなんの違いもないはずです。そこにある違いは、誰が書いたのかということだけであり、それは個人の問題なのです。こういう場合に、作った人は関係なく、良いものは良いということの大切さを感じます。

このように、人種差別にも、男女差別にも負けずに、自分を信じて、そして周りの人を信じたモリスンの作品は次第に人々の心に染み込んでいき、ついには1993年にアメリカの黒人では初めてのノーベル賞を受賞します。これは作家界の革命と言えるほどの出来事ではないかと思います。

前例のないことをするのは勇気がいるし、特に差別される側の人がそれをすることはもっともっと勇気も力もいることだと思います。それをやったモリスンはやはり偉大な人物だと思います。彼女は自分を過信したり、ひけらかしたりすることもなかったのですが、彼女の生き方は、自分に誇りを持つこと、自分というものを持つこと、あきらめないこと、夢を持つこと、そういうことを教えてくれる気がします。

Ⅳ. 夢を持つこと

トニ・モリスンの生き方は、私たちに光を与えてくれます。

人は人と違うことを嫌う反面、自分というものを持ちたがるということもあると思います。人は皆それぞれ違うし、だからいろいろな考えの人がいて、その結果考え方の合わない人というのが出てくるのも仕方のないことだと思います。しかし、だからといってその人を差別するだとか、その人を否定するというのは間違っています。周りに合わせてしまうこともよくないと思いますが、他人を認めることは人生において非常に重要な役割を果たすのではないかと考えます。

モリスンは黒人で、しかも女性で、その当時の作家としては不利な立場にあったと思います。でもそんな逆境の中でも彼女は書くことをやめませんでした。彼女は、伝えたいことを文章の中に込めました。「黒人差別をなんとかしたい」という彼女の強い気持ちが人々の心に届いたのでしょう。時代が移り変わっていく中で、彼女の存在は間違いなく黒人差別に変化をもたらしました。

そのひとつの目標のために文章を書き続けること。それは並大抵の努力ではできないと思うし、また彼女一人では成し得なかったことかもしれません。彼女の熱意が、そしてそれを応援する人たちすべての力によって、黒人差別はなくなっていったのだと思います。

夢を持つこと、そしてその夢をあきらめないことを彼女は教えてくれました。

⑧学んだこと：彼女は私たちに人生のお手本を示してくれたと思います。周りから差別され、しかしそういった状況の中でも必ず仲間がいること、そしてその仲間が支えになってくれることを知りました。また、自分を信じること、自分のことを誇りに思うこと、これには自分がどれだけのことができるのか、ということではなく、どれだけ力を注ぐことが出来るのかということが大切だと思いました。

⑨Summary : I think she showed the model of the life to us. She was discriminated because she was the black. However, she had a many friends in this situation by all means and it was they that supported her. I think it is important for us to believe and proud of ourselves. In addition, it is also important that how much energy can we concentrate on something.

参考文献

『現代作家ガイド４　トニ・モリスン』　木内徹　森あおい［編著］彩流社（2000年）
『パラダイス』　トニ・モリスン　早川書房（1999年）

ミュージカル

～人を魅了し続けるもの～

鶴　崎　和　寿

①英語タイトル：Musical ; Long-run Fascinator
②英語名：Kazutoshi Tsurusaki ③所属：欧米言語文化講座 英語圏
④　　⑤　　⑥

⑦論文を書くにあたって：ミュージカルの作り出す世界。ミュージカルを観る前と観た後の変化。ミュージカルの魅力とは。観る側と演じる側からミュージカルを考える。ミュージカルを文学として捉える。

I．はじめに

日本では、劇団四季などをはじめとして多くの劇団がある。しかし、これでもまだまだ数は少ないほうで、アメリカやイギリスなどではさらに数多くの劇団が存在する。その中でもミュージカルのメッカとなっているのが、ニューヨークのBroadway（図１）、そしてロンドンのWestendである。また、アメリカにはBroadwayの他にも、Off・Broadway、Off・Off・Broadwayが存在し、アメリカでのミュージカルの人気の高さを示している。

ミュージカルは一見、文学ではないように思えるかもしれない。しかし、ミュージカルには脚本や歌詞があり、その点を考えると文学であるといえるだろう。また、歌詞が無いので文学といえるのか、と思われるような作品もある。例えば、『*Stomp*』や『*Blueman Group*』（図２）のような楽器のみで行われるものだが、これらもその音楽の中にストーリー性が感じられる。言葉がないにも関わらず、ストーリーを伝えられるなんて、ミュージカルの持つ力のすごさに驚くとともに、伝えようとする気持ちこそが大事なのだと教えてくれる。

図１：Times Square in N.Y.

このように様々なミュージカルが存在するが、テレビや映画といったように

多種多様なエンターテイメントがある中で、なぜ今なおミュージカルが人々の心をつかみつづけているのだろうか。その魅力を、ミュージカルの持つ力や歴史を通してみていきたいと思う。

図２：Ｂｌｕｅｍａｎ

Ⅱ．ミュージカルの軌跡

ミュージカルとオペラの違い、その答えをはっきりと答えられる人はそう多くはないと思う。実際のところ私も、この違いは単に、オペラは高級なもので、ミュージカルは庶民的なもの程度しか考えていなかった。これについて調べると、違いがはっきりと答えられないのも仕方がないのかもしれないと思った。何故なら、ミュージカルはもともとオペラから発展したものであるからである。そこで、ここからはミュージカルの成り立ちについて述べていきたい。

ミュージカルのもともとの起源は先ほど述べたとおりオペラであり、これがアメリカ独自の文化となるミュージカルへと進化していったのである。しかしながら、そんなアメリカンミュージカルも常に栄光の時代を歩み続けてきたわけではない。１９６０年代にはベトナム戦争の影響により、ミュージカル界は後退し始めたのである。ミュージカルをさらに広めるために行われていたシネマミュージカルもまた同様である。戦争は様々な面に影響をもたらし、決してメリットと言えるものは何もないのだ。

そんな中、１９８０年代に入ると、ミュージカルが確立されてからずっとミュージカルの中心地はブロードウェイであったが、アンドリュー・ロイドウエーバーの『キャッツ』（*CATS*）や『オペラ座の怪人』（*The PHANTOM of the OPERA*）クロード・ミッシェル・シェーンベルグの『レ・ミゼラブル』（*Les Miserable*）といったイギリスのミュージカル作品が台頭し始めた。ミュージカルにおいて最も権威を持つトニー賞もイギリス作品ばかりが受賞するようになり、ブロードウェイ生まれのミュージカルが後退していくのであった。そんな存在感が薄くなってしまったアメリカンミュージカルも、『クレイジー・フォー・ユー』（*Crazy for You*）のリバイバル公演によって復活するのである。そして今にいたっている。

ブロードウェイがアメリカでとても愛される存在であることを象徴する出来事がある。それは９．１１の同時多発テロの際、娯楽関係施設はすべて完全に

ストップした。しかし、ブロードウェイはなんとその２日後に公演を再開したのである。メジャーリーグや映画、金融市場が６日後に再開されたのに比べると異例の早さである。その理由は、ニューヨークの人々を元気づけようとするブロードウェイの想いからだ。もちろん、娯楽関係が中断されていたので、儲け時だと考えたことも理由の１つであろう。しかし、それだけのパワーを持っているとはやはりミュージカルの持つ力の大きさには驚かされるばかりである。

Ⅲ．ミュージカルの魅力とは

私は以前シカゴでミュージカルを観たことがある。私にとって初めてのミュージカル鑑賞であり、そのとき観たのは『ウィケッド』（*Wicked*）であった。これは、『オズの魔法使い』（*The Wonderful Wizard of Oz*）の物語の裏に隠された、２人の魔女の友情についての物語である。もちろん役者たちの言葉は英語であるためすべて言葉を理解できるわけではなく、むしろほとんど理解はできていなかった。しかし、言葉が理解できなくても、大袈裟ではなく本当に、劇場内の雰囲気やミュージカルの迫力でストーリーがなんとなく理解できてしまうのである。そして、ストーリーが進むにつれて、私は劇場内のなんともいえない雰囲気にのみ込まれていき、普段過ごしている世界とはまったく別の世界にいるような感覚になったのをよく覚えている。私のこの経験のように、まったく違う空間に入り込めるという点が、ミュージカルにおいて最大の魅力であると思う。この時、ミュージカルを含め、人の心を打ったり、気持ちを伝えたりすることに言語は関係ないのだ、と感じた。

また、これは友人の話なのだが、もう一つの魅力としては、同じ演目であっても観るたびに違うミュージカルになっているということである。このように、何度観ても飽きない、それどころかさらによくなっていたり、前とはまた違う世界にいけたりするのであろう。だから何年間もロングランを続ける大ヒット作品が生まれるのだと思う。

先ほど述べた友人だが、彼は俳優を目指しており日々練習に励んでいる。今度は彼に演じる側としてのミュージカルの魅力とは何か、という質問をしてみた。彼の話によると、ミュージカルの中では違う自分になることができ、そのおかげでより大きく感情を表現できることが何よりの魅力だという。このように普段の自分では表現できないことがミュージカル内ではできる、といった点は演じる側もさぞ気持ちいいであろう。そういったミュージカルは、演じる側と観る側を含め、劇場内に全くの異世界を作り出し、劇場にいるすべての者を魅了し続けているのであろう。

ミュージカルの作り出す異世界に入れることで、普段の生活の中での嫌なこ

とも、悲しいこともその世界の中ではきっぱり忘れられる。そして、劇場を出たら現実世界に戻るが、何かすがすがしいというか、「さぁ明日から頑張ろう」というような活力がもらえるのだ。だから、疲れた時やストレスが溜まった時などに気分転換に行くのもいいかもしれない。

このように、人々に感動と活力を与える力はミュージカルの強みであり、だからミュージカルは、本当にすばらしい芸術であり、文学なのである。私は将来、教師を目指しているのだが、ミュージカルのように、学校の楽しさや感動などを与えながら、子どもたちをひきつける教師になりたい。その為にも、何か自分にしかない魅力をもった人間でありたい。

⑧学んだこと：人に気持ちを伝えることに言葉は必ずしも必要ではなく、むしろどれだけ伝えようとする気持ちがあるかである。気持ちが大事だという点においては、たとえ言語が同じであっても変わらない。
自分にしかない何かをもつことの重要さ。それがその人の魅力になるのである。
⑨Summary in English：

・When you tell your thought, languages are not always so significant. Rather than them, you need much zest you try to tell.

・The importance of gaining something special which is your attraction.

参 考 文 献

喜志 哲雄 著 『ミュージカルが《最高》であった頃』(2006年・晶文社出版)

http://www.geocities.co.jp/Hollywood-Theater/6572/musical-rekishi.htm

http://www.tv-asahi.co.jp/ss/118/world/top.html

http://tick.skr.jp/musical/whois.html

Stand By Me から見る思春期像

山 地 宏 幸

① The Adolescent Image Seen in *Stand By Me* ② Hiroyuki Yamaji
③ 欧米言語文化講座 英語圏 ④ ⑤
⑥
⑦ 生涯の友人とはどのような存在か・何に向かっていけばいいのかという迷い・少年たちはなぜ社会に反抗しようとするのか

Ⅰ.『スタンド・バイ・ミー』

ⅰ.原作者

スティーヴン・E・キング(Stephen Edwin King)は 1947 年に米国メイン州ポートランドでスコットランド人とアイルランド人を祖先に持つ父ドナルドと母ネリー・ルース・ビルズベリーの間の第二子として生まれる。本来はホラー作家でるが、ホラー以外の作品に対しての評価も高い。

代表作に『シャーシャンクの空に』(*The Shawshank Redemption* 1994)、『グリーンマイル』(*The Green Mile* 1996)、(*Stand By Me*)などがる。

ⅱ.映画 *Stand By Me* について

監督：ロブ・ライナー 製作：アンドリュー・シェインマン 脚本：レイナルド・ギデオン ブルース・A・エヴァンス 音楽：ジャック・ニッチェ 撮影：トーマス・デル・ルース

公開：米 1986 年 8 月 8 日 日 1987 年 4 月 18 日

出演：ウィル・ウィートン、リバー・フェニックス

余談だが、現在『２４』に出演している、キーファ・サザーランドも出演している。

ⅲ.はじめに

私は中学校時代の大半を世間的に言うところの不良、ヤンキーとして過ごした。ひょんなきっかけから、中学三年の半ばぐらいから勉強し、無事、そこそこの高校に進学することができ、現在大学に通っている。最近 *Stand By Me* を見たところ、共感ができる部分が多く、昔が懐かしく感じられた。中でも最後にでてくる“私は 12 歳のころに持った友人に優る友人を持ったことがない”というセリフが非常に印象的でこのレポートを書くことにした。

iv. 作品の概要

1986年公開。この映画の原作はスティーブン・キングの中編小説『恐怖の四季』(*Different Seasons* 1982)の中のひとつ、「死体」(The Body)である。物語の舞台となるのは、キングがよく使う架空の町キャッスルロックであり、映画ではオレゴン州、原作ではメイン州となる。

大まかな話としては、町の若者が汽車にひかれて死んでしまい、その死体が放置されているという噂を聞いた4人の少年たちはその死体を見つければ町のヒーローになれると思い、死体を探しに行くというものである。非常に単純な話ではあるが、その小さな冒険の中で、登場人物である4人の多感な思春期らしい言動、行動、心理、そして友情といったものがたくみに描かれている。そして、このころの少年達(おそらくは誰しもそうであろうが)の早く大人になりたい、大人になってみたいという純粋な思いがあちこちにみてとれる。

v. 煙草を吸う4人

物語の序盤に小さな隠れ家で煙草を吸っているシーンがある。煙草というものは中学生ぐらいの年頃の少年達にとっては一種のステータスのようなものと考えられる。その年頃というのは自分が大人なのか子供なのかよくわかっておらず、煙草を吸うことで自分は大人なのだ、子供ではないのだ、ということをアピールしているように思える。私も昔はことあるごとに仲間とコンビニや公園にたむろし、味すらもよくわからぬ煙草を吸ったり、酒を飲んだりしたものである。社会への反抗と、よくメディアなどで耳にするが、その表現はどうなのだろうと思う。経験から考えると、社会への反抗などそんなだいそれた理由で不良などするやつはいないと思う。つまりは、そうすることが楽しいのである。中学生にもなれば、常識的にやってはいけないことは昔から耳にたこができるほど聞いてきた(煙草、酒は、二十歳になってから、喧嘩はしてはいけない、など)ので、本当はやってはいけないことぐらいは心得ているのだが、そのやってはいけないことをみんなでやるということはとてもスリリングで楽しいものだった。教師に追い回されるのは日常茶飯事だったし、夜中に煙草を吸っていたところを警察に見つかり、禁煙講座なるものを警察署でうけさせられたりもした。しかし、教師をからかいながら逃げたり、警察をまくったりするのはやはり楽しかった。怒られるのはわかっているのに授業中の学校の廊下を自転車でよく走り回っていた。追いつけるはずもないのに走って追いかけてくる先生たちを見るのはなんともおかしいものだった。

Stand By Me の4人もやはり同じなのではないだろうか。主人公の一人であるゴーディ・ラチャンスは親から仲間と縁を切るように言われるシーンが何度かあったが、縁をきるはずはない。それは、アメフトのスター選手であった兄の死を境に親から相手にされなくなった自分の存在意義を見出せるのはその4人グループの中でだけだったからだろう。

vi. 死体探しへの冒険

4人のうちの一人、バーン・テシオの情報からどうやら電車にひかれた若者の死体が放置されているらしいと聞き、それを見つければヒーローになれると考え、4人は死体探しへの

冒険に出る。有名な４人が線路の上を歩いていくシーンも見られる。最近、某大学の学生がこれを真似て線路の上を歩いていたところ捕まったというニュースを見た。

左からクリス・チェンバース、テディ・ドチャンプ、バーン・テシオ、ゴーディ・ラチャンス

Ⅱ.大人になるということ

人生というものは大なり小なり、多くのイベントを通じて大人へと近づいていくものだと思う。また、そのイベントを通じて友人と親しくなっていくのだと思う。この作品を見てそう確信した。ゴーディが年上の不良グループに拳銃を突きつけるシーンや、クリスがゴーディに自分の進路や学校で起きた盗難事件のことについての悩みを打ち明けるシーンなどから見て取れる。私たちの立場に置き換えて考えてみようと思う。中学になると学ランが半ズボンから長ズボンに変わる。半ズボンから長ズボンに変わっただけでも、自分は中学生になったのだ、もう子供じゃないのだと意識する。小学校では考えられなかった恋愛というものも出てくる。また、修学旅行や集団宿泊学習などで普段話さないようなことを友達と話したり、自分たちで主体的に活動する機会が多いこういった行事ではその活動を通して無意識のうちに友達と親しくなり、大人に近づいているように思える。高校になると文化祭や体育祭も自分たちの手で作っていかなければならなくなり、恋愛も少し本格的なものになってくる。このように大なり小なりのイベントを通し、少しずつ大人へ近づいていく。あの頃とは違うのだと昔の自分と今の自分を比べ、少し大人になった気分になる。普段、私は、「俺の心は１７歳やけん。」と冗談交じりで口にするが、あながち冗談ではない。どうしても自分が成人を迎えたとは考えられないのだ。大学に入ってもう少しで三年経つが、自分が大人だと意識できるイベントがなかったからだろう、とこの作品を見ながら実感した。取り分け、この短い冒険は、子供が成長するイベントが多く含まれているように思える。

ⅱ．１２歳の頃に持った友人

この物語は成長して、小説家となったゴーディが弁護士になったクリスが刺殺されるというニュースを新聞で見て、昔を思い出すという始まり方で、最後も成長したゴーディの“私は12歳のころに持った友人に優る友人を持ったことがない”のセリフで終わる。

冒険の最後はゴーディ以外のほかの三人が消えていくような描写で終わり、“上の学校に上がると新しい友人もでき、すれ違いざまに挨拶をかわすぐらいになってしまった。”のセリフとともに回想が終わる。このシーンも非常に印象的だった。私も中学校時代あれだけ一緒にいた不良仲間も高校に進学したとたん、いや、最初のうちは連絡を取り合ったりもしていたが、進学して少し経つと、連絡も取らなくなり、彼らが何をしているかわからなくなった。いつも一緒にいたのは５人か６人ぐらいだろうが、今でも連絡をとっているのはそのうちの一人だけなのだから、不思議なものである。噂であいつがああなった、こうなったというのは、耳にしていたが、あまり気にも留めなくなっていた。成人式で久しぶりに会った時、昔の親友たちと距離を感じた。中学を出て仕事を始めた者、もう堅気ではなくなってしまった者といろいろいたが、もうみんな大人だなと感じた。私よりもずいぶん早く社会に出たみんなはいろいろ大人になる経験を積んだのだろうなと思った。

作者が書いた“私は12歳のころに持った友人に優る友人を持ったことがない”という言葉はそのときの友人が一生、無二の親友になるというのではなく、12歳の頃出会ったからこそ12歳の頃の親友に成りえたという意味であろうと私は解釈している。私もそうであるが、中学時代には親友だと感じていても今はやはり違うなと思う。

その時々の親友というのは部活動や受験勉強など、不良行為もそうかもしれないが苦楽をともにした友人が親友になりえるのだなとこの作品を通じて感じた。実際、今親しい友人はそういう苦楽をともにしてきた友人たちである。

⑧ この作品を通じて学んだこと

人は人生で起こる様々なイベントを通じて大人になっていくと学んだ。そう考えると、今の自分は無駄な時間を過ごしていると思う。残りの大学生活を有意義に使いたいと思った。友人というものがどのような存在か改めて考え直した。

⑨ SUMMARY: I learned we grow up through many events which happen in our lives. According to this idea I noticed that I was wasting my time now.
I reconsidered what friends are.

ティム・バートンの魅力

馬　越　由　佳

①The World of Tim Burton
②Yuka Umakoshi
③欧米言語文化講座　英語圏
④
⑤
⑥
⑦ティム・バートン監督の映画は、子どもから大人まで幅広く親しまれている。彼の作る映画の魅力は、どこにあるのか。なぜ彼の作る映画はおもしろいのか。

Ⅰ．ティムバートン（Tim Burton）の人生

1958 年 8 月 25 日、カリフォルニア州バーバンクで二人兄弟の長男として生まれる。

12 歳から 16 歳にかけてティムは、同じくバーバンクに住む祖母のところに引越し、その後祖母が所有していたガレージの上の小さな部屋に移り住んだ。9 年生のときに、廃棄物汚染防止のためのポスターをデザインし地域の作品展で一等賞を取り、その絵はバーバンクのごみ収集車の側面に飾られていたこともあった。

1976 年 18 歳の時に、ティムはウォルト・ディズニー（Walt Disney）が創立したカリフォルニア州ヴァレンシアにある大学、カリフォルニア・インスティテュート・オブ・ジ・アーツ（California Institute of the Arts）に奨学金を得て入学した。本大学は将来のアニメーターを養成する場として、ディズニー・スタジオによって前年に設置された学科があった。

1979 年ティムはディズニーに参加し、コンセプチュアル・アーティストとし

て働いている間に、執行部のジュリー・ヒックソンと、創作開発課のトム・ウィルハイトに出会う。彼らの力添えで6万ドルを与えられたティムは、1982年お気に入りの児童作家スース博士を招いて書いた詩を基にしたストップモーション・アニメの短編『ヴィンセント』(*Vincent*,1982)を製作した。『ヴィンセント』は多くの評論的称賛を受け、シカゴでは2つの賞を、フランスのアヌシー映画祭では評論家賞を受賞した。

やがてディズニーを去ったティムは、『ピーウィーの大冒険』(*Pee-wee's Big Adventure*,1985)を監督することになる。この時起用した、作曲家ダニー・エルフマン(Danny Elfman)はティムの生涯の友人となる。またティムは熱狂的な『ゴジラ』ファンとして有名であり、この作品にゴジラとキングギドラを登場させた。同年、『ヒッチコック劇場』(*Alfred Hitchcock Presents*)の1作品『ザ・ジャー』(*THE JAR*,1986)の監督を担当。翌年、『世にも不思議なアメージングストーリー』(*Amazing stories*)では『ファミリー・ドッグ』(*Family Dog*,1985)のアニメーションデザインを担当、このエピソードはその後シリーズ化されティムは製作総指揮を務めることとなった。

Ⅱ. 本格的長編映画の始まり

その後、ティムは脚本家のサム・ハムと共にワーナー・ブラザーズから提案された『バットマン』(*Batman*,1989)の脚本に取り組み始めていたが、スタジオは脚本執筆の進展を見守っているうちに、企画のゴーサインを出すのを渋るようになった。

そうこうしているうちに後に渡された『ビートルジュース』(*Beetlejuice*,1988)の脚本のほうが先に進み、1988年に公開されアカデミー最優秀賞メイクアップ賞も受賞した。

この作品の大ヒットにより、『バットマン』製作の許可がおりた。公開後、10日間で1億ドルを突破する最初の映画となり、最終的には5億ドルを超える結果となった。

次の映画『シザーハンズ』(*Edward Scissorhands*,1990)の主役には、エドワードにジョニー・デップ(Johnny Depp)を起用した。これがティムとジョニー・デップとの出会いである。後にジョニー・デップはティムのことを「本当の友」と称している。

ティムは、『バットマン』を「親しみのもてない自作映画である」と告白した

が、後に作られた続編の『バットマン・リターンズ』(*Batman Returns,*1992)では公開後 3 日間で 4770 万ドルの収入をあげ、最終的には世界中で 2 億 6800 万ドルの総収益をあげた。

その後も『ナイトメアー・ビフォア・クリスマス』(*The Nightmare Before Christmas,*1993)、『エド・ウッド』(*Ed Wood,*1994)、『バットマン・フォーエヴァー』(*Batman Forever,*1995)、『スリーピー・ホロウ』(Sleepy Hollow,1999)、『ビッグ・フィッシュ』(*Big Fish,*2003)、『チャーリーとチョコレート工場』(*Charlie and the Chocolate Factory,*2005)、『ティムバートンのコープスブライド』(*Corpse Bride,*2005)、など数々の作品を手がけてきた。

『ティムバートンのコープスブライド』では、CG が全盛期のなか、静止している物体を 1 コマ毎に少しずつ動かして撮影し、あたかもそれ自身が動いているかのように見せるストップモーション・アニメーションという技法を使って撮影しているが、ストップモーション・アニメとは思えないほどのリアルな動きだ。

Ⅲ. 最後に

ティム・バートンの映画はなぜおもしろいのか。私は、ティム・バートンの人生から何を得たのか。

『ティムバートンのコープスブライド』や『チャーリーとチョコレート工場』といった作品は、一見コミカルである。しかし、登場人物はどこか物寂しい雰囲気をもっており、コミカルだけれどコミカルでない。そのバランスが素晴らしいと思う。また、色の使い方も非常にうまい。『ティムバートンのコープスブライド』では、生と死の世界を描いていたが、死の世界のほうが明るい色が使われていた。また、『スリーピー・ホロウ』では、ハリウッド映画としてはめずらしいほどに、2 時間の間に何人もの首をバサバサと切り落としていった。首の切り口もなまなましかったが、逆にそれを観客は期待しているのではないだろうか。

ティムは、特にB級ホラー映画・カルト映画を偏愛していることでも有名である。彼の作る作品はどこかそのような雰囲気をもっている。

彼は一つ一つの作品にこだわりをもって作っている。それは、『ティムバートンのコープスブライド』でストップモーション・アニメを用い、妥協しなかったところからもわかるだろう。しかしそれだけでなく、私は彼の作品、特にアニメーション作品には彼の愛情もつまっていると感じた。彼はもともとディズニーに参加していたこともあり、彼のアニメ映画はどこかディズニーを思わせる。彼の愛するオカルトなテイストを作品に含ませたり、ゴジラやキングギドラを登場させるところには、彼の作品への愛着を感じる。

私がティム・バートンの人生から得たものは、こだわりをもつ、ということだ。彼が『バットマン』の続編を製作することに乗り気ではなかったように、この先自分の好きなことばかりやれるわけではない。しかし、彼の望む作品を製作してきたように、自分の好きなことができるときもある。どんなときでも、妥協せず、こだわり、そして自分らしさを取りいれる、ということが彼の映画の魅力であり、私が学んだことである。

⑧学んだこと、得たもの　ティム・バートンは決して彼が望む作品ばかりを製作してこれたわけではないが、どの作品にもそれなりにこだわりがある。したくない、と思うことでも自分らしさとこだわりをもって取り組むことが成功につながる、ということ。
⑨英語サマリー　Tim has made many hit movies.　He never compromised on how to make movies and he always has much concern with his works. If I always do my best,　I can get success.

参考文献

http://www.geocities.co.jp/Hollywood-Kouen/3520/timf.html
http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%A1%E3%82%A4%E3%83%B3%E3%83%9A%E3%83%BC%E3%82%B8
http://homepage1.nifty.com/sountolab/timpro.htm

映画『8 MILE』から学んだこと

～超える、超えないは自分しだいだ～

古賀　亮

① 英語タイトル：What I was influenced from the movie “8 MILE”
② 英語名：Ryo Koga
③ 所属：欧米言語文化講座 英語圏
④
⑤
⑥
⑦論文を書くに当たっての関心事：人生観、努力、音楽

Ⅰ.はじめに

今回、論文を書くにあたって、なぜこの作品を選んだのかを簡単に説明したいと思います。私は音楽を聴くことが好きで、これまでさまざまなジャンルの音楽を楽しんでいました。しかしながら、ヒップホップだけはなぜか敬遠していたのです。完全に「食わず嫌い」なのだと思いますが、全く興味がわかなかったし、第一に、ヒップホップのあの独特な文化がどうも苦手でした。そんな私でも、アメリカのみならず世界中で大ヒットのヒップホップ界のカリスマ「EMINEM」の自伝的な映画である、この『8 MILE』(2002年製作) のことは高校時代から知っていて、なんとなく気になっていました。「8 MILE」とは何なのか、ヒップホップの世界はどんなものなのか、そして主人公はどんな生き方をしているのか。この映画を見ることによって、何か新しいものを得ることが出来そうな気がしていました。とても興味深い作品だと思っていながら、なかなか見る機会が無いまま時間が過ぎていたのですが、そんな時に、今回の論文を書くことになり、ちょうどいい機会だからこの映画を見てみよう、と思ったのがきっかけでした。

Ⅱ.EMINEMとは？

1972年10月17日生まれ。本名マーシャル・″ブルーズ″・マザーズⅢ。幼い

頃から極貧の環境に育ち、12 歳の時までカンザスシティとデトロイトを母親と共に 2、3 ヶ月ごとに転々と過ごす。友達もできず、いじめられ、自殺未遂も経験する。悪環境の中、自然とアフリカ系アメリカ人層やヒップホップに親しむようになる。14 歳ごろから本格的に MC として活動しはじめ、黒人優位のヒップホップ界において、白人ながらいくつもの MC バトル・コンテストに挑戦する。

99 年に『ザ・スリム・シェイディ LP』をリリースし、メジャーデビュー。全米ポップス・チャート初登場 2 位、全世界で 600 万枚を超えるセールスを記録。そのアルバムからは「マイ・ネーム・イズ」というグラミー受賞曲も生まれる。2000 年、セカンドアルバム『ザ・マーシャル・マザーズＬＰ』は、1 週目セールスが 176 万枚を突破、ソロ・アーティストとしての 1 週目売上げ記録 1 位を樹立、初登場以降 8 週連続全米 1 位を達成。全世界で 1700 万枚以上を売り上げる。'01 年 2 月に行われたグラミー賞 ・では 3 部門の受賞。2002 年リリースのサードアルバム『ザ・エミネム・ショウ』は初登場以降全米チャート 5 週連続のトップを独走。2004 年、4 枚目のアルバム『アンコール』をリリース。

これまでに 6,500 万枚のワールド・アルバム・セールスを誇る。主演映画『8 Mile』は、全米興行成績初登場 No.1、第 75 回アカデミー賞ベスト・オリジナル・ソング受賞。

↑ **EMINEM**（公式 **HP** より）　　↑『**8 mile**』（**DVD** のパッケージより）

Ⅲ.あらすじ

この映画は、ヒップホップ界のカリスマ、EMINEM（エミネム）の半生をもとにつくられた作品です。舞台は１９９５年のミシガン州デトロイト。当時のデトロイトは、自動車工業で栄えたかつてとは異なり、すっかり荒廃していた。

主人公のジミー・スミス Jr.はラップで成功することを夢見ている白人の若者である。ほとんど毎日仲間たちとつるんで、遊んだり、バカをやったりしていた。ある日、ガールフレンドと別れ、アパートを追い出された彼は、自動車のプレス工場で働きながら、無職の母親と幼い妹と共にトレーラーハウスで貧しい暮らしをすることになる。ヒップホップのクラブ「シェルター」では、毎週、勝ち抜きのラップバトルが行われていた。ジミーの仲間の一人がこのバトルのMCをしており、ジミーはこのバトルに優勝して、スカウトされ、プロとしてデビューすることを考えていた。ラップの実力は十分のジミーだったが、バトルでは力を発揮できないまま終わることが続いていた。黒人優位のラップの世界において、白人であるジミーは大きなプレッシャーに立ち向かわなければならなかったのである。そんな状況だったので、失敗して自信を失うことも少なくは無かった。ある日、仕事先のプレス工場でモデルを夢見ているアレックスに出会う。二人は恋に落ちたのだったが、アレックスは、成り上がるために別の男と関係を持ってしまい、それを知ったジミーは、大きなショックを受けてしまう。そんな中、裏切り、貧しい暮らし、差別、暴力、といった逆境を跳ね返し、自分の道を切り開くべく、シェルターでのバトルに再び挑戦する。ステージ上で巧みな言葉を放ち、オーディエンスを味方につけ、順調に勝ち進む。そしてついに優勝を果たすのであった。

Ⅳ.作品の背景

ｉ.『8MILE』の意味するものとは

この映画のタイトルである『8 MILE』とは何を意味するものでしょうか。その答えは、ミシガン州デトロイトに実在する「8 mile road」にありました。この一本道によって、白人と黒人の居住地区がはっきりと区別されていました。8マイルロードを境に北側の地区には白人が、南側の地区には黒人が住んでいたのです。エミネムは、映画のメイキング映像の中で「8マイルはデトロイトの境界線だ。俺が育った頃は人種の境界線でもあった。黒人と白人を分離する明確なラインだ。」と述べています。エミネム自身は、8 マイルロードの南側の黒人の居住地区に暮らしていました。このことについて、エミネムは「ラッパーには重要なことだ、デトロイト側に育つということはね。ヒップホップの世界ではデトロイト側がホンモノで郊外はニセモノと見なされる。ヒップホップを知

らない人には関係無い話だ。意味も無い。でも関わっているヤツにはデカい。」と話しています。映画の中では、いつの日かデトロイトで成功をおさめて 8 マイルロードをこえる、という目標にむかうジミー。8マイルロードは、ただ単に人種の境界線を表しているだけではなく、「夢を達成するために超えなければならない大きな壁」を表しているのではないのでしょうか。

この映画の監督、カーティス・ハンソンは、同じくメイキング映像の中で「題名の『8 MILE』は我々が伝えたかった世界をまさに表現する言葉だった。」と述べています。

↑8 mile road（メイキング映像より）

ii.ヒップホップの世界

この映画を見る上で必要なヒップホップ独特の文化について触れておきたいと思います。まずは、ラップについて。ラップは、リズムに乗せて言葉を並べていく、という音楽のジャンルなのですが、ただ言葉を並べればよいだけではないのです。韻を踏んだり、風刺をしたりと、さまざまなテクニックを織り交ぜ、音にリリック（歌詞）を乗せていくものなのです。

次に、ラップバトルについて。この映画の中で重要なシーンでもあるラップバトルは、フリースタイル（ある程度即興でのラップ）で、いかに相手を攻撃できたのか、観客の反応で勝敗を決め、勝ち抜き方式で次の対戦に進んでいく、といったものです。リリックで相手を攻撃し、攻撃されたらやり返す。これを即興で行うものなので、かなりのテクニックを要するものです。エミネムは、ラップバトルについて、メイキング映像の中で「バトルは二人のラッパーのさしの勝負だ。タイトルをかけて言葉の巧みさを競う。もっと意味のある競り合いというか、人生をかけた戦いさ。負けたらこの世の終わりって感じ。みんなはこういう“大したことじゃない”、“またやればいいさ”そんなんじゃない。

人生が終わった気分だ。客が何人だろうと一度マイクを握ったら必ず裁かれる。負けたら諦めたっていい。でも負けは強烈だ。リベンジもありえる」と述べている。

元々、ラップは黒人の文化であり、ヒップホップ界では黒人優位が続いている状況です。映画の中でも、主人公が白人だということで、差別を受けたり、リリックの中で攻撃の材料にされたりする場面が見受けられます。このような黒人優位の世界で、白人が成功をおさめるというのはかなりすごいことであるといえます。

V.作品より学んだこと

この作品から、主人公のジミー、エミネムの生き方から学んだ大きなことは、さまざまな逆境にも負けず、自分の夢を追い求める姿勢です。ただ自分の夢をかなえる、というだけでも決して容易なことではありません。それなのに、主人公ジミーは貧しい暮らし、人種差別、裏切り、といったさまざまな逆境の中で、自分の夢をかなえてみせたのです。私は作品を通し、このジミーの生き様に魅せられてしまいました。

現在、私は自分の夢に向かって大学生活を送っているのですが、ジミーの生き様を目の当たりにし、自分はかなり甘いのだということに気づかされました。現在の自分の状況を考えてみると、別に裕福なわけではないですが、特に不自由することも無く、これといって困難な状況におかれているわけでもありません。自分の夢のために特にこれといった努力をしていないというのも事実です。夢に向かう姿勢の違いを、自分の情けなさを知ることができました。

エミネムは、映画のメイキング映像のインタビューの中で「誰もが越えたいと思う境界線を持っている。誰にでも”８マイル”はあるのだ。超える、超えないは自分しだいだ。」と述べています。まさにその通りだと思える言葉で、この言葉が心に響きました。誰にだって夢はある。その夢に到達するまでの道のりはおそらく長く、険しいもので、いつしかその道の途中で自分にとっての「８マイルロード」にぶつかるでしょう。そこであきらめてしまうのか、絶対にあきらめず挑戦し続けるのか。私は絶対に後者でありたいと思うのです。これからの人生、必ず自分にとっての「８マイルロード」にぶつかることになるでしょう。そんなとき、どんな逆境であろうとも乗り越えられる、そんな人間になりたいと思いました。

この映画を見る前は、正直、ラップをやるような人間はならず者だ、ただか

っこつけてチャラチャラしているだけの人間だ、という様な偏見を持っていました。しかしながら、映画を見ることで、ヒップホップの世界に生きる人々の有様を垣間見ることができ、「かっこいい」と思えるようになりました。このように、映画には、ただの娯楽としての役割だけではなく、自分の視野を広げてくれる、自分の人生観を良い意味で変えてくれるという側面があると思います。これからも、たくさんの映画に出会い、さまざまなものを得ていけたら最高だと思いました。

⑧学んだこと：
・逆境に負けずに夢に向かう姿勢
・ヒップホップのかっこよさ
⑨SUMMERY
I learned mainly two things: to do the best in order to be what I want to be in the future and the coolness of hip-hop culture

参考資料

『8 MILE』 DVD ユニバーサル・ピクチャーズ・ジャパン
EMINEM 公式 HP http://www.universal-music.co.jp/u-pop/artist/eminem/
Wikipedia http://ja.wikipedia.org/wiki/EMINEM

ペイ・フォワード

～トレヴァーから学んだこと～

田中　絵美

執筆者データ: ①英語タイトル PAY IT FORWARD ～What I Got from Trevor～
②英語名 Emi Tanaka　**③所属** 文化研究専攻欧米言語文化講座 英語圏
④　　**⑤**　　**⑥**
⑦この論文を書くにあたっての関心事 ペイ・フォワードで世界を変えることは可能なのか　どんな人間もほんとうに優しさを持っているといえるのか　誰にでもペイ・フォワードは実行できるのか　なぜ主人公は死ななければならなかったのか　原作と映画に共通している独特な手法が与える効果とは　原作と映画のどちらがおすすめか

Ⅰ. 作品紹介

この『ペイ・フォワード』には、キャサリン・ライアン・ハイド（Catherine Ryan Hyde1955,－）というアメリカの作家が書いた 2000 年の原作と、その原作をもとに作られた映画とがある。後者はアメリカでは 2000 年 10 月、そして日本では 2001 年 2 月に公開され、『ディープ・インパクト』のミミ・レダーが監督、『シックス・センス』『AI』等で天才子役の地位を確立したハーレイ・ジョエル・オスメントが主演していることもあり、おそらくこちらの方が有名であろう。私自身もこの論文を書くにあたって、調べてみて初めて原作の存在を知った。実は全世界でベストセラーになっており、日本語訳を手に入れて読んでみると、原作と映画とではかなり違いがあることがわかった。

↑日本版 DVD のパッケージ

原作は文庫本でも４００ページ以上であるのに対して、映画は１２３分におさまっていて、原作のエピソードがいくつか省かれていたり、細かい設定が変わっていたりする。ボリュームから言えば、じっくり考えさせられるのは原作の方かもしれないが、私個人の感想としては、映画もよくできていて、必要不可欠な要素や作り手が伝えたいことはしっかり描かれていると思う。また、主人公のトレヴァー役を演じたハーレイ・ジョエル・オスメントは、１０人中１０人が素晴らしいと評するような演技をしているので、原作は読みたく

ないという人にも、映画はぜひ見てほしい。そして、“ペイ・フォワード”というシステムを知れば、きっと誰もが優しい気持ちになれると私は信じたい。

Ⅱ. ペイ・フォワードとは

では、そのペイ・フォワードとは一体なんなのか、それを説明したいと思う。

物語の舞台は1990年代前半、カリフォルニアの小さな町に住む12歳（映画では11歳）のトレヴァーという少年が主人公である。ペイ・フォワードとは、彼が社会科の授業で新任教師から出された自由研究、「世界を変える方法を考え、それを実行しよう」という課題の答えとして考え出したものであった。そのシステムは非常に単純明快で、１人が３人の人間に何か親切をし、その親切を受けた人は、相手にではなく、また別の３人に親切な行いをする、というものである。親切にした人が、恩返しは自分ではなく、他の３人に代わりにしてあげてほしいと頼むのである。こうすることで、以上の図のように“善意の輪”を広げていこうというのである。

トレヴァーの計算によれば、この計画の１６段目には４３０４万６７２１人の人間が他人から親切な行いを受け、もう何段か進めばその数は世界の人口を上回るものになる。この途方もない計画の成功の鍵は“人を信じること”である。なぜならこれは、自分が親切をした相手が、善意を次の人たちへ渡してくれると信じてこそ成り立つものだからである。しかし、そんな些細な信頼ですら成り立ちにくいのが今の世の中であり、これは『ペイ・フォワード』の舞台であるアメリカだけでなく、日本にも言えることである。私自身もこの物語に登場する多くの人と同様に、「こんなのうまくいくわけがない」と疑わなかったわけではない。しかし大切なのは、ペイ・フォワードが実現するかどうかの議論ではなく、そこから何を学ぶか、少しでも何か自分によい変化を与えられるか、ということではないだろうか。

Ⅲ. ペイ・フォワードはどのように広まっていったのか

では、この夢物語のような計画がどのように発展していったのかを、原作のストーリーを軸に述べたいと思う。

ペイ・フォワードは、この計画を思いついた主人公トレヴァーが、実際に3人の人に対して親切な行いをしたことから動き始めた。その3人は、彼にきっかけを与えた社会科教師のルーベン・セントクレア(※この人物は映画では少し設定が変わって、名前もユージーン・シモネットとなっている)と、路上生活者のジェリー、そして近隣に住むグリーンバーグ夫人である。

トレヴァーはまず、ルーベンを、トレヴァーの父親であるリッキーに逃げられた自分の母親アーリーンに引き合わせ、二人の仲をとりもとうとした。ルーベンはベトナム戦争で片目を失った黒人であり、アーリーンはひどい男であるリッキーを忘れられず、女手ひとつでトレヴァーを育てながら、アルコール中毒になってしまっていた。トレヴァーはそんな心に傷を負った2人に幸せになってほしいと考えたのである。2人はいくつもの障害を乗り越えて、最終的には夫婦になる。これはトレヴァーがはじめに考えた3つのことのうち、最も複雑で無謀なことのように思えた。しかし、2人のことを本当に好きだった、彼の子どもらしい純粋な発想であった。そしてその後、ルーベンとアーリーンは、150万ドル以上のお金を寄付するなどして、ペイ・フォワードを実行する。

路上生活者のジェリーにトレヴァーがしたことは、彼が定職に就くために身なりを整えられるよう、お金を渡したことである。しかもそのお金は、トレヴァーが新聞配達で稼いだ自分のものなのである。このエピソードには確かに無理があるかもしれない。自分を犠牲にしてまで他人に、それも素性の知れない路上生活者に親切にできる人なんてほんとうにいるのだろうかという疑問を抱かずにはいられない。しかしトレヴァーはこう言っている。「すごいことなんてしなくていいんだ。ぜんぜんね。相手にとって役に立つことだったら、それでいいんだ。必要なことは、それぞれちがうんだからね。」トレヴァーの望んでいることは、親切を受けた人が犠牲を払ってまで別の人に恩返しをすることではなく、ただその人のできる範囲内で“いいこと”をすることなのである。ジェリーは後にトレヴァーの期待を裏切り、再び麻薬に手を出して路上生活者に戻ってしまうが、飛び降り自殺をしようとする人を助けるという形で、ペイ・フォワードを実行していた。トレヴァーはジェリーが逮捕されたと知った段階で、自分の計画のスタートの3分の1は完全に失敗に終わったと思っていたのだが・・・。

ペイ・フォワードには決して悪人を善人に変えてしまうほどの力があるわけではない。ただ、ごく一部を除いて、どんな人間も心の中に持っているであろう、隠れた優しさを引き出すことのできるシステムだと考えられる。ストーリーの中に、暴力的な男や薬物中毒の男、刑務所に入っている男がペイ・フォワードを実行するエピソードが盛り込まれているのは、筆者がそういうことを伝えたかったか

らだと私は思う。

そしてトレヴァーは、新聞配達先のグリーンバーグ夫人には、年老いた彼女の代わりに、大切な庭をきれいにしてあげた。このエピソードは映画には全くなかったもので、グリーンバーグ夫人はトレヴァーを心から応援し、自分も必ずペイ・フォワードを実行するとトレヴァーに約束していた。そして、自分の死が間近に迫っているのを感じたとき、遺産をどうしようもない自分の息子にではなく、自分のことをいつも気にかけてくれたスーパーの店員たち3人に分配する手続きをしたのである。その後、グリーンバーグ夫人はすぐに亡くなってしまったため、トレヴァーはまたもやペイ・フォワード計画が失敗したと思った。しかし、後に、クリス・チャンドラーという記者によって、自分の知らないところでこの計画が大成功していたのを知ることになるのである。

Ⅳ. ペイ・フォワードの成功はどのように伝えられたのか

この作品には、原作にも映画にも共通の興味深い構成が見られる。それが、ちょうどペイ・フォワード運動とは逆行するように、1人のある記者が運動に関わった人々を順番に訪ねていくというものである。彼の名前はクリス・チャンドラー。原作でも映画でも、彼の行ったインタビューがところどころに散りばめられており、さまざまな人たちのそれぞれ異なった視点から、『ペイ・フォワード』は描かれているのである。原作者のキャサリン・ライアン・ハイド自身も「たしかに、この書き方はちょっと変わっているわね」と認め、こう説明している。「いろんなキャラクターの頭の中に入り込んでいかなかったら、ほんとうは人はみんな同じなんだっていうことがわからないんじゃないかしら。(中略)これは、本の中に登場する何人かの架空の人物の身に起きた、ただのお話なんかじゃない。わたしたちみんなの話なのよ。」

記者のクリスが調査を始めたきっかけは、彼が自分の車がエンストして困っていたときに、見知らぬ男から車をプレゼントされたという一件であった。クリスは世の中がいい方向に変わっていくのを感じ、その真相をつきとめようと動き出した。そしてそのような“親切な行い”が広まっていった順序をさかのぼって、挫折しそうになりながらも、いよいよトレヴァーのもとにたどり着くのである。

レポーターである彼のはからいによって、トレヴァーは一躍有名人になる。その頃には各地にものすごい勢いで広まっていたペイ・フォワード運動の発案者として、テレビ出演したり、クリントン大統領にホワイトハウスに招待されたり、みんなでお祝いしたり・・・すべてがうまくいっているように思えた。しかし、トレヴァーは、まだ自分は計画を果たせていないと考えていた。路上生活者のジェリーがペイ・フォワードを実行したのを知らなかったために、彼の代わりにもう1人、助けを必要としている人を探していたのである。

V. 主人公はなぜ死ななければならなかったのか

そして、この物語は最も悲しい結末を迎える。あと1人を助けるために、トレヴァーがとった行動は、複数の人間に囲まれて暴力を振るわれている弱い者を助けることであった。原作ではギャングが起こした騒動に、映画ではいじめの現場に、トレヴァーは迷わず飛び込んでいった。その中の1人にナイフで刺されるとも知らずに・・・。この結末には批判の声も多い。トレヴァーの努力を知ればもちろん誰もがハッピーエンドを思い描くであろうし、失敗を乗り越えてやっと報われたのだから、今度こそほんとうの幸せを、と願う。

やはり物事はそんなにうまくはいかないということだろうか。私はそれも、作者の狙いだったのだと思う。人はどうしても、うまくできすぎた話に疑問を持ち、リアリティを見出しにくい。そこで、最後に落とし穴を作ることで、大多数の読者や観客をぐっと引きつけることに成功した。もしもこれがハッピーエンドなら、それほど心には残らない作品になっていたかもしれないと私は思う。メッセージ性を強めるには、主人公の死が、1番効果的だったのだろう。それでも、やはり映画でハーレイ・ジョエル・オスメントが演じたトレヴァーはほんとうにきれいな瞳をしていて、彼の最期のシーンではやるせない気持ちにならずにはいられない。

原作ではトレヴァーの追悼式に、町じゅうと町につながる高速道路が大渋滞になるほどの人が集まった。各地からペイ・フォワードによって救われた人々がおよそ2万人。その模様は世界で放送された。その報道の力によって、運動はさらに広まっていくのである。集まった人々はろうそくを持って、ペイ・フォワードを実行することを誓い合った。

VI. 誰にでもできるペイ・フォワード

ペイ・フォワードの説明をするために、トレヴァーの行ってきたこと、そしてその結果をこれまで述べてきたが、やはり彼のような純粋で優しい少年がいるはずがないという意見が、大多数であろう。私自身もその1人であるが、私はそんなことはさほど重要なことではないと考えている。**私はこの『ペイ・フォワード』という作品を通して、「優しさをケチらないでおこう」という気持ちになることができた。**たいがいの人は、親切なことだとわかっていても、少し手間になったり、自分の利益にならなかったりすることは避けて通ることが少なくないのではないか。例えば、お店に行って商品が床に落ちているのを見ても、自分が落としたわけではないからと、見て見ぬふりをしたことはないだろうか。自分は暇なのに、忙しそうに家事をしている母親を手伝わなかったことはないだろうか。人のためにできる些細なことは、どこにでもあるはずである。物語ではなく現実に、「自分以外の3人に恩を返してほしい」と言うのは難しい。でも、そう言われなくても、誰だって誰かに優しくされたら自分も温かい

気持ちになって、同じように人に優しくふるまえそうな気がするのではないだろうか。

これを読んだ人には、ほんの少しでいいから、ペイ・フォワードという計画を記憶の片隅に残しておいてほしい。そして、今まで出し惜しみしていたかもしれないと気づくような親切な行いがあれば、それを実行してみるのもいいかもしれない。

⑧学んだこと：1人の純粋な少年が失敗にもめげず、最後まで人の善意を信じて成し遂げたペイ・フォワード。この運動を通して、人に親切にすることの意義を今まで以上に強く感じた。そしてこれからは、ちょっとした優しさを出し惜しみせずに過ごしていこうと思った。

⑨Summary: The movement of "PAY IT FORWARD" was established by one boy who kept on showing his kindness sincerely to others. I think it's simple and important to be kind to others and I should not spare myself to do a small act of kindness.

【参考文献】

キャサリン・ライアン・ハイド／法村里絵訳『ペイ・フォワード』角川文庫 2004年

http://www.awaji-net.com/pay-forward/

http://www.watch.impress.co.jp/movie/column5/2001/09/07/

←日本公開版映画のポスター

『A.I.』を通して学んだこと－技術発展への憧れと危惧－

守田静佳

①英語タイトル： Longing and Misgivings of Technological Innovation through *A.I.* ②英語名：Shizuka Morita ③所属：欧米言語文化講座　英語圏 ④
⑤　　⑥
⑦論文を書くにあたっての関心事：２００１年での未来予想・機械と生き物・ロボットが感情を持つことについての見解・技術が進歩していく中での感情面における発達・母子の愛・命について

Ⅰ．この作品について

科学技術は今日私たちが生活を営んでいく上で欠かすことのできない存在となっている。技術の進歩により人間は便利さ、豊かさを手に入れた。技術はどこまで進歩するのだろう。人間が空を自由に行き来する、それはすこし以前までは、ほんの空想の世界であった。しかしそれが今では、すぐにも現実になるのではないかという期待を持ってしまうほどに、技術革新は進んできている。そしてこの期待と、隣り合わせの危惧を描いた作品が『A.I.』である。

この映画の主演は、天才子役と呼ばれたハーレイ・ジョエル・オスメント（Haley Joel Osment, 1988- ）であり、監督はスティーブン・スピルバーグ（Steven Spielberg, 1947- ）である。元々スタンリー・キューブリック（Stanley Kubrick, 1928-1999）が監督を務めるはずだったのだが、監督が死去してしまったためにスピルバーグが代わって監督をつとめた。本作品の公開は２００１年だが、原作はブライアン・オールディス（Brian W. Aldiss, 1925年8月18日 - ）の１９６９年のＳＦ小説『スーパートイズ』（*Super Toys*）である。

本作品のストーリーをなぞりながら、その中に描かれている私たち現代を生きるものへのメッセージを発見し、またそれらに関する現在の諸問題、未来への不安や危惧を明らかにしていきたい。そしてこの発見により得たものを私の成長のステップとしたい。

DVD版『A. I.』

Ⅱ．あらすじ

人間は家事や仕事全般を担う様々なロボットを生み出していた。そしてついに愛情をもつ子供ロボット、デーヴィッド（David）が開発される。

デーヴィッドの母親として、子供が昏睡状態のモニカ（Monica）が選ばれたが、彼女は最初反発する。しかしつきまとうデーヴィッドに愛着が生じ、モニカが自分を母と慕うよう設定を行なった。一度設定したら解除はできない。手放せば、デーヴィッドは破壊されるというものである。

デーヴィットに自分を母親と認識させるモニカ

しかし、まもなく実の息子のマーティン(Martin）が奇跡的に回復して家に戻ってきた。デーヴィッドに嫉妬するマーティンは意地悪をし、うまくのせられたデーヴィットは悪さをしてしまう。デーヴィッドがいつか危害を加えるかもしれないと思い、モニカはデーヴィッドを森にドライブに連れ出し、置き去りにした。

デーヴィッドは反ロボット集団に捕まりそうになるもなんとか逃げる。彼はピノキオの話を聞いており、青い妖精が人間にしてくれると信じていた。自分がロボットだったから捨てられたのであって、人間になれば母モニカはまた自分を愛してくれる…。そこで物知りロボットのノウ博士に質問したところ、『ロボットが人間になるには』という著書のある博士のことがわかった。その博士を訪ねるため、ヘリコプターをジャックしてマンハッタンに向かう。しかしマンハッタンの街はもはや水没しており、高層ビルの上部のみがかろうじて顔を出している状態であった。そのわずかなビルの中の一室が使われているのをデーヴィットは発見する。そこに侵入すると、いたのは自分と同じロボットで、しかも全員がデーヴィッドと名乗っていた。そこは彼、デーヴィッドが造られたところで、同じようなロボットがたくさんあったのだ。それを見たデーヴィッドは、どうしても受け入れることが出来ずに海中へ飛び込んでしまう。

デーヴィッドは、飛び込んだ海底で青い妖精を見つけた。彼は一旦乗ってきたヘリで海底に潜り、コニーアイランド（遊園地）の妖精の像を見つめて祈った。デーヴィッドはひたすらに祈り続け、ヘリのライトが切れてもやめなかった。しまいにはデーヴィッドも動かなくなったが、その瞳は妖精を見つめたままだった。

それから２０００年の時が過ぎ、マンハッタンの海は氷結し、宇宙人が部分的に掘削していた。そしてデーヴィッドと青い妖精も掘り起こされる。宇宙人が手をかざすとデーヴィッドは動き出した。

デーヴィッドが抱きしめると青い妖精は崩れ去った。信じ続けた青い妖精の崩壊にショ

ックをうけるデーヴィット。宇宙人は彼の記憶からデーヴィットの家を再現してくれた。そして彼の持っていたモニカの髪を渡すと、モニカを再生してくれた。しかし宇宙人の技術をもってしても、再生された者は一日しか生きられない。

デーヴィッドは生まれてから一番幸せな一日を母と二人きりで過ごした。そして母が眠るのを見届け、自分も眠りについた。

Ⅲ．本編で感じたこと

この作品には大きく分けて２つの主題が存在する。ロボットと愛情である。感情、特に愛情は通常生物にのみ存在するものである。とは言っても無生物に感情を与えるという行為は、昔からおとぎ話の中でさんざん行われてきた。その点から見ればこの作品も一種のおとぎ話なのだろう。

Ⅰ．で述べたとおり、この物語の原作が発表されたのはおよそ４０年前。これは非常に興味深いことである。先ほども述べた通り、無生物に感情を与えることは４０年どころか、更に以前から描かれている。勿論ロボットもその中に登場しているだろう。しかしこの作品の興味深い所というのは、感情のあるロボットに焦点をあてて物語を描いている事である。私自身、この作品を見るまで、ロボットが感情を持つということの深刻さ、複雑さを考えたことはなかった。

ｉ．ロボットと感情

確かにロボットが感情を持つということはとても便利なことである。これまで人間でなければできなかった仕事も、ロボットが感情を持つことによって代替が可能になる。例えば家政婦やベビーシッター。日常の家事や子守りというのは精神的にも肉体的にもなかなか大変な仕事である。しかしこれらをロボットが代行可能になれば、彼らは疲れて動けなくなったりストレスで病気になったりしない。人間のように弱くもない。育児に疲れて子どもに暴力を振るったり、お年寄りの介護を放棄したりという事件が深刻化してきている世の中、彼らはこの一種の社会現象を解消してくれる頼もしい存在になりうるだろう。

けれどもそれが本当に良いことなのだろうか。これは本編中の私たちに対する問いかけの一つである。描かれている世界は本当に便利そうで、不可能も可能になっていて、あらゆる部分に心惹かれる。しかし一方で、そこにはそれら感情あるロボットも簡単に破棄される世界が広がっている。感情のあるロボット、この生物と無生物の二つの側面を併せ持った、実際には非常に難解な存在を人々は自分の都合の良いように生物にも無生物にも扱っているのである。元々は機械、スイッチを切ればそれは金属の集合体に過ぎない。現実においての使い捨て文化を示唆しているようにも感じられた。

ii．愛情

一口に愛情といっても様々であるが、この作品は母子間の愛情を題材としている。本編で主役のデーヴィットは愛情を持つ初めてのロボットという設定になっており、母親・モニカに愛されたい一心であれこれする姿は正に人間の子どもそのもので非常に愛らしく、そして切なくて胸をうたれる。最初はデーヴィットからモニカへの一方向の想いであったが、その姿に母性本能をくすぐられてかモニカもデーヴィットを愛し始める。一方向の愛が双方向に変わった瞬間、それまでのデーヴィットの健気さが報われた事に対して安堵し、とても心が温かくなった。やはり母と子の愛というのは本当に無償の愛なのだと感じた。しかし、その心の温もりは長くは続かなかった。結果的にモニカはデーヴィットを捨てることになるのだから。しかも自分たちの勝手な都合で捨ててしまうという、一番あってはならないパターンだ。これに対しては怒りを覚えたけれども、捨てた際の悲痛そうな面もちのモニカ、両目に涙を浮かべながらデーヴィットの元を去った彼女の姿を見ると、これが苦渋の選択であったことは容易に理解できる。確実に破棄されるのがわかっている場所ではなく、どこかで生き延びる可能性がある山中にデーヴィットを置き去りにしたのは、彼女のデーヴィットに対しての愛が断ち切れていない証拠であろう。捨てたことについては理解を示したくはないが、その時の感情については、思わず自分を重ねてみてしまった。期間がいくら短くとも、愛した息子を置き去りにするなんて。本当に耐えられない。胸が張り裂けそうになった。

捨てるならば買うな、育てられないならば産むな。 単純なことである。しかし現実で、幼児虐待やネグレクト、乳幼児捨棄等の問題は絶えない。何と残忍であり無責任な話であろうか。新聞やニュースでこのような事件を目にすると悲しくなる。人間に関わらず、命というものはそんなに軽く扱って良いものではない。だから保護者・保有者としての責任は大きいのである。捨てられた側の気持ちになることができたらそんなこと恐ろしくてできないだろう。

Ⅳ．命の軽視について

“命”を軽視する事に対しての危惧は以前から浮上していた。科学技術は発達を重ねているけれども、それに反比例するように人の感情は衰退していっているのではないか…。これに対し、深刻化しすぎた問題を何とか払拭しようといろいろな活動が起こり始めている。最近では日本の小学校の道徳教育の見直しが進められ、命の重さ・大切さを子ども達にしっかり伝えようという動きが見られる。はっきりとした成果は出にくいだろうし、仮に出たとしてもずっと後の事になるだろうが、この世に生を受けて生きていく人間としては非常に大切な問題である。

科学技術の進歩は、豊かでありたい、そう願う人々の“感情”から生まれたものである。

この“感情”が逆に私たち人間の感情を消してしまわないように、人間と大差ないロボットまでもが簡単に破棄されていくような、そんなモラルのない未来を迎えることのないように私たちが次の世代を担っていかなければならない。

⑧学んだこと、得たもの：ロボットが感情を持つことにより、生活はより便利になるが、感情あるものを破棄するという残忍なこともできるほど人間の内面は衰退していく。この技術への依存の恐怖。そして、母親と子どもの愛という普遍的愛情の尊さを再認識した。外面よりも内面が豊かな人間でありたい。
⑨英語サマリー：In the future, robots will have feelings. To be sure that it makes our lives more convenient, but in contrast, our feelings will be poorer than they are now. People may become cruel enough to throw away robots which have feelings. This is a fear of deep dependence on technology and belief in it. Moreover, I had a new understanding of the preciousness of universal love between a mother and her children. I hope that people will regard others as wealthy from what one is rather than what one has.

参考資料

・『ARTIFICIAL INTELLIGENCE:A.I.』Warner Bros.
（２００１年日米同時公開，２００２年３月 DVD 発売）
・Yahoo!映画－A.I. HP: http://moviessearch.yahoo.co.jp

『不都合な真実』
—脅かされる私たちの地球—

池田　真利子

①タイトル：*An Inconvenient Truth* in Our Environment
②名前：Mariko Ikeda
③所属：文化研究専攻欧米言語文化講座　英語圏
④
⑤
⑥
⑦論文を書くにあたっての関心事：世界の環境問題と原因・アメリカ社会における大統領の位置づけ・映画タイトルにある“不都合な真実”とは何か・京都議定書とアメリカの対応・国別の問題意識の違い

I. 映画について

作品名：*An Inconvenient Truth*　(2006年アメリカで公開、パラマウント映画)

日本では翌年『不都合な真実』というタイトルで公開。

監督：デイビス・グッゲンハイム (Davis Guggenheim)

製作総指揮：ジェフ・スコル (Jeff Skoll)

内容：この映画は、地球温暖化問題に熱心に取り組んできた元アメリカ副大統領アル・ゴア (Al Gore, 1948～) のスライド講演の様子をドキュメンタリー化したものである。アル・ゴアの生い立ちを辿ったフィルムを交えつつ、瀕死の状態にある地球の現状を訴えるこの映画は、全米公開後大ヒットし、多くの観客に影響をもたらしている。過去の気象データや、温暖化の影響を受けて衝撃的に変化した自然のフィルムを提示し、この問題を直視しない政府の姿勢を批判する。大統領選の落選後、ゴア氏は世界中を回って環境問題に関するスライド講演を続けてきた。生活の中での環境を守る努力の重要さを主張するゴア氏を追った映画である。また、第79回アカデミー賞においては長編ドキュメンタリー映画賞・アカデミー歌曲賞を受賞した。その後、ゴア氏はIPCCとともに2007年のノーベル平和賞を受賞。

興味を持った理由：京都議定書にアメリカが調印していない一方で、環境問題の深刻さを訴えるアメリカ映画が話題となり、実際のアメリカ社会での衝突に興味を持ったから。また、映画のタイトルに惹かれたから。“不都合”の意味、そして“真実”とは何かが知りたいと思ったから。

アル・ゴア（Al Gore, 1948～）
IPCC とともに 2007 年ノーベル平和賞受賞。

“One of the most important films of our time”
と記された映画ポスター

II. 映画の魅力

この映画に出てくる資料は、地球環境の深刻さを伝えるものばかりである。過去 1000 年間の地球の平均温度推移、過去と現在の氷河の様子、カトリーナなど急増するハリケーンや日本での台風災害などである。また最高気温を記録している地域の出現、降水量の異常な変化、中国での大洪水、アフリカでの干ばつと水不足の悪化、絶滅種の急増など、すべて地球温暖化の影響であるという事実は驚異的である。鳥インフルエンザや SARS の蔓延などは私たちの記憶にも新しい。

私がこの映画に興味を持った理由は、第一に、アメリカが京都議定書への参加を拒否している点である。アメリカ元副大統領であるゴア氏がこのような映画を作成し、環境問題改善を強く主張し大きな反響を呼んでいる一方で、実際にはアメリカは京都議定書を拒否し、環境問題に積極的ではないのが現状である。一つにこの映画が大きく話題となっている理由に、そのデータや推論の誤認や誇大化が批判されている点にもある。環境問題だけではなくブッシュ大統領との衝突、また国内での政治的な問題が顕著である映画ともいえよう。のちにアメリカの環境問題への取り組み、また京都議定書の詳細について述べていきたい。

次にこの映画に惹かれた理由に、そのタイトル“An Inconvenient Truth”が挙げられる。非常に魅力的なタイトルであり“Truth”とは何か、どう“Inconvenient”であるのか、を知りたくさせる。この本当の意味での“真実”が明かされるのは映画後半であるが、ゴア氏が伝えたかった“Truth”とはこの映画の始めから掲載されている切迫した地球の状況すべてであろう。環境問題は多くの政治家や企業経営者が耳を傾けない“不都合な真実”である。これは京都議定書において政府が参加を避けるため改ざんした環境報告書、すなわち改ざんされた地球温暖化を警告する資料、これこそが“An Inconvenient Truth”であると明らかにしたゴア氏の言葉に表される。国益、経済発展が妨げられる真実。これは問題の深刻さを認識していない私たちの利己的な観点である。実際には、人類にとって早急に立ち向かわなければならない真実、であるとゴア氏は主張する。確かに深刻な環境問題は、もうすでに十分私たちの身に降りかかっており、地球が瀕死の状態であるサインは示されているのである。

ゴア氏の印象的な言葉に**“衝撃が与えられるまで人間はなかなか対処しようとしない”**
“物事の結果を描きにくいのが人間である”がある。人間は自分たちの利益ばかりに焦点を当て、本当に見るべき危機に気付かない。これらの言葉は彼の実生活に基づいている。ゴア氏の地球環境問題解決への使命感は非常に強固で、その姿勢には心打たれるものがある。また彼のこの関心のきっかけは、これらの言葉に現実味を帯びさせるのだ。**きっかけは、彼の幼い息子の交通事故で瀕死の重体に陥ったとき“かつては緊急のことに思えていたものが、本当は取るに足らないものだと突然わかった”ことだという。**最も身近な家族の命が危機にさらされたとき初めて気付いたこと、それは一つの命の尊さだけではなく、人間の愚かさだったのかもしれない。緊急のことに思えていた目先の利益より大切なものは、目に見えず、衝撃が与えられて私たちはようやく対処しようとするのだ。病気になって初めて日ごろの健康に気遣う、あるいは交通事故にあってようやく安全運転を心がけるのが私たち人間である。彼の講演中の数々の言葉は決して環境問題を客観的に訴えるものでない。彼自身の問題と認識し、自らの言葉で訴えるのがわかる。自ら危機意識を持った思いが、説得力を持った言葉で視聴者に語りかけるのである。彼のメッセージは日常生活の小さな心がけを訴えるものでもある。わかっていながら目を背けがちなこと。誰でも思い当たるはずである。状況が悪くなってから対処するのではなく日ごろから心がけよ、という彼のメッセージ。宿題を後回しにしてせっぱ詰まったときの私、日々勉強しようと思いながらテスト前にしかしなかった自分に、ずばり必要なメッセージである。同時にゴア氏は、私たちが環境についてできることは、一人ひとりが温暖化について知ること、また日々の暮らしの中で小さな努力を重ねることだと主張する。節電、ごみの分別、車の不使用、エコバッグの使用、リサイクルなど、やるべきことは身の回りにあふれている。そして彼は私たちに「不都合な真実」に真摯に向き合うことを促している。

Ⅲ. 地球環境の実態

次にこれらのゴア氏の言葉を受け、環境問題に対する世界の動き、また私が最も興味を持った京都議定書について、調べたことを述べていきたい。

ｉ．温室効果ガスの排出

まず、アメリカと世界の地球温暖化に及ぼす影響を提示する。二酸化炭素をはじめとする温室効果ガスの排出量に着目すると、世界でその数値は戦後４倍に増加しており、その６割は先進国からである。特に、アメリカ、カナダ、オーストラリアでは大幅な増加を続けており、日本もその一つだといえる。ここで、世界の排出量の内訳は以下のとおりである。（EDMC/経済統計要覧 2007 年度版）

世界の二酸化炭素排出量２６５億トン（2004 年）のうち、アメリカが 22.1%、中国 18.1%、そして日本 4.8%となっており、南北格差が顕著である。

また、一人当たりの排出量の比較は、アメリカ 19.69 トン、オーストラリア 16.98 トン、カナダ 13.79 トン、続いてロシア、ドイツ、イギリス、そして、日本 9.31 トン、世界平均 4.14 トン（米国オークリッジ国立研究所データ，1996 年）

となっており、アメリカ一人当たりの排出量は世界平均の５倍近いことがわかる。また、日本でも世界平均の 2 倍以上を排出している。このように、温室効果ガスの排出量によって地球温暖化への先進国の責任の大きさがよくわかる。気候変動枠組み条約では「共通だが差異ある責任」という言葉を使い、先進国に先に対策をとるよう求めているのである。国別の二酸化炭素排出量の大きな差は、世界の貧富の差、技術の不均衡さを如実に表している。また、限りある資源は確実に先進国の手にゆだねられていることがわかる。人類に共通した環境問題、それは大いに先進国の責任である。

ここで、環境問題対策に関する世界の動きを示す。

ii．世界の動き

1972年　**ストックホルム会議**

国連人間環境会議：会議の議題は　環境（先進国）VS開発（途上国）。採択された決議は、途上国の開発と貿易に対する、マイナスの影響を歯止めする動きである。

1972年　**国連環境計画**（UNEP：United Nations Environment Programme）創設。

1989年～　米ソの冷戦状況の弱まり→国際政治が地球環境問題に向かう。

ガスの排出規制などに消極的だった英仏の突然の政策転換。

1992年　**リオ会議**：「持続可能な開発」の推進→最終的には南北格差の解消が目的。

気候変動枠組み条約締結。国連開発環境会議（地球サミット UNCTAD: United Nations Conference on Environment and Development）、**アジェンダ２１、生物多様性条約**　など、世界規模での取り決めがすすむ。

2002年**「持続可能な開発に関する世界首脳会議」（ヨハネスブルクサミット）**191カ国の参加。開発途上国の開発問題に議論が集中する。

- アメリカの孤立：生物多様性条約署名を拒否。アジェンダ21において地球環境資金および政府援助金の出資を拒否
- 基本的構図は、先進工業国VS後進工業国
- 途上国側；開発発展のためには汚染は必要であるという考え“We want pollution!”

このように、環境問題は今まさに世界で最も深刻、かつ注目されている問題である。環境保全だけでなく、貧富の差、経済発展、貧困問題、とさまざまな社会問題を含んでいる。さて、ここで注目されるアメリカの孤立は、京都議定書への参加拒否が大きなポイントとなっている。

映画でゴア氏が温暖化のすさまじい潜在的能力を述べた後、その解決策として強く主張するのが京都議定書への参加である。2010年までに先進国が炭素排出量を30%削減することを目指す「京都議定書」に世界中が賛成すべきだと。二酸化炭素の排出が世界で最も著しいにもかかわらず、京都議定書への不参加の姿勢をとるアメリカを、ゴア氏は環境破壊型の生活様式であるとまで批判した。これはどういう意味であろうか。アメリカの京都議定書参加の意味とは何だろうか。そこで、京都議定書の概要を示していきたい。

Ⅳ. 京都議定書

京都議定書とは1997年に採択された議定書で、温室効果ガスの削減値を先進国全体で５％とし、先進国の温室効果ガス排出量に具体的な数量制限を設けたものである。2008年～2012年の間に、各国の 1990 年における排出量を基準とした数値に削減することを義務付ける。主要国の削減率は、日本６％、米国７％、ＥＵ８％、カナダ６％、ロシア０％などと定め、全体で5.2%の削減を目指す。これらの削減目標には法的な拘束力がある。京都議定書には、日本やＥＵなど125カ国が批准したが、ブッシュ米政権は2001年にこれを離脱。京都議定書が発効するためには、批准した先進国のＣO2の排出量が1990年時点の55%以上なければならないため、発効ができない状態が続いていた。しかし、ロシアが 2004 年 11 月に批准したことによって、米国抜きでもＣO2の排出量が61%を超えることになり、2005年２月京都議定書が発効した。

ここで問題点は、最大のガス排出国であるアメリカが参加拒否していることである。最も正直な離脱の理由は「国益にかなわず、経済発展が妨げられる」からであるが、アメリカ議会は「途上国に削減義務がないことはアメリカ経済に不利」とし、京都議定書に反対の立場をとっている。相当数の途上国が議定書に参加しなければ批准はできないという姿勢をとっている。その背景には石油業界などが議会に対して強い影響力を持っていることがあるが、現状では、途上国は先進国が先に対策をとるべきだと考えている。先進国のCO2 排出量の３６％を占めるアメリカが参加しない議定書の効力が疑問視されているのである。

議定書においてまた一つ重要な問題は、各国により削減コストが大幅に異なることである。結果、削減の容易な国や工場などで多くの削減を行い、取引することによって社会全体の削減コストを小さくするという考えが主張され、国際的に協調して目標を達成する仕組みとして「京都メカニズム」が導入された。これは柔軟性措置として、主なものに排出権取引があるが、これは各国の削減目標達成のために先進国同士が排出量を売買する制度である。現在、明確な上限枠を設定するかで議論がなされている。しかし、この排出権取引制度は、結局は先進国での国内削減をゆるめてしまうことであり、公平性に欠ける。また、ロシアなどは経済混乱などで排出量が大幅に減少していることから、最初から余った排出の割当量を有している。そのため安く排出権が売買されることによって、先進国では国内での削減どころか増加を容認することになってしまう、と批判されている。ようやく出来上がった二酸化炭素削減目標、これにまたしても目を背けようとする動きが加わっている。要するに、環境問題をお金で解決し、他の国に対策を任せてしまおうという考えである。京都議定書に作られたほんの小さな逃げ道は、今大きな問題に発展している。

環境問題について調べて、自分がいかに環境問題について知らなかったかに気付いた。これほどまでに切迫し、世界でも問題解決にあらゆる動きが見られる一方、先進国市民の問題意識は実に偏っている。ゴア氏のように危機意識を持って強く訴える人がいる一方で、経済発展を優先する人々、問題の深刻さを知らない人々、あるいは自分が無力であると思い込んでいる人々が大半である。一人が節電を心がけたところで大きな変化がないように思われる。しかし、それぞれの協力によって確実な変化を成し遂げられるのだ。これは世界の縮図とも言えるだろう。世界の一つ一つの国の危機意識が偏っているがゆえに、多くの問題が生まれている。京都議定書においても、一国が努力したところで、温室効果ガス排出量最多のアメリカが参加しないことにはその効果が小さいのは明らかである。各国が協調し、地球規模で大きく運動を進めねばならない。ゴア氏が言わんとした不都合な真実、とは環境問題だけではなく、世界中での貧困や経済発展に基づく世界の不均衡さを含めたものなのかもしれない。経済発展や国益ばかりを追求し資源にあふれた私たちが、目を背けがちな世界各国の問題は、温暖化を始めとしていよいよ緊迫し、その解決を訴えている。

⑧**学んだこと得たもの**：日々の生活で私たちは、わかっていながら目を背けたり後回しにしてしまうことがある。人間は目先の利益を優先しがちで、本当に大事なものに気付きにくい。失ったり衝撃を受けてはじめて気付くことが多いのである。ゴア氏が訴える環境問題はその一つである。不都合なことを見てみぬ振りをしてきた結果、地球上の最も深刻な問題になっている。環境問題の困難な点は、実際にはその根底に人々にとって“不都合な真実”すなわち環境問題だけでない貧困や経済発展に基づく世界の不均衡さを含めた問題があることである。経済発展や国益、目前の自分の利益ばかりを追求し、豊富な資源にあふれた私たちが目を背けがちな世界各国の問題。それは、温暖化を始めとしていよいよ緊迫し、さまざまなサインを出して解決を訴えている。

⑨**summary** : *An Inconvenient Truth* focuses on Al Gore and his efforts to educate the public about the severity of the climate crisis. I have learned that what makes the environmental issue complex is the fact that there are many other problems such as poverty, unbalance in progress, and biases of perspectives over the world, to which we have blinded ourselves for a long time. “An inconvenient truth” is not only the environmental crisis, but also all the problems we have to face in the world. In addition, we should realize that we tend to emphasize our immediate profit, and to lose what is really important.

参考文献

気候ネットワーク『よくわかる地球温暖化問題』東京，中央法規，2000 年

杉田　米行　『アメリカ社会への多面的アプローチ』岡山，大学教育出版，2005 年

原　彬久　『国際関係学講義』有斐閣，2006 年

『アイ，ロボット』

～我々と機械はどのように関わるべきか？～

足立　亜衣莉

①英語タイトル：Human Beings and Robots　～How Should We Deal With Machines?～
②英語名：Airi Adachi　③所属：欧米言語文化講座　英語圏　④
⑤　⑥
⑦論文を書くにあたっての関心事：近年、ASIMOなど様ざまな人型ロボットが開発され、色々な場面で役立てようとされているが、実際どのような人型ロボットが今現在開発されているのだろうか。また、そのように私たちの生活の中にロボットが入り込み、人間とともに生活していくことは果たしていいことばかりなのであろうか、ロボットだけに限らず、機械に頼って生活している私たちはこれからどうすべきなのかということに疑問を持った。

Ⅰ，はじめに

私はこの映画を見たことで、機械がいかに我々の身近にあり、役立つものであるかを実感すると共に、我々の現在の機械に頼りすぎている生活の危険性や、人間と人間との生身のコミュニケーションというものの大切さを強く感じることができた。この論文を読んでいただけるのならば、この映画の中で起こることは空想であると考えるのではなく、少しでも自分が生活している現在のことと関連付けて読んでもらいたいと思う。

Ⅱ,映画『アイ，ロボット』(　*i, ROBOT*、2004年日米同時公開　)の内容

舞台は2035年のシカゴ。世界には人型ロボットが当たり前のように人間と共存しており、人々もロボットに大きな信頼を置き、生活の大きな支えとしていた。そんな時、USR(U.S.ロボティックス社)から、更新不要でグレードアップした新型ロボットのNS-5型が発売されようとしていた。

←新型ロボットのNS-5
旧型ロボットのNS-4→

機能やもちろん体つきや表情も新型NS-5のほうがより人間味が増し、人間に親近感を沸かせる風貌となっている。

しかし発売間近の時期にこのロボットの考案者であり、ロボット工学の第一人者である、ランニング博士がUSR社で自殺を図る。そこに呼ばれたのは、ロボット嫌いのシカゴ市警スプーナー刑

事。ランニング博士の死が自殺ではないのではないかと感じ、捜査を始めるスプーナー刑事は、USR主任ロボット心理学者カルヴァン博士に案内され、ランニング博士の研究室へ向かう。そこで、捜査を続けていると、物陰に隠れていたNS-5が飛び出してきた。そのNS-5は全てのロボットに備えられているはずのロボット三原則に従わず、命令に背き逃げていった。しかし、結局そのNS-5は博士殺害の犯人として警察につかまる。スプーナー博士はそのNS-5の取り調べをするが、彼は自分の名はサニーで、自分はランニング博士殺しの犯人ではないという。そこへUSRのロバートソンが現れ、三原則が備わっていないサニーを不良品として処分するために引き取りに来た。サニーの話を聞く中で、サニーは犯人ではないのではないかと思い始めたスプーナー刑事はランニング博士の家に捜査に行く。

博士の家には自動破壊装置が仕掛けられおり、設定時刻は翌朝であったが、破壊装置が誤作動を起こし、中で調査中のスプーナー刑事は家もろともつぶされそうになってしまう。また次の日、調査のためUSR社へ向かうスプーナー刑事は途中にNS-5の集団に襲われ、命を落としそうになる。怪我を負ったスプーナー刑事のもとにサニーのことを話しにカルヴァン博士がやってくるのだが、彼女はそこでスプーナー刑事が機械移植を受けていることを知る。話を聞いてみると、スプーナー刑事は以前交通事故に遭った際にロボットに助けられた経験があるという。トレーラー事故により川に自分ともう一台の車が水没してしまった。もう一台にサラという少女が乗っていたのだが、助けにやってきたNS-4は理論的に判断して生存率の高いスプーナー刑事を助けたのだが、目の前で助けを求めるサラを無視し、自分を助けたNS-4に対して怒りを感じた。それ以来、彼はすべてを理論的に判断し行動するロボットを嫌うようになったのだという。

その後USR社に2人は向かいサニーに話を聞くことに。スプーナー刑事はサニーの話を聞き、話に出てきた場所に向かうとNS-5がNS-4を破壊している光景を目の当たりにした。その頃街中でもNS-5が人間の命令に背いたり、若者たちとロボットの攻防が起きるなど大変な事態となっていた。反抗するロボット達の胸はみな赤く光っており、誰かに操られているようであった。そんな様子を目の当たりにし、スプーナー刑事はカルヴァン博士ともにロボットたちを操っている本元のUSR社へと向かい、社内になんとか忍び込んだが、そこには処分されたはずのサニーいた。カルヴァン博士は特別な機能が備えられているサニーをどうしても破壊することが出来ず、他のNS-5とすり替えていたのだった。三人はUSR社の中を進んでいき、ロバートソンの部屋に着く。そこではロバートソンは死亡しており、操っている犯人はロバートソンではなく、なんとUSR社のコアシステムを担っているVIKIであった。彼女は人間のやり方に不信感をいだき、人間を守るためにはある程度の犠牲は必要であり、私たちロボットが支配していかないといけないと考え、NS-5を操っていたのである。スプーナー刑事らはVIKIに操られ攻撃を仕掛けてくるNS-5達と必死の戦い、逃げ回りながらも、何とかVIKIのシステムを破壊し、NS-5たちの暴走を止めることに成功し、人間世界がロボットに支配されることから守ることが出来たのであった。

この映画を見て、私が第一に感じたことは「ロボットへの恐怖感」である。もちろん現在の世界においては、この映画の中のようにロボット技術が発展しているわけでもないし、人型ロボットが街や家庭に普通に存在しているような状況とは程遠い。しかし、このままロボットの研究が進めば、近い将来こんな状況になりうるのではないかと感じたからである。これは、映画の中だけで起こる空想のことではなく、近い未来私たち自身にも降りかかる問題なのではないかと私は考

える。そしてこれを私たちの未来に対する警告と捉えるべきであろう。また、人間の無力さというものも感じた。このようなすばらしいロボットを開発しときながらも、自分たちが作り出したものに支配されそうになってもなにもすることが出来ない人々の姿を見ると悲しくなると共に、ロボット化・機械化が進む現在の世界に対しても危惧を抱かずにはいられなくなった。

Ⅲ,現在実在する人型ロボット

次に現在我々の住む、この世界に実在するロボットについて調べみた。
ここにいくつかの例を挙げてみる。

ASIMO　2005　(Honda)

IC通信カードを利用し、人を識別し応対・人の位置を特定・人と距離を測定・すれ違う人に挨拶・手つなぎ歩行などが可能。また、視界センサ・床面センサ・超音波センサを駆使して複雑な環境でのスムーズな歩行も出来る。その他、高速走行、高速旋回走行、スラローム走行、ワゴン操作、トレイの受け渡しなどもすることが出来る。

nuvo　(ZMP)

家庭用ロボットで、制御理論により安定した歩行を実現。また、ロボット初の、人間工学に基づく専用シューズ“N－sole”により、衝撃と蹴り出し時の力強いグリップ、安定性がさらに強化される。
歩行の他に、起き上がり・ダンス・挨拶・写真撮影・外出先からの室内確認・音声認識も可能。

wakamaru　(三菱重工)

音声を認識したり、発話するだけでなく、備え付けられた２つのカメラにより人の顔を探し、覚えている人の顔と照合するので、アイコンタクトを伴う会話ができる。また、活動開始・終了時間を所有者が設定でき、また活動の種類もカスタマイズ出来る為、人の手を借りない自立行動をすることが出来る。歩行の際には５つのセンサで障害物を認識し、回避する障害物回避技術が備え付けられている。

上記の例以外にも国内にも国外にもまだまだ多くのロボットが開発されている。まだ、実用化されておらず、開発途中のものも多いし、映画中のように何もかもやってくれるロボットは存在しないが、我々と人型ロボットが生活をともにする日はそう遠くはないだろう。

私は現在実在する人型ロボットといったら、せいぜい2,3種だろうと思い込んでいたので、調べていく中で、その数の多さに驚いた。現在、本当に多くの企業や個人がロボットを開発や研究していることにびっくりし、またそこから人々のロボットに対する関心の強さ・期待の大きさが伺えた。また、テレビでしかロボットが動いていることは見たことはないが、その動きの滑らかさや細かさなど、その技術の高さにはただただ感心するばかりであり、また生で実際にロボットを見てみたいと思った。私が想像していたよりも、人々のロボットに対する関心や期待は大きく、技術も進んでいることが分かり、映画のようにロボットと人間が共存するような世界もそんなに遠いことではないのではないかと思う。

Ⅳ,映画を見て感じたこと・学んだこと

A,機械を信用しすぎると…

この映画を見て思ったことがいくつかある。まず初めに、機械やロボットを過信しすぎるのはよくないということである。この映画の中でも重要になるポイントだが、あまりに人々がロボットは「Ⅰ、ロボットは人間に危害を加えてはならない。また危険を看過することによって人間に危害を及ぼしてはならない。 Ⅱ、ロボットは人間に与えられた命令に服従しなければならない。ただし、与えられた命令が第一条に反する場合はこの限りではない。 Ⅲ、ロボットは前掲第一条および第二条に反するおそれのないかぎり、自己を守らなければならない。」という三原則を破るわけがなく、人間に従わないわけがないと信じて疑わなかったため、人間世界にロボットが氾濫し、あのような事態が起きてしまったのである。しかし、これは映画の中だけのことでなく、実際に私たちの住む日本においてもあてはまることである。最近でいえばシンドラー社のエレベーター転落事故やエキスポランドのジェットコースター事故など機械事故が多発しているが、これらは機械の安全性に信用を置きすぎ、人々が点検を怠ったため起きてしまった事故である。このようにあまりにロボットや機械を過信するあまり不意に起きる事故が、機械に頼れば頼るほど出でくる可能性が大いにあると思うので、あまりにもロボットや機械の能力を過信しすぎず、しっかりと生身の人間が様ざまなこと、特に人間の命に関わること、に責任を持って点検や管理をしていくべきだと考えた。

また、あまりにロボットを過信していると、それを失った時に人々がどう生きていくのかということに不安を抱いてきた。今現在の私の生活を振り返ってみると、自分自身どれだけ機会に頼っている生活をしていて、どれだけ機械に助けられているのかということを改めて実感することができた。映画の中のように普通に街中をロボットが歩いていたり、家事をしていたりするような世界ではないが、現在の私たちの世界にも生活に必要な洗濯機や食器洗い機、冷蔵庫、冷暖房など家電だけでなく、いまや欠かせないものとなったテレビやパソコン、携帯電話など多くの機械が私たちの周りにはあふれかえっていて、私たちの生活を支えてくれている。それが一気になくなってしまったら人々は生活が出来なくなってしまうのではないかと心配になるのである。も

ちろん多くの機械が私たちの生活の中に存在することで、私たちが大きな恩恵を受け、便利な生活を送れているのは事実だ。しかし、私たち一人ひとりが機械に頼らず、自力で生活することの大切さ・重要さに気がつかないといけないと強く感じた。このことから機械と人間自身の力というものに境界線をしっかりと作って生活すべきだと思う。

B,機械が我々のコミュニケーション能力に与える影響

機械に生活を助けられている現状に気づかされる一方、**人間と人間とのコミュニケーションの大切さ**も改めて実感した。テレビを見ていて楽しいと思ったり、ゲームをしていて面白いと思ったりすることはもちろんあるが、人と実際に話をしていて感じるそれらとはやはり同じようで大きく違うものだと思う。人と対面して実際に会話をすることでしか、相手の表情や声色などを直に感じることができず、そこから相手の気持ちを汲み取ることや相手と面白さや楽しみを共感できることの喜びなどが感じることはできない。私個人ではテレビやゲームで面白いと思っても、やはりその面白さは友人と会話したりしてコミュニケーションをとっている時の面白さとは比べ物にならないと感じる。テレビやゲームの機械の画面を見ていて感じる楽しみや面白みだけでなく、人間同士でのコミュニケーションだからこそ得られる何かがあることを私たちは忘れてはいけないし、もっと人間同士のコミュニケーションを大切にしなくてはならないと強く感じた。

さらに、これからますます機械などが発展するにつれて、それにともない私たちの生活にもさらに機械が入り込み、生活がどんどん機械化し、人間離れしていってしまうのではないかと不安を感じる。例えば仕事の現場において、メールや電話など直接相手に会わなくとも連絡を取ることが可能になり、以前より人と面と向かって対話する機会は減少しただろう。また、子供たちも昔は友達同士連れ合って公園などで遊んでいたのが、いまや遊び相手がWiiやプレーステーションなどのゲームに変わり、テレビやゲームの画面と向き合ってばかりで生身の人間との会話は明らかに減ってしまっているだろう。このままどんどん私たちの生活の機械化が進んでいけば、もちろん利点も多くあるのは事実だが、人間同士のコミュニケーション不足となり、コミュニケーション能力の低下が引き起こされるのは間違いない。世界全体がそのように機械やロボットばかりを相手にし、人とのかかわりを求めないような世界になっていくのなら、コミュニケーション能力の低下など何の問題もないだろが、そういうことにもいかないだろう。**特にこれから社会に出て行く子供たちのコミュニケーション能力とゲームとの関係、どのようにそれを改善していくかがこれから大きな問題となるのではないだろうかと思う。**

C,改良や新製品の開発

また、この映画のような状況はロボットの側からしたらものすごく悲惨で残酷なことをしているなと改めて気づかされた。映画の中ではURS社の新型ロボットNS-5が出来たらすぐに前の型のNS-4は回収され、保管庫に送られ用無しとなっている。これは映画の中のこのロボットたちに限らず、われわれの生活する現実社会でもよく見られることである。例えば、携帯電話の新しい機種が出たら、壊れていなくても機種変更をする人は多い。また、携帯電話だけでなくデジタルカメラやオーディオ機器などにも当てはまる。人間にとっては機能がグレードアップしたり、本体が軽量化されたりと利点ばかり手に入るのだが、捨てられたり、回収されたり、廃棄される機械

にとってはとてもひどいことである。もちろん映画の中のNS-4やNS-5のように人型をしているわけでもないし、サニーのように感情を持っているわけでもないので実際つらさや悲しみを感じていることはないのだけれども。また、このような使い捨て状態が進めば、捨てられた機械がごみになり、続々とごみが増え、環境にも悪影響を及ぼすだけである。我々は自分たちが生活しやすい世界を求めるあまり、地球にも後に地球を担っていく子孫たちにも大きなダメージを与えているのが現状なのである。このように一見いいことばかりのように見える新型開発とか機能性アップといったことは、あくまでも人間のエゴにすぎず、裏には色々な問題が潜んでいる。私たちは今の自分たちの利益ばかりを気にしているばかりでなく、後々のことも考え、現在のような機械の使い捨て状態について考えなおすべきだと考える。

⑧学んだこと・得たもの：

ロボットや機械が私たちの生活において大きな支えとなっていることは事実であるが、あまりにもその安全性や機能の正確さを信用しすぎることはよくない。私たちは、人間自身の力で何かを成し遂げることの大切さを忘れずに、ロボットや機械の力と自分たちの力との間にある程度境界線を引くべきだ。そしてロボットに頼り過ぎない人間らしい生活が出来るように心がけるべきである。

⑨SUMMARY：

It is true that robots and machines are important support for our life. But it is not good that we have too much confidence in their safeties and functions. We should keep in mind the importance that we work out something by our own abilities, and we have to separate a power of robots from that of human beings. In addition, it is important to live not depending on robots and machines too much.

《参考DVD》

『アイ、ロボット』 (NS-4&NS-5画像　引用)

発売元：20世紀フォックス・ホーム・エンターテインメント・ジャパン　発売日：2005/07/07　　監督：アレックス・プロヤス

出演者：ウィル・スミス / ブリジット・モイナハン　他

《参考文献》

『われはロボット』　〔決定版〕

著者：アイザック・アシモフ　訳者：小尾芙佐　発行所：早川書房　(2004年)

《参考ホームページ》

Hondaホームページ (ASIMO画像　引用)

http://www.honda.co.jp/robot/

ZMPホームページ　(nuvo画像　引用)

http://www.nuvo.jp/nuvo_home.html

三菱重工ホームページ　(wakamaru画像　引用)

http://www.mhi.co.jp/kobe/wakamaru/

http://www.hss.ocha.ac.jp/psych/socpsy/akira/media/vr_game/vr_game.htm

あ と が き

大阪教育大学米文学研究室出版の論集も、今回で5作目となりました。2003年に『アメリカ～エンターテインメントの世界』で始まった出版は、毎年新たなテーマを模索しながら、『日本で見つけたアメリカ～戦前日米交流史～』(2004)、『米文学史のなかのアメリカ文化研究』(2005)、視点を変えた前回の『ジャパニーズ・ポップ・カルチャー2006～日本の若者・大衆文化のいま～』(2006)と続き、そして、今回もまたいろいろな苦難を乗り越え、完成の運びとなりました。

様々な学内外の忙しさのため、なかなか思うように進められない時期もありました。また、例年以上に執筆者が集まり、個人研究費の範囲内では、例年のように美しいカラー写真を何ページにもわたり掲載した口絵の部分をつけることができないという、予算面での悔いも少し残してしまいました。

また新しい時代の「映画を扱った論文」ということで、著作権の問題に関しても、少々の不安がありました。勝手に写真を使用してもよいものだろうか、俳優の写真や企業のロボットの写真などの扱いはどうしたものかという迷いもありました。この件に関しては、「(社)著作権情報センター」に直接問い合わせ、結果的には、著作権法第32条に照らし合わせ、「研究のための引用」として使用すればよいとの返答をいただき、学生たちにも、執筆上の注意として周知しました。
(第三十二条　公表された著作物は、引用して利用することができる。この場合において、その引用は、公正な慣行に合致するものであり、かつ、報道、批評、研究その他の引用の目的上正当な範囲内で行なわれるものでなければならない。)

ともあれ今年もなんとか、このような形ではありますが、授業成果のひとつの結晶が、新時代の研究教育に対する一提案として誕生しました。例年のように、今年もこれを日本国内の大学図書館、公立図書館のみならず、海外へも発送したいと思っています。そして、今、OKUが進めているインターネットによる成果の公開に参加し、全世界に向けて授業現場の情報提供に協力していきたいと思っています。

幼い論文も散見されますが、何年か経つと、やがて「あの頃は若さにもあふれていたんだなぁ」と感じる日が来るのかもしれません。ひとつの記念碑にもなりそうです。

橋本　賢二

平成 20 年 2 月発行(February, 2008)

実学としてのアメリカ文学研究

—歴史・人物・作品・映画から学んだこと—

Practical Studies of American Literature :Useful Lessons from History, People and Works

発行者　大阪教育大学　米文学研究室
〒582-8582　大阪府柏原市旭ヶ丘 4-698-1

OSAKA KYOIKU UNIVERSITY
(Faculty of American Literature)
4-698-1 Asahigaoka, Kashiwara,
Osaka, 582-8582 JAPAN.

編　著　橋 本 賢 二
Editor & Author : Kenji Hashimoto

印刷所　株式会社アイジイ
〒531－0072　大阪市北区豊崎7－7－7
TEL(06)6371－0321

実学としてのアメリカ文学研究

― 歴史・人物・作品・映画から学んだこと ―